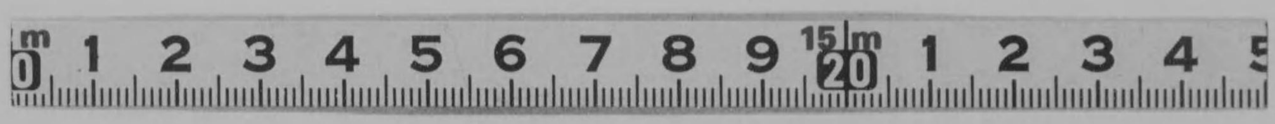
始点



355 69 に

死せる魂

下卷

露國 ニコライ・ゴオゴリ著
森田草平譯

大正
6. 7. 9
購求

凡例

『死せる魂』が農奴の制度を知らなければ、一寸理解し難いところの有るやうに、『檢察官』も檢察官の如何なるものかを呑込んで居なければ、一寸解らないところが有るかも知れない。併し注意して讀んで行けば、讀んでる間に自から其性質も解つて來よう。恰度、我國の軍隊の特命檢閲使のやうなもので、それが先觸れなしに不意に遣つて來るらしい。

『死せる魂』がフィッシャア・アンウイン出版の英譯を基礎として、レクラム版の獨逸譯を參考としたやうに、『檢察官』はレクラム版の獨逸譯を基礎として、スコット・ライブラリイの英譯を參考にした。獨逸譯でも英譯でも曖昧なところは、露西亞の原作に索ねるだけの勞を取つた。

大正六年六月

森田草平識す

本卷目次

第十二章　チヽコフ、又は戀の悲哀……一
第十三章　千八百十二年の古ぼけた遺物……七四
第十四章　二人の極めて風變りな人物の話……一〇二
第十五章　奢侈と赤貧……一八六
第十六章　二通の遺書、市場、辯護士、並びに聖者……二五〇

附錄

戲曲　檢察官……一

死せる魂　下卷

露國　ニコライ・ゴオゴリ著

森田草平譯

第十二章　チ、コフ、又は戀の悲哀

何故と訊かれるかも知れない、何故そんなに慘目な事ばかり描くか、曠野の中から、我帝國の遠い隅々から人民を掘り出して來て、我々の生活の不完全な方面ばかり描くのかと。が、作者の性格が自分自身の不完全を意識しながら、慘目な事より外に、曠野の中から、帝國の遠い隅々から人民を掘り出して來て、我々の生活の不完全な方面より外に描くことが出來ないとすれば、それを如何しよう？で、此處に我々は再び

曠野の中へ到着した、再び遠方の一角に探り當てた。が、全體として何んな一角ぞ、何んな曠野ぞ！

或無際涯な、角堡や砲臺のある堡壘の巨大な急斜面のやうに、山續きの高地が數千ヴェルストに亘つて擴がつて居た。際のない平野の廣がりを横切つて、或時は粘土質や石灰石系統の垂直の絶壁に途切れながら、其底に溝や水道を拵へたり、又或時は人の目を喜ばすやうな丘陵に扛起して、羊の皮の外套でも被けられたやうに、伐り倒された樹々の間に萠え出した若草に蔽はれたり、最後には何かの奇蹟で斧の刃を免れた暗い森の茂みに蔽はれたりしながら、浩蕩として其進路を續けたものだ。河は、或時は其河床に忠實にして、鋭い角度や圓味を帶んだ曲線を示すかと思へば、或時は遠方の牧場の中へ延長して、數回曲り蜿つた後、太陽の下に火のやうに輝く。それから欅の木や、秦皮の木や、赤楊の林の中に隱れて、其處から橋梁や、水車や、井堰などと一緒に勝誇つて出て來るのである――それ等のものは又一足毎に此河を追懸けて居るやうだ。

此處には全植物王國のいろんな標本が集つて居た。樫や、楡や、野生の梨や、楓樹や、櫻の樹や、茨又は蕁麻の木が蔓に成つた蔦や、蛇麻草と一緒に、互に他の成長を助けたり妨げたりしながら、頂上から麓まで山腹一面に匐ひ絡はつて居る。で、それ等の草木の青々とした頂冠と交つて、地主の家の赤い屋根が高く現はれた。百姓の小舍の尖頂や卍字細工は地主の家の彫刻をした露臺や、大きな半圓形の窓の後ろに、背景の中に隱されて居るのだ。で、これ等の屋根や樹木の上に、古い教會が五つの輝く金色の圓頂閣を高めて居る。それ等の圓頂閣の上に雨曝しの鍍金をした十字架が載つて居る。遠方から見ると。金貨が火の樣に燃えて燦めきながら、支柱もなく、空中にぶら下つて居るやうに見えた。で、これ等のものは皆――屋根も、木の梢も、十字架も――河の中に逆樣に成つて美しく映つて居た。河には空洞の醜い柳の木が、或は水中に、或は水の淵に立ちながら、黄色い睡蓮と共に流れに浮ぶ綠色の漉青に包まれた

枝や葉を下に垂れながら、此の驚嘆すべき反映を眺めて居るやうに見えた。

長い樫の樹の並木道から近づいて行く、此の繪のやうな村の持主は誰ぞ？並木道は友愛の抱擁でもしようとするやうに、垂れ下る枝を差出しながら、又來客を家の正面まで案内しながら、禮儀正しく旅客を迎へるのだ。此の地主の家は遠方から其二階を見ることが出來た。今其正面に立つて見ると、一方には尖頂や彫刻した破風を見せながら立つて居る一列の百姓の小舍を控へ、又一方には金色の十字架の輝いて居る敎會を控へて居る。此迷宮は一體何といふ幸福な個人に屬して居ることぞ？

トレマラカンスキイ地方の地主で、名はアンドレイ・イワノヴッチ・テンチョートニコフ、今年三十の、未だ妻も娶らない、幸福な若者に屬して居るのだ。

彼は何んな人間か。何んな役に就いて居たか。何んな性質で、何んな才能を有つて居たか。私どもは彼の隣人に訊いて見なければならない——讀者よ、彼の隣人に。或隣人は次の樣に皮肉な文句で自分の說を發表した。『彼奴は土臺獸類ですよ。』十ヴェルストも離れた隣村に住んで居た或將軍は言つた。『彼奴は決して阿呆漢と云ふ譯ではない。が、碌でもない思想を一杯頭腦に詰め込んだものだ。私も少しは彼奴の利益に成つて遣る積りだ。聖彼得斯堡ぢや、私も滿更勢力が無い譯ではないからね。あの何でさへ——』が、將軍は其言葉を言ひ切らずに仕舞つた。地方警察署長は如何かといふと、彼は次の樣に答へた。『あの男には何處か下劣なところが有る——えゝ、野良久良漢ですよ。私も明日は彼奴の未拂金を取立てに行かなくちや成らないのですよ。』此村の百姓どもは、お前方の主人は何んな性質の人間かと訊かれた時、皆默つて何とも答へなかつた。して見ると、彼等の意見も主人に取つて餘り都合の好いものではないのだ。

が、公平な處を言ふと、彼も決して惡い人間ではない。只、此世の中へ邪魔に出て來たのだ。全然役に立たない人間も此の廣い世の中には隨分澤山に有ることだから、テンチョートニコフも左樣いふ仲間の一人だと云つて何處に差支へがあらう？

通則として、彼は毎朝非常に遅く起きた。で、眼を擦りながら、長い間寢床の上に坐つて居た。彼の眼は不幸にして極めて小さいのだが、それにも拘はらず、此仕事は隨分長い間續いたものだ。其間、下男のミカイロは手に金盥と手拭とを捧げながら、扉口に立つて居た。可哀相に、ミカイロは一時間も其處に立つて居た。又次の一時間も。それから彼は一度厨房へ行つて、再び取つて返した。が、彼の主人は矢張眼を擦りながら寢床の上に坐つて居た。最後に彼は漸と寢床から起き上つて、身體を拭いて、寢間着を被りながら、お茶と、珈琲と、コヽアと、沸かした牛乳とを飲みに客間へ出て行つた。彼はこれ等の物を悉皆少許づゝ啜りながら、客赦なく麪包を喰ひ散して、座敷一杯に煙草の灰をばらゝ撒くのだ。彼はお茶を飲むだけに二時間も坐つて居た。で、それぱかりではない。彼は冷たい紅茶を一林飲んでから、庭園中を見渡す窓の側へ歩み寄つた。で、其窓の側で、毎日次のやうな光景が演ぜられる——

第一、グリゴリイといふ料理番を勤めて居る家の奴隷が家事取締のペルフィリエフナに向つて、次のやうな言葉で呶鳴り散らした。

『此の不器用な、圖體ばかり大きい、面の皮の千枚張り奴！此の碌でなしの下司女奴！些と口でも窘んだが可かろ、此の可厭な婆ア奴！』

『うむ、お前こそ口を窘んだが可いのだ』と、碌でなしの婆アは手で相手を侮辱するやうな眞似をしながら叫喚いた。ペルフィリエフナは、自分が錠や鍵を懸けて藏つて置く乾葡萄や果實饅頭や、其他いろんな旨い物が所好であるにも拘らず、彼女の行動に於ては極めて女らしくない女であつた。

『お前は羊と共謀になつて居るのだ、此の貯藏所の盜人奴！』

『左樣だ、羊は恰度お前と同じやうな泥棒だよ。お前は旦那樣が御存じないと思つて居るのか。如何して、旦那樣は其處にお坐でだよ、其處に聽いて被坐しやるんだよ。』

『旦那が何處に被坐しやると？』

『其處に、窓の所に腰掛けて被坐しやるだよ。何も彼も見て被坐しやるだよ。』

又、實際主人は窓に腰掛けて、何も彼も見て居た。

此騷動に輪を懸けて、或下男の子供が母親から思ひ切り頭を毆打されて、聲の頂邊で泣き出した。それから又一匹の野良犬が厨房から逃げ出すとて、料理番から煮湯を打掛けられたので、きやん〳〵吠え出した。簡單に言へば、あらゆる物が聞くに堪へないやうな泣聲を立てゝ、叫喚いて居た。主人はそれを皆見もすれば聞いても居た。で、耐らなく成つて、何事を爲ようにも手に着かなく成つた時、初めて最う少し靜かにしろとだけ言つた。

午餐の二時間前に、彼は自分の書齋へ這入つて、眞面目な文學上の仕事に取懸つた。其仕事といふのは有らゆる見地から——卽ち政事上からも社會上からも、宗敎上からも、哲學上からも——此の露西亞全體を抱擁しようと企てられたものである。彼は我國の歷史に關係した有らゆる困難な問題を解決しようとした、又我國の將來に關しても明快な判斷を下さうとした。一言にして云へば、現代の人々が喜びさうな、あの形式と流儀に從つて萬事を成し遂げようとしたのである。が、此の偉大な計畫も只心の中の考へにのみ限られて居た。我々〳〵の著述家はペンを舐めた。さま〴〵な圖畫が紙の上に表はれた。それから何も彼も傍へ片寄せて、一冊の書物が手に取られた。で、其書物は午餐の時まで下に置かれない。肉汁を啜りながら、焙肉や、サラダや、時には饅頭さへ口にしながら讀まれるのだ。で、其結果或皿は冷たく成り、或皿は手も附けずに下げられる。此後で煙管が取上げられ、珈琲が飲まれ、更に自分一人で將棋の勝負が始まるのだ。其後夕飯まで此男が何を爲て居たかといふことは、一寸言ひ難い。彼は單に何にも爲なかつたやうでもあるのだ。

で、此の全然孤獨な三十歲の若者は、絕えず頸帶も着けずに寢間着を着て坐つたまま、斯うしてぼんやり時間を潰したものだ。彼は散步にも出なければ、四邊の眺望を貪るために二階へ上らうとさへしない。彼は又窓を開けて室內に新鮮な空氣を入れやうともしない。で、此村へ訪ねて來た者が嘆稱を禁じ得ない村の美しい景色も、其の

所有者に取つては宛然存在しないのも同じ樣であつた。これで見れば、アンドレイ・イワノヰッチ・テンチョートニコフが露西亞に未だ其跡を絶たない、昔は無精者とか野良久良漢とか言はれて居た、今は何と言はれるか私も知らないやうな、あの一種の人間の階級に屬して居ることは、定めて讀者にも解つたことであらう。斯んな性格は生れ立ちから左樣なのか、それとも其人の閉籠められて居る陰鬱な事情から生れた、後天的に發達したものであらうか。此質問に對する答へとしては、此奴さんの生立と教育との歴史を語つた方が一層好いかも知れない。

有らゆるものが徒黨して此男を妙な人間に造り上げたやうにも見えた。才氣の鋭い考へ深い性質で、何處か弱々しい體格を有つた十二歳の少年として、彼は當時非常に有名な校長に依つて率ゐられた學校へ這入つた。青年の偶像で、驚歎すべき教師で、比較するものゝないアレキサンダア・ペトロヰッチは人間の性格に透入する天賦の能力を備へて居た。彼が露西亞人の性格を了解して居たことは素張しいものだ……就中子供を了解して居た。又能く彼は其子供を動かす術を心得て居た……惡戯者が何か惡戯をした後で、自ら進んで彼の許へ白狀しに來ない者は一人もなかつた。が、そればかりではない。其惡戯の遣り手は頭を垂れて、閉口して校長の前を引退るのではない。何かで自分の過失を償はうと心から望みながら、眞直に頭を立てゝ引退がるのだ。アレキサンダア・ペトロヰッチの非難には、非難其者の中に何か知ら奬勵するやうな、『前へ、前へ！　倒れることなぞ氣にしないで、出來るだけ早く立上れ！』と言ふやうな處があつた。彼は野心を以て人間を前へ突出す力だと言つて居た。そして、自ら野心を奮ひ起すやうに奬勵したものだ。彼に在つては、行儀が好いなぞと云ふことは問題には成らない。彼は始終言つて居た。『俺は腦力を要求する、其他には何物をも要求しない。知識を獲ることに全力を注いで居る者は惡戯なぞして居る隙間がない、惡戯も自然に止むもんだ』と。

此校長は餘り多くの弟子を有つて居なかつた。そして、大部分は自分で教へて居た。

彼は街學的な添物や、華々しい人生觀や思索なぞ略して、直ちに問題の核心に觸れる術を理解して居た。で、年の行かない子供達にも、知識が自分達に取つて缺くべからざるものだと云ふことが十分腹へ這入つたやうに見えた。只彼に依つて選擇せられた學問の種類は、人間を立派な市民に仕上げるために適用されるものばかりであつた。學課の大部分は、未來に於て青年を待つて居るものに關する話說ばかりで成立つて居た。彼は非常に旨く出世の道を描破する術を心得て居た。で、子供達は未だ學校の机に凭れて居る時分から、心も魂も官廳の職務に浸つて生活して居た。校長は何一つ隱さないで、子供の前に人生の徑路に起る慘苦や障碍を、又其子供の前途に横はる有らゆる試練や誘惑を赤裸々に描いて見せた。彼は彼自身有らゆる階級と職業とを經て來たやうに、有らゆることを知つて居た。

彼の生徒の間に著しく野心の勃興したのはこれが爲で有つたらうか、それとも此の並外れた先生の眼中には、何か知ら青年に向つて、『前へ、前へ！』――露西亞人には非常に好く知られた言葉で、其敏感な有機體の上に奇蹟を働くものである――と言ふやうなものが有つたためであらうか。何れにしても、青年どもは最初の出立點から艱難を求めて、極度の精神の堅實を示す必要の有るやうな事情の下に、最大の困難と戰ひながら、常に活動しようと願つて居た。斯くの如き教程を經て卒業する者は極めて少數であつた。が、それ等の少數者は皆力の人たることを證明した。彼等は最も不安な地位にあつても退避がなかつた。然るに彼等よりも一層悧巧な面々が皆其地位に耐へ得ないで、詰らない個人的な苦痛のために有らゆるものを打捨てたものだ。でなければ、いよ〳〵鈍感に、懶惰に流れて、終ひには賄賂取りや惡漢の虜と成つたものだ。が、彼等は決して動搖しない。人生と人間と二つながら知り拔いて、眞の知識を有つて居る處から、惡い氣質の者の上にも有力な影響を及ぼしたものだ。

此驚歎すべき先生は少年時代に於けるアンドレイ・イワノヰッチを心から動かしたものだ。野心ある青年の火のやうな心臟は上級へ編入せられると考へるだけでも胸を

跳らせた。で、實際テンチョートニコフは、十六歳の時、同じ年頃の他の青年を遙かに抽出たので、最良の生徒の一人として最上級へ編入する値打の有るものと數へられて居た。尤も、當人はそれを信じて居なかつたけれど。テンチョートニコフに取つては、何の點から見ても此先生より好い先生が求められようか。が、運命ばかりは如何とも仕難い。恰度此青年が選拔者の級へ編入せられた時に當つて――それは實に彼の熱望して止まなかつた處である――此の有名な先生は、此人の奬勵の言葉ばかりが彼を甘い混亂に投げ入れた先生は、病氣に罹つて、間もなく死んで仕舞つた。あゝ、此青年に取つて、それが何んな打擊であつたらう！初めて手頼る人を失つた彼の悲歎は恐るべきものであつた。彼には學校の有らゆるものが一變したやうに見えた。

アレキサンダア・ペトロヴィッチに代つてフョードル・イワノヴィッチと云ふ校長が赴任して來た。骨を惜しまない、好い人物ではあつたが、前の校長とは全然違つた物の見解を有して居た。第一級の生徒達の拘束されない、自由な行動を見て、彼は迚も馴致し難い獸類でも押附けられたやうに考へた。で、先づ彼等の間に表面的な秩序の形式でも植ゑ着けようとした。例へば、彼は生徒どもに不斷の沈默を守るように、何んな事情の下にも屹度二人連れでなければ歩かないやうに命令した。彼は又二人づゝ並んだ生徒から生徒までの距離を杖で測り出した。食卓では、外見の見好いために、能力よりも寧ろ身體の大きさに從つて生徒を配列した。それがために、馬鹿な生徒が上等の食物を取つて、悧巧な子供が其殘剩を頂戴するやうなことに成つた。總てこれ等の施設は生徒側に不平を喚起した。特に新しい校長が前の校長の實施に直接反對して、彼に取つては腦力や目醒しい進歩は何でもない、自分は只品行を尊ぶ積りである、若し或生徒が學問は餘り出來ずとも行儀さへ好かつたら、悧巧ではあるが惡戲な生徒なぞよりもずつと前に進ませる積りだと公言した時、不平の聲は一層高く成つた。が、フョードル・イワノヴィッチは如何しても其目的を達することが出來なかつた。惡戲が禁じられたので、更に祕密の惡戲が始まつた。晝間は何も彼も時計の針のやうに整然と

行はれたが、夜間に成ると滅茶苦茶な騒ぎが始まるのだ。

我々の若い友人なるアンドレイ・イワノヰッチは極めて平靜な性質であつた。彼は宵宵毎に校長の居間の窓の正面で、いろんな惡戯をして遊ぶ生徒どもの騒ぎにも加はらなければ、又坊主が餘り悧巧でないからと云ふので、聖物を侮辱して遊ぶ彼等の仲間入もしなかつた。否、夢の中に在つてすら、彼の心はそれ等の物の神聖な起源を認めて居た。が、彼はなほ頸垂れて居た。彼の野心は目覺されたが、彼のために開かれた活動的職務の道筋は未だ一つも開かれなかつた。恐らく斯んな野心は全然目を覺さなかつた方が好かつたかも知れない。彼は教授連の熱心な講義に耳を傾けた。そして、無暗に昂奮なぞしないで、解り易い言葉で語ることを心得て居た、死んだ先生のことを想ひ出して居た。彼の出席しなかつた學課はない！　又論じられる程の問題を彼の聞き直したこともない！　醫學でも、化學でも、哲學でも、法律でも、又人類の一般的歴史でも――それが皆教授は三年掛りで漸と序論だけ讀むことが出來たと云ふやうな、恐ろしく大仕掛な物ばかりなのだ。が、有らゆる講義は皆形のない團塊と成つてアンドレイの頭腦の中に彷つて居た。生れ附きの常識のお蔭で、彼も斯んな風にして教へられべきでないとは意識して居た。が、正當な道は自分も知らないのだ。で、彼は屢々アレキサンダー・ペトロヰッチのことを想ひ出して、時には餘りの悲しさに自分でも如何して可いか解らない程悲しく成ることもあつた。

が、青年はそれが未來を有つて居ると云ふ點に於て幸福なものである。彼が學校を出る時期の近づくに伴れて、彼の心は一層猛烈に波打ち出した。彼は一人で言つた。

『確かにこれは人生ではない。これは只人生に對する準備である。眞の人生は表面に横はつて居るのだ。それが活動の舞臺である』と。で、如何なる旅客にもあれ程の印象を與へるやうな、驚くべく美しい小さい村の一角にも目さへ與れないで、又兩親の死體にも從順な崇敬を拂はないで、彼は有らゆる野心家の習慣に從つて、一人彼得斯堡へ赴いた。彼得斯堡は、人も知れる如く、總て我國の活氣ある青年どもが、或は職

務に就かうとして、或は立派な者に成らうとして、仕事をしようとして、或は單に色も香もない、氷のやうに冷酷な、虚僞に充ちた社會の表面を掬はうとして、露西亞の有らゆる隅々から集まつて來る場所である。

が、アンドレイ・イワノヰッチの野心ある憧憬は、其出立點に於て、四等官なる伯父のオヌフリイ・イワノヰッチのためにすつかり氣勢を殺がれた。伯父は人間の一番大切な點は手蹟を好く書くと云ふことである、それが出來なけりや、何人も內閣の各省を始め、其他如何なる官廳へも這入ることは出來ないのだと宣言した。が、非常な困難と伯父の勢力の補けとを藉りて、テンチョートニコフも最後に或省に於ける或職務を手に入れることが出來た。初めて明るくて壯麗な、寄木張の床と假漆を塗つた寫字臺とのある、帝國の最も偉大な大官が其處に坐つて、全國の運命を支配して居るやうな會堂へ案內されて行つた時、又立派な紳士の數隊が喧ましいペンの音を立てたり、頭を一方へ傾けたりしながら、頻に書き物をして居るのを見た時、又彼等が彼を或卓子の前に坐らせて、直に一綴の書類——故と餘り重要でないものを撰んだのだ、何でも半年許りの間訴訟の續いて居る、三留布の金子に關した通信らしい——を寫せと言つて宛がはれた時、一種の非常に馬鹿々々しい感覺が彼の心を占領した。

彼は自分が何處かの小學校へ這入つて、再び全課程を遣り直さなくちや成らないのだと云ふやうな氣がした。何か自分が惡戲をして、其罰に上級から下級へ落されたやうな心持である。彼の周りに腰掛けて居た紳士どもは皆學校の生徒に酷似して居た。其時彼には以前の課程の方が現在のそれよりも餘程好いやうな、又職務に對する準備の方が職務それ自身よりも餘程優つて居るやうな氣がした。彼は再び學校時代の生活が想はれ出した。で、不意に死んだアレキサンダア・ペトロヰッチが目の前にはつきり顯れて、彼は思はず聲を揚げて泣き出さうとした。室は獨樂のやうにぐる〳〵廻り出した、役人どもや卓子は悉皆ごつちやに成つて仕舞つた。で、彼は漸との思ひで此の一時的な感覺の昏迷に打克つことが出來た。『いや』と、彼は自分で自分の氣を取直し

ながら言つた。『幾許仕事が最初は詰らないものに見えたとしても、俺は一つ働いて見よう！』で、全身の力を心臓と精神とに集めながら、彼は他の者に倣つて自分の義務を果さうと決心した。

少時經つと、テンチェートニコフも自分の職務に馴れて來た。只最初左樣であらうと想像したやうに、それが彼の主要な目的には成らなかつた、如何しても第二義の必要しか認められない。それは自分の時間潰しの手段に過ぎないものとして、自分に殘された時間を一層大切に思はせるやうな役に當つた。四等官なる彼の伯父は、自分の甥もそろ〳〵自分に感心するやうに成つて來たなと考へ出した。其時、不意に此甥が彼を失望させた。

アンドレイ・イワノヰッチの友達の中に――友達も隨分澤山あつた――所謂『苦くされた人々』と稱ばれる二人が混つて居た。此二人は眞實の不正に對して不快の意を示すばかりでなく、自分達の眼に不正と見える物にすら、何んな物でも腹を立てると云ふやうな、不安な、獨特の性格を有つて居た。出發點に於ては善良な人物だが、彼等自身の行爲は亂雜である、彼等自身に對しては隨分思ひ遣りを要求しながら、同時に他人に對しては苛酷を極めると云ふやうな按配で、二人は火のやうに猛烈な言葉と、社會に對して高尚な憤怒を抱いて居ることを證據立てた態度とに依つて、アンドレイ・イワノヰッチの上に力强い影響を與へた。二人は彼を苛々した人間に造り上げた後で、以前には全然注意を拂はうとも考へなかつたやうな、有らゆる種類の些末な事件に彼の注意を喚び起した。其時或局の長官たるフョードル・フョードロヰッチ・リエニツィンは、不意に此若者の不快を招いた。アンドレイは長官の一身に關する諸々の缺點を搜し出した。彼には此局長が上官と會話を交へる際には眞個技巧に充ちた砂糖と變じながら、下僚に物を吩咐ける際には酢酸と迄變ずるやうに見えた。又有らゆる小人の態度に倣つて、此局長は何かお祝ひなぞのある際に祝儀を述べに來た連中を一帳面に附けて置いて、門番の表に載らない連中に對しては何時か復讐をすると云ふ

やうにも見えた。

此結果、アンドレイ・イワノヴィッチは局長に對して積極的な嫌惡の情を感ずるやうに成つた。で、到頭或日彼は非常に傲岸な態度でフョードル・フョードロヴィッチに物を言ひ懸けた。それがために、彼は其筋から謝罪をするか、それが可厭なら辭表を出すが可いと云ふ樣な內命を受けた。彼は直樣辭表を呈出した。四　官　等なる彼の伯父は吃驚して、『基督のために、アンドレイ・イワノヴィッチ、最一度考へ直して呉れ！』と懇願しながら、彼の許へ遣つて來た。『お前はまア何をするのだ？　只單に局長が蟲が好かないと云ふばかりで、折角都合好く遣り出した職務を捨てるなんて？　好く考へて見ろ！　一體お前は何者だ？　これがお前に取つて何だと思つて居るんだい？　で、若しそんな事を一々氣に懸けて居たら、役所に殘つて居る人間は一人もない筈だよ。最一度好く考へ直して見て、お前の其傲慢な心を矯め直すが可い、それから行つて局長に好く辯解をして來い！』

『左樣云ふ譯ぢやありませんよ、伯父さん』と、彼の甥は言つた。『私は別に局長の容赦を乞ふのが可厭だと云ふ譯ではない。私が惡いのですよ。あの人は兎に角局長だ、それをあんな風にあの人に對して物を言ひ懸けたのは私が不都合ですよ。ですが、問題は斯うです。私は他に一つの義務を有つて居る——三百人の農奴と、不始末な所領と、執事としてあの馬鹿者と。私の代りに他の人間が此役所で書類を寫す役に成つたからと云つて、我が帝國は極めて小量しか損失を受けない。が、三百人の農奴が稅金を拂はないと成りや、隨分大きな損害でせうからね。貴方はそれを如何お考へです？　私は一個の地主だ、若し私が私に委托せられたそれ等の農奴や所領を改良したり、面倒を見たりすることに力を盡したら、又若し私が三百人の正直で、醒めた、勤勉な臣民を帝國に供給することが出來たら、何の點から見ても私の功績は局長の一人のそれに——例へばリェエニツィンのそれに劣つて居やうとは思はれないでせう？』

四　等　官は吃驚して開た口が閉がらなかつた。斯んな答へは豫期して居なか

つたのだ。で、少時考へた後で、漸と斯んな風に言ひ出した。『だがねえ、お前、お前が如何して田舎に埋まつて居られるんだい？　何んな社交が百姓どもの間にあると思つて居るんだ？　此處では、少くとも、街の上で將軍や公爵に會はれるんだよ。屹度誰かに邂逅すよ。うむ、町には瓦斯の街燈も有れば、忙しい歐羅巴も手近にある。だのに、田舎は如何だい？　お前の會ふものと云へば、百姓でなければ女子供ばかりだよ。で、お前は何故一生をそんな野蠻な生活の中へ自分から埋めて仕舞ふんだい？』

が、伯父の力ある說法も甥の上には何等の効果を齎さなかつた。後者は官廳の勤めと首府とに飽いて來たのだ。田舎が彼の心を淸新にするに足るやうな、快い休養の場所として、彼の眼の前に現れ出した。其處へ行きさへすれば、彼は有用な活動の一生を送ることが出來るのだ。既に農村の經濟に關する最新の書籍をも掘り出して來て居た。

此會話の後二週間經たない間に、テンチ■ートニコフは少年時代を過した、さまざまな景色の近隣に在つた。例の旅客が幾許稱讃しても足りないやうな、極めて美しい村の一角も餘り遠くはない。彼は既に或場所に就いてはすつかり忘れて居た。で、全然新しく來た旅客のやうな好奇心をそゝられながら、此の宏大な景色に見惚れて居た。で、見よ！　何か知られない理由から、彼の心は不意に動悸の音高く打ち出した。『これは誰の森だ？』と云ふ質問に對して、『テンチョートニコフの所有だ』と答へられた時、道が森の中から出て、遙か彼方に蜿蜒と連なつて居る山々を眺めながら、牧場を貫いて、白楊や戰へる柳の樹や若い葡萄の樹の林に添うて走る時、又其道が橋を飛び越えて、或時は川を右手に見たり、或時は左手に見たりしながら走る時、で、又『これ等の野や牧場は誰の所有だ？』と云ふ質問に對して、『テンチョートニコフの所有だ』と云ふ返辭をされた時、道が再び丘に登つて、一方は平な高原に添うて、小麥や、ライ麥や、大麥やの作物を貫いて走り、一方は又自分が以前旅行したことのある、そして、急に今遠景と成つて自分の前に現れたいろんな場所を貫いて走る時、又夕暮の闇

がおひ〳〵下つて來て、村の突先迄錆の芝草の上に所々立つて居る茂つた樹々の下を縫ひながら、再び道が續く時、そして、百姓どもの小舍が赤い屋根をした地主の住宅や、それに附屬したいろんな建物や、教會の金色に光つて居る圓頂角なぞと一緒に、此處彼處に現れ出した時、彼の心臟の波打つことに依つて、誰に聞かないでも自分が何と云ふ所へ到着したか意識して來た時――其時である、絶えず心の中に鬱積して居た感想が次のやうな言葉と成つて一時に破裂したのは――

『うむ、俺は是迄本當に馬鹿ぢやなかつたのか。運命は俺を斯んな地上の樂園の持主にして呉れた。そして、俺は死んだ書類の謄寫人として、あんな職務に自分の身を縛り着けて置くなんて……自分の斯んな場所を執事に任せて置くと云ふやうな、そして、知らない他人の中に混つて遠方から家政の指圖をして居ると云ふやうな――自分の財産を實際に處理すると云ふことよりも、一ヴェルストも離れた、自分が一度も足を蹈み入れたこともない地方の狂氣染みた紙の上の處理を撰ぶと云ふやうな、そんな考へが一體何處から出たのだ？　そんな事に係つてりや、俺は只矛盾や撞着を山のやうに仕出來すばかりだ！』

が、最一つの光景が彼を待つて居た。主人が急に到着したと聞いて、百姓や女どもは皆露臺の上へ集まつた。そして、ソロキ（ウラルの百姓の女どもが織る麻の頭飾りで、染色した羊毛や纖維で掬ひ縫ひをしたもの）だの、キッチ（同じく頭飾り）だの、手巾だの、女の上衣だの、男の鬚だのが、美しい人民の有らゆる繪のやうな添物と共に、『あゝ、お前樣、私どもの救主！』と叫喚きながら、彼を取捲いた。そして、老婆や老婆どもは彼の祖父や曾祖父のことを言ひ出して、思はず涙に暮れた。彼も又涙を流さずには居られなかつた。そして、一人で言つた、『如何して斯んなに衆皆から愛されるのだ！　何故？　俺は此人達を見たこともなければ、此人達のために何一つ骨折つたこともないぢやないか！』と。で、彼は彼等の愛が無益に終らないために、從つて又自分が本當に彼等の『救主』と成り得るために、彼等と勞働を共にし、彼等の缺乏

に氣を附けて遣らうと決心した。

其處で、彼は所領の支配を自分の身に引請けて、さま〳〵な整理を行はうとした。彼は先づ地主に捧げることに成つて居た勞働の幾日かを百姓自身に許された時日に加へて、お邸の旦那に對する强請的勤務を減らして遣つた。彼は又監督の馬鹿を免黜した。何も彼も自分で檢査しようと云ふのである。野良にも自分で出れば、穀打の庭にも、稻村の近くにも、水車場にも、陸揚場にも自分の顏を出した。そして、筏や平船の荷の積み卸しを見張つて居た。

『又彼處へ來たよ、足の速い奴さんが來たから見ろよ』と、百姓どもが言ひ始めた。其間彼等はだん〳〵怠け出して、頭の背後を搔いてばかり居るやうに成つた。

が、これも長くは續かなかつた。百姓は速く土地の層を知るものである。此場合に於て、彼等は主人が彼樣して始終油斷なく立廻つて居るものゝ、本當に彼等を取扱ふ道に到つては何一つ知らないのだと云ふことを直に見て取つた。又彼は始終學者らしい態度で物を言つて居るものゝ、それも此目的には副はないのだ。で、其結果は斯う云ふことに成つた。主人と百姓とは互ひに相手を理解し合つて、協力して働くことが出來なかつたのみならず、同じ唄を唄ふことも出來ないのであつたと。

テンチョートニコフは直に、何でも自分の圃の上にある物は百姓の圃の上にある物程好くは昌へないと云ふことを發見した。種子は早く下したのだが、收穫は晩くでなければ上つて來ない。而も見たところ百姓どもは皆好く働いて居るのだ。彼は自分に出て仕事の監督さへした。そして、好く働く百姓には一々少量づゝのブランディを宛てがつたものだ。百姓どものライ麥は穗を出した、彼等の燕麥も豐かに收穫を上げた、彼等の稷も彼の種子が未だ芽を出さない前から盛に莖を延ばして居た。一言にして云へば、彼は百姓どもに對して隨分いろんな特權を頒けて遣つたにも拘らず、彼奴等は單に自分を欺いて居るのだと云ふことを認めるやうに成つた。

彼は百姓を捕へて詰問もして見た。が、只次のやうな返辭をされるに留まつた。『旦

那、私どもが如何して旦那の利益を喜ばずに居られませう？　旦那御自身も、私どもが鋤いたり、種子を蒔いたりして居た時、好く働くと仰有つて下さつたぢやありませんか。旦那は私どもが好く働くと云つて、一杯づゝ火酒を御馳走して下さいましたよ。』

これに對して、何と答へることが出來るものか。

『だが、何故今と成つてあれが皆惡く成つて仕舞つたのぢや？』と、主人は訊いた。

『それは存じませんよ。屹度何かの蟲が地面の下から種子を喰つて仕舞つたのでせう。又今年は何んな夏ぢやつたか考へて御覽じませ。全然雨と云ふものは一粒も降りませんでしたよ。』

が、主人は何んな蟲も百姓の收穫だけ遠慮して下から喰べなかつた、又雨も妙な工合に降つたものだ、百姓だけに恩寵を下して、地主の圃には一滴も雨を降らさないなどは怪しからぬと考へた。

女どもを處理することは、彼に取つて一層困難であつた。彼等は絶えず何かに托辭けて仕事を離れようとした。そして、始終主人の賦課に對して不平を瀉して居た。眞個妙な話である！　彼は全然麻布だの、苺だの、菌だの、胡桃だのと云ふ貢税を廢して仕舞つたのだ。彼は又女どもの勞働の時間を減らして遣つたら、それを家事の整理に捧げるに違ひない、即ち所天の衣類を繕つたり拵へたり、又は野菜圃を耕作するだらうと考へて、かつきり勞働時間を半減して、其餘は彼等を解放して遣つた。が、彼の思つたやうなことは一つも起らなかつた。

懶惰と、喧嘩と、無駄話と、其他有らゆる種類の軋轢が女性の間に起つた。それがために、宿六どもは絶えず次のやうなことを言つて彼の許へ遣つて來た。『旦那、何卒あの女の惡魔奴を追拂つて下せえ、えゝ、私の嬶ですよ、彼奴は本當に惡魔でさ。あんな奴とは迚も一緒にや暮せませんね！』

彼は心を硬くして、嚴重に取締つて見ようとした。が、如何して此男に嚴重に取締ることなぞ出來よう？　女は如何にも女らしい手段に訴へて、弱々しく、病氣に成つ

て、おい〳〵泣きながら、見るも恐ろしい、胸の惡く成るやうな繦褓を身體に引懸けて――そんな物を何處から捜し出して來るのか、神樣でなけりや知らない！　――彼の許へ遣つて來るのだ。『彼方へ行け、自宅へ歸れ！　兎に角俺の眼に見えない處へ行つて呉れ！　神樣がお前を補けて下さるよ』と、憐れなテンチ・ートニコフが言つた。で、それから彼は其弱々しい病人染みた女が戸口を出るや否や、恭菜の根に關して隣の女と喧嘩したり、健康な男でも出來ないやうな遣り方で、隣の女の脇腹を蹴返したりするのを見た。

彼は又彼等の間に一つの學校を設立して見たいと云ふやうなことを思ひ附いた。が、それは後に成つて恥かしさに顏も得上げられないやうな、馬鹿々々しい結果に終つた。そんな事を全然思ひ附かなかつた方が餘程好かつたのだ。最後に、斯うして失望が度重なると、彼の熱心もだん〳〵醒めて行つた。

彼は極めて不注意な態度で仕事を監督するやうに成つた。鎌が草叢の中でがさ〳〵音を立てゝ居る間、百姓どもが乾草を堆塚に積み上げたり、又荷車の上に積み載せたりして居る間、彼は直ぐ傍に立つて居ながら、眼はぼんやり遠方を見詰めて居た。又仕事が遠方で進んで居るとすれば、彼の眼は直ぐ手近の物を捜したり、又は川の曲り角なぞを眺めて居た。其岸の上に嘴と肢との赤い貂鼠が歩いて居るのである。彼はそれが嘴で十文字に一尾の魚を銜へて居るのを、それがそれを呑み込んで仕舞ふか、如何だらうと考へてでも居るやうに、珍らし相にそれを見詰めて居た。それから又川向うに今一疋の貂鼠が距離のために白く輝いて居るのを凝乎と見詰めながら、これは未だ魚を捕まへて居ない、只捕まへた方の貂鼠をまじ〳〵と見詰めて居るのだと云ふことを發見した。でなければ、又貂鼠も川の曲り角も見捨てゝ、眼玉を一緒に引釣らせて、頭をひろ〳〵とした空中に投出しながら、野原の香氣を吸ひ込んで、調子の佳い空中の住民が一つの調和した合唱に結び着く聲々に聞き惚れて居た。彼はライ麥の中に笛の音を立てゝ居る山鷸を聞いた、草叢の中にこと〳〵鳴いて居る水鷄を聞いた、

彼方此方飛び廻りながら喧しく囀つて居る紅雀を聞いた、ぱつと空中へ立上りながらきい〳〵啼く沼鷸を聞いた、眼に見えぬ空中の梯子を轉がり落ちて來る雲雀の顫へ聲を聞いた、空に三角形を描きながら、喇叭の音のやうな聲を出す鶴の高鳴きを聞いた。近隣近邊は鳥の鳴く音に滿ちながら、快い反響を返した。が、これですら終ひには彼の心を退屈にした。彼は間もなく野原を訪ふことも止めた。で、執事の報告を聞くことさへ拒みながら、自分の部屋に閉ぢ籠つてばかり居た。

最初の間は近隣の人々も時折彼を訪問した——煙草の臭ひのする、驃騎兵の退職中尉だの、大學を中途で罷めながら、時の新聞や雜誌から拾ひ集めた知識に依つて、極めて決定的な意見を有する大學生だのが遣つて來た。が、これ等の訪問客も間もなくアンドレイを蒼蠅がらせた。彼には彼等の會話が何處か皮相のやうに見えた。彼等の歐羅巴風や親しげな態度が彼の趣味には餘りに不遠慮で明らさまのやうに見えた。彼は何人とも交際を絶たうと決心した。で、それを極めて速急な遣り方で仕遂げたものだ。

或日、有らゆる種類の話題に對する最も快適な、皮層な會話者なる退職大佐が、有らゆる新思想の傳令官なる學生のヴルヴァ・ニコライッチ・ヴィシュネポクロモフと一緒に、政事や、哲學や、文學や、道德や、其他英吉利の財政狀態に就いても長い談話に耽らうとして遣つて來た時、彼は下男をして自分が今自宅に居ないと言はせた、同時に不謹愼にも窓から自分で顏を出したものだ。彼は訪問客の一人と眼と眼を見合はせた。勿論、其一人は齒を咬ひ縛りながら、『此の畜生ッ！』と呟いた。又一人は不愉快の餘り前者に傲つて『豚』と云ふやうな言葉を口にした。で、交際は其處に終つた。其時以來、何人もテンチョートニコフを訪ねて來るものはなかつた。

彼はそれを喜んだ。そして、專ら露西亞に關する大著述の計畫に沒頭した。彼が何んな風にして其著述を續けて居るかは、既に讀者の知つて居られる處である。が、時折此男もすつかり睡眠から覺される瞬間も有つた。郵便が新聞だの雜誌だのを持つて

來て、既に政府部内に於ける重要な位置を贏ち得たり、又は科學其他一般的進歩の上に著大な貢獻を成し得た以前の仲間の熟く知つて居る名前を印刷の上で發見した時、祕密な、穏やかな悲哀が彼の胸を貫いた。そして、彼自身の不活動に對する苦しげな、言葉もなく悲しげな、又優しげな不平が思はず迸り出た。其時彼の生活は憎むべく厭ふべきものに見えた。其時學校時代の過ぎ去つた年月が手に取る如く明々と彼の前に現れた。最後に涙が彼の眼から瀧のやうに流れた。

　此涙は何の意ぞ？　彼の苦しんで居る魂が其涙の中に魂の疾病の苦しい祕密を曝露したのか――以前から彼の中に形を取り始めて居た偉大な内的人物が其輪郭を充さずに濟んだ、それ自身を確立せずして止んだことを曝露したのか。青年時代の無經驗のために、彼も自分が登りたいと望んで居たやうな、障碍と制限とに會つていよいよ強く成るやうな、高い心の狀態に達せずして濟んだことを曝露したのか。有名な彼の先生が餘りに早く死んだことを、今は此の廣い世界の中に、永劫の不決斷のために絶えず壓服せられて居る力を喚び起して呉れるやうな、彼に向つて『前へ、前へ！』と云ふ奬勵の聲を懸けて呉れるやうな人間が一人も居ないことを曝露したのか。此の懸聲たるや、露西亞人が彼の屬する階級の何たるを、商賣や職業の何たるを問はず、到る處渇望して止まないものである。我々に對して、我々の國語で『前へ、前へ！』と云ふ、あの全能の言葉を懸ける術を了解して居るものは誰ぞ？　我々の性格の有らゆる力と素質と有らゆる深さとを知つて、人の心を魅するやうな、あの手の振り方一つで、我々を一層高い生活へ導いて呉れるものは誰ぞ？　何んな涙と、何んな愛とを以て、感謝の念に厚い露西亞人は其人に酬いたことであらう……が、神は其全能の言葉を發する術を知つて居る人間を一人も下さないから、幾世紀も幾世紀も恥づべき懶惰の中に經過した。露西亞人は何時迄經つても同じだ、何時迄經つても未熟の青年である！

或事情が最少しでテンチョートニコフの眼を覺し掛けた。そして、殆ど彼の性格に一種の變化を齎さうとした。戀愛に似たやうな或事が起り掛けたのだ。テンチョートニコフの村から十ヴェルスト許り離れた近村に、一人の老將軍が住んで居た。彼は如何にも將軍らしく生活して居た――客の接待もした、隣人が彼に敬意を拂ふために訪問して來るのを喜びもした、皺嗄れた聲で談話をした、書物も讀んだ、そして、一人の娘を有つて居た――嘗て此世に見られなかつたやうな娘である。時として或男が斯んなやうな女を夢の中で見ることはあらう。が、それからと云ふもの、其男の一生を通じて、彼は其夢ばかり繰り返して居る。其男に取つて事實は永久に消えて、彼は全然無用の人間に成るのである。

彼女の名はウリンカと云つた。彼女は稍變挺な事情の下に育てられたのだ。露西亞語を一言も知らない英吉利の女が彼女を育て上げた。彼女は未だ嬰兒の時分に母親を失くした。そして、父親には彼女の面倒を見て居る暇がないのだ。加之、彼は狂人のやうに彼女を愛して居たから、只彼女を甘やかして我儘にするに過ぎないのだ。彼女は勝手次第に育てられた子のやうに、何事にも我意を張る子であつた。不意に憤り出すと此兒の額の上に深い皺が刻まれるのを見たり、又は此兒が父親と議論するのを見たりした人は此子を非常に我儘な娘と考へたかも知れない。が、彼女の憤怒は只彼女が何か不正な事を、何か召使なぞに對する酷い待遇を耳にした時にばかり發するのであつた、彼女は決して自分自身のために議論をしなかつた、又自分自身を辯護しようともしなかつた。彼女の怒りは、それを向けられた相手が當惑するのを見ると、忽ち消滅した。一言施與を乞はれさへすりや、乞ふ者が誰であるかなぞと云ふことは問はないで、直樣自分の持つて居る總てを與へて仕舞つた。其中へ這入つて居る物ぐるみ自分の墓口を遣つて仕舞ふのが餘りに無法だなぞと云ふことは考へて居る暇がないのだ。

彼女には何處か人に迫るやうな處があつた。彼女が話をする時は、何も彼も彼女の

思想に伴れて動くやうに見えた。彼女の顔の表情も、聲の調子も、手の動き工合も、着物の襞ですら、總てが同じ方向へ靡くやうに見えた。そして、彼女は彼女自身の言葉の後から將に飛んで行かうとして居るかの如くであつた。彼女には何一つ腹臓と云ふものがなかつた。彼女は誰に對しても自分の考へを打明けて憚らなかつた。彼女が話さうと思つて居る時、此世の如何なる力も彼女を默らせることは出來なかつた。加之、彼女の特殊な、人を魅するやうな歩きッ振には、誰でも道を讓らずには居られない程自由な、拘束せられないものが有つた。彼女の面前では惡い人間も怯怯として默つて仕舞つた。最も大膽な、言葉を拘束されない男も彼女には言ふ處を知らないで、周章して行詰つた。それで居て、憶病な男が一生の間に誰とも是程自由に話したことはないと言はれる程、平氣で彼女と話をすることが出來た。そして、會話の初ッ鼻から自分が以前何處かで彼女を知つて居るやうな、彼女の顔容を見たことのあるやうな氣がした。彼にはそれが少年時代のずつと奥の方で、何處か親しい家で、愉快に遊んで居た晩、子供達の群の樂しい遊戯の際中に起つたやうな氣がするのだ。そして、其後長い間其男の思慮ある年配が自分に取つて厄介物のやうな氣がしたものだ。

それと同じ事がテンチョートニコフの場合にも起つた。二人が懇意に成つた最初の日から、彼は始終彼女を知つて居たやうな氣がした。新たな、説明することの出來ない感覺が彼の魂を貫いた。一瞬間光の閃きが彼の厭倦み果てた生活を輝かした。最初將軍は此若者を喜んで好く待遇した。が、二人は旨く折合つて行くことが出來なかつた。彼等の會話は何時も議論に終つた。そして、何方にも一種の不愉快な感情を殘した。將軍の方では反對されたり言ひ返されたりするのを好まなかつたのに對して、テンチョートニコフが又憤りつぽい性質であつたからだ。勿論彼は娘の爲に大部分父親に讓歩して居た。で、二三の親類が將軍を訪問する迄は、二人の間に平和が保たれて居た。親類と云ふのは伯爵夫人ボヅィレワと公爵夫人ユッヤキナとで、二人とも先帝の御代には宮中の官女を勤めて居て、今でも彼得斯堡と何等かの關係を持續して居

た。其結果として、將軍は彼等に多大の尊敬を拂つたものだ。二人が到着した其日から、テンチョートニコフには自分が一層冷淡に遇せられるやうな氣がした――自分が看過せられ、若しくは居ても居なくても可い人物と見られて居るやうな氣がした。彼は『ねえ君とか『まア君、お聽きよ』とか云ふやうな、稍粗葬な言葉を懸けられて居た。一度なぞ將軍は彼に對して『お前』と言つたことさへあつた。

此の最後の言葉は彼を怒らした。それにも拘らず、彼は心を硬くして齒を咬ひ縛りながら、何時になく低い禮儀正しい調子で――尤も、其間彼の顏は多少紅を潮して、彼の胸の中は沸き返つて居るには居た――『將軍！　貴方の御親切なお心持に對して、は私は切に感謝して居ます。「お前」と云ふやうな言葉を使つて多大の友情を私に示して下さるので、私の方でも又貴方に向つて「お前」と言ひたく成る位ですよ。が、二人の間には年齡の相違があるので、そんな親しい言葉も使はれない譯で御座いますね』と言ふだけの心の平靜を保つて居た。

將軍はすつかり面喰つて仕舞つた。言葉と思想とを寄せ集めながら、彼は連絡のない話ッ振で、自分は決してそんな意味で『お前』といふ言葉を使つた譯ではない、若者に向つて『お前』と言ふことは老人には許されてあることだなぞと云ふことをとゞらまだらに言ひ出した。將軍が自分の階級に就いて一言も口にしなかつたのは、注意すべきことである。

勿論、彼等の交際は其瞬間から絶えた。そして、戀愛も最初の出發點でお終ひに成つた。一瞬間テンチョートニコフの前に輝いた光も消滅した。で、それに續いた陰影は前よりも一層暗いやうに見えた。實際、彼の生活は此章の始めで讀者の既に知つて居られるやうなものに成つた――萬事が寢床に臥て居ることゝ不活動とに變化した。塵埃と亂雜とは彼の家を占領した。箒は塵埃と一緒に成つて、半日も床の眞中に轉がつて居た。彼の古い洋袴は客間に迄迷つて行つた。長椅子の正面に立つて居る綺麗な小机の上には、客に果物の皿でも出したやうに、一對の洋袴釣りが載かつて居た。我

我の若い友人の生活はいよ〳〵瑣末な、無性なものと成つて、終ひには下男どもが彼を尊敬しなく成つたばかりでなく、雄鷄や雌鷄までが彼を馬鹿にして嘴でつゝ突くやうに成つた。

手にペンを握つたまゝ、彼は曲つた樹や、小さな家や、百姓どもの小舍や、荷車や、輕馬車を畫いて、數時間もぼんやりして過した。が、時としては、彼が何も彼も忘れて居る時、ペンはそれ自身の意志で、主人は少しも御存じない間に、優しい顏容の、はき〳〵した、人を射るやうな眼光と、背後へ垂れた髮の毛とを有つた小さな頭を描いて居た。で、其時主人はそれが何んな美術家も其人の肖像ばかりは描くことの出來ない人の肖像であることを發見して、自分ながら吃驚して居た。で、それから彼は又一層幽鬱に成つた。で、此世には最う幸福なぞと云ふものはないと信じて、前よりも一層物臭く、一層沈默に成つた。

斯くの如きものがアンドレイ・イワノ非ッチ・テンチュートニコフの精神狀態であつた。或日彼が平常の物の順序に從つて、手に煙管と鳥打帽とを持ちながら、窓の傍へ歩いて行かうとした時、不意に庭でグリゴリイやペルフィリエフナの聲ではない、何やら忙し相に彼方此方歩く物音を耳にして惘れ返つて仕舞つた。臺所男や床洗ひが慌てゝ門の扉を開けに駈け出した。其處には、實際、三疋の馬が恰度凱旋門の上に彫刻されたり、又は畫かれてある馬のやうに、一疋は鼻面を右にし、一疋は左にし、一疋はそれを眞中にして立つて居るのが見えた。其馬の上の馭者臺には一人の馭者と一人の從僕とが容量の多い外套を着て腰掛けて居た。彼等の背後には又一人の紳士が鞣革の庇の着いた帽子や外套に纏まつて、虹色をした襟卷を頸に卷きながら乘つて居た。馬車がずゝつと玄關の前へ横着けに成つた時、それは彈機附きの輕い四輪馬車に外ならないと云ふことが明白に成つた。極端に愛嬌の好い容子をした其紳士は、殆ど軍人かと思はれるやうな敏捷で快活な態度で、ひらりと馬車から飛び降りた。

アンドレイ・イワノ非ッチは一種の恐怖に襲はれた。彼は此客を裁判所から役人が遣

つて來たと取つたのだ。此處で一寸述べて置かなければ成らぬのは、青年時代に、彼は或馬鹿な事件の捲き添へに成づたことが有る。二人の驃騎兵に屬して居た哲學者が美學の課程を卒へる代りに、博奕打として身を滅して仕舞つた。そして、或年を老つた共濟組合員の監督の下に一種の博愛的協會のやうな物を設立した。此監督が又だらしのない男で、矢張博奕打であつたが、同時に非常な雄辯家であつた。此協會は、西はテームス河の岸から東はカムチャッカに到る迄、有らゆる人民の永久的福祉を全くすると云ふやうな、素張しく大きな目的を以て組織せられた。莫大な金額が必要とあつて、寛大な會員の間に寄附金が募集された。其金子が皆何處へ行つたかと云ふことは、總支配人の外には誰も知らない。彼は二人の友達を仲間に引き込んだ。二人とも元來はちやんとした人物であつたが、科學や、文明や、來るべき人類の責任なぞの名譽のために祝盃を擧げ〳〵する間に、眞物の泥醉漢に成つて仕舞つたのだ。テンチョートニコフは間もなく我に返つて、此仲間から離れて仕舞つた。が、其協會は既に紳士の行動としては餘り適當でないやうな性質の一種の作業に彼を捲添へにすることに成功した。其結果警察との事件が續いた。斯う云ふ譯だから、彼が首府を去つてから隨分久しくも成るし、又其協會とも有らゆる關係を斷つて居たにも拘らず、全然安心して居られなかつたのは、必ずしも怪しむべきではない。彼の良心は全然清らかではなかつたのだ。で、實際今室の扉が開いたのを見た時の彼の顏には、一種驚駭の色がないでもなかつた。

が、訪客が稍一方へ傾けながら、然も恭々しげな地位に頭を保つて、殆ど信じられないやうな熟練の度で以てお叩頭をした後で、低いには低いが極めてはつきりした言葉で、自分は近頃用務と好奇心との二つに促されて露西亞中を旅行して廻るものだと説明した時、彼の恐怖は卽座に消失した。旅客は又、我帝國は貿易の豐富やさま〳〵な土壤の種類を外にしても、非常に注意すべき品物に富んで居ると説明した。又自分は此村の繪のやうな景色に心を惹かされて來た。尤も春の洪水と道の惡い結果、自分

の乘つて來た馬車が鍛冶屋や職工の手間を要するやうな、思ひ懸けない破壞を蒙りさへしなければ、敢て此處へ侵入する積りではなかつたのだと辯解した。とは云へ、自分の馬車に斯んな災難が起らなかつたとしても、彼は自ら進んで主人に敬意を拂ふ愉快を自分自身に禁ずることは出來なかつたらうとも附け加へた。

斯う言つて仕舞つてから、訪客は人の心を魅するやうな嫻雅な態度で、眞珠貝の扣子の嵌めてある、綺麗に磨き上げた靴を穿いた足で一つ足摺りをした。そして、あれ程肥滿して居るにも拘らず、護謨毬のやうな輕快な態度で背後へ飛び退つた。

アンドレイ・イワノヰッチはすつかり安心して、此男は屹度穿鑿好きな敎授か何かで植物又は化石のやうなものを蒐集するために露西亞中を旅行して廻るのだなと鑑定した。彼は直樣自分の力の及ぶ範圍に於て有らゆる補助を與へようと約束した。又自分の職工や、車大工や、鍛冶屋などもお役に立てようと言ひ出した。彼は又自分の家に居ると同じやうに自由に寛いで呉れと、客に要求した。加之、相手を自分の大きな安樂椅子に掛けさせて、そして自然科學に於ける彼の話說に耳を傾けようと用意した。

が、客は寧ろ哲學上の問題に觸れようとした。彼は自分の一生を表裏定めない颶風に追ひ遣られて、海の眞中に漂つて居る小船に比較した。彼は又自分が何度となく住居や職業を變へなくちや成らぬ運命に遭逢したと語つた。彼は眞理のために多大の苦しみを嘗めたのだ。で、彼は斯うして自分が實際的人間であることを示すやうな、いろんな多くの話をした。其話の結末に於て、彼は白い麻の手巾を取出しながら、アンドレイ・イワノヰッチが是迄一度も聞いたことのないやうな、猛烈な音を立てゝ鼻をひつた。時としてはオーケストラなぞで耳の傍で破れるやうな角笛の音を聞くことがある。丁度左樣云ふやうな音が眠つた家の室々を驚かして反響した。で、直樣その後からオー・ド・コローンの匂ひが薫つて來た。カムブレーの麻の手巾を旨く振つたために、目に見えずして擴がつたのである。

讀者は恐らく既に此訪客が我々の尊敬すべき、永く打捨つて置かれたバヴェル・イワ

ノヰッチ・チャコフに外ならないことを推察されたであらう。彼は明かに前よりも少許年を老つて居た。時は暴風雨や心配なしには過ぎなかつたのだ。彼の脊に被つて居る燕尾服からして少し古く成つたやうに見えた。四輪馬車は、馭者も從僕も、馬も馬具も共に皆擦り切れて疲れ果てゝ居た。これ等の事から推して見ると、彼の財政は餘り羨ましい狀態ではなかつたらしい。が、彼の顏の表情と、彼の禮讓と、彼の態度とは元の儘であつた。其の立居擧動は前よりも一層調子が好く成つた位だ。安樂椅子に腰掛けて居る時なぞ、彼は前よりも一層熟練した態度で一方の足を他方の足の上に重ねて居た。彼の話の轉じ工合には一層旨い處があつた。彼の言葉や表情には一層多くの注意と節制とがあつた。彼の容子には一層多くの巧妙があつた、彼の身には到る所一層多くの手練があつた。彼のカラアや襯衣の胸當は雪よりも白く且清潔であつた。彼が今旅行中にあると云ふ事實にも拘らず、彼の上衣には一點の塵埃も溜つて居なかつた――恰度只今誕生日の宴席から出て來たばかりのやうにも見えた。彼の頰や顎は盲人でも其の心持の好い圓味を帶んだ輪郭を讃めずには居られない程綺麗に剃つてあつた。

一つの變化が直樣此家の中に起つた。從來窓の鎧戸を閉めたまゝ、眞暗に成つて居た家の半分が、急に花咲いて光を受け容れた。新に照らされた室々の中には、何も彼も動いて廻り出した。萬事直に今迄とはからりと違つて來た。夜間の化粧に必要な諸道具は皆客の寢室に割當てられた室へ持ち運ばれた。又彼の書齋に宛てがはれた室には、三脚の卓子が置いてあつた。一つは寫字檯で、長椅子の前に立つて居た。二番目のは骨牌の臺で、二つの窓の間に鏡を正面にして置かれた。三番目のは隅の卓子で、寢室へ導く扉口と誰も使つて居ない廣間へ開いて居る扉口との間に立つて居た。其廣間は壞れた家具で一杯で、今は控室として使はれて居たが、一年も前から誰も其中へ足を踏み入れた者はないのだ。此の隅の卓子の上には、我々の主人公の鞄の中から取出された二三の衣服が置いてあつた――卽ち上衣だの、其下に一對の洋袴だの、同じ

く一對の眞新しな、色は灰色の掛替だの、又天鵞絨が二着、襦子が二着、都合四着の胴衣だの、一着の外套だのと。是等の物は皆一枚づゝ上へ上へと三角塔の形に積み重ねて、其上から絹の手巾が蔽けてあつた。扉口と窓との間の他の隅には、一列の長靴が並べてあつた。眞新しなのも有れば、眞新しでないのもある。光澤のある鞣革の長靴も有れば、短靴も、室の中の上靴も有る。それ等は皆絹の手巾で前と同じやうに隱してあつた。其結果、恰度そんな物は其處にないのと同じやうに見えた。

寫字檯の上には、非常に規則正しく化粧函だの、オー・ド・コローンの罎だの、爪揚枝だの、曆だの、二冊の小說本だの――二冊とも第二卷ばかり――が手早く並べられた。清淨な襯衣は寢室の中に立つて居た籠笥の中へ入れられた。又洗濯を要する襯衣は一束にして、寢床の下に突込んで置かれた、空に成つた鞄も亦寢床の下へ押込まれた。我々の主人公が道中盜賊を脅かすために提げて廻る劍は如何かと云ふと、これも亦寢室の中へ入れて、寢床から餘り遠くない折釘に懸けられた。何も彼も淸淨として秩序正しく整頓した、何處にも紙片や、ペン尖や、塵芥のやうなものは落ちて居ない。空氣其物迄急に高尙に成つたやうな氣がした。同じ襯衣を長い間着て居るやうなことのない、日曜日毎に湯へ這入つて、濕らした海綿で身體を拭ふことを忘れないやうな、健康で生々とした男の匂ひが其部屋中に充滿し始めた。從僕ペトルシカの惡臭も一寸の間控室に根を張らうとした。が、ペトルシカは直樣厨房へ移された。又それが適當であつた。

最初アンドレイ・イワノヰッチは自分の獨立を犯されやしまいかと心配した。彼は訪客なぞのために、折角旨いこと整頓して來た自分の生活の樣式に變化を來して、面倒な事に成るのを恐れたので、驚いて氣を揉んだのだ。が、彼の恐怖は根據のないものであつた。我々の主人公のパヴェル・イワノヰッチは有らゆる事情に適應して行くことに於て異常な才能を發揮した。彼は主人の哲學的、方法的性質には百年も彼の壽命を延ばす効驗が有るだらうなぞと言つて、それを讃めそやした。又主人の孤獨な生活に

關しては、それが人間の偉大な思想を促進する所以であると云ふやうなことを言つて、巧妙に自家の意見を發表した。それから圖書室を一見して、一般に書籍を稱揚した後で、彼はそれに人間を懶惰から救ふ効驗があると言つた。彼は僅かな言葉しか口から出さなかつた。が、其僅かな言葉が皆肯綮に當つて居た。擧止動作に於ては、更に一層の修練を示した。彼は恰度顏を出せば好いやうな時分に顏を出した、そして、恰度好い按配な瞬間に退座した。彼は主人が默つて居たいやうな氣分にある時には、決して餘計な質問なぞして相手を困らせなかつた。そんな時は相手と將棋なぞ指して快を取りながら、自分も沈默を樂しんだ。相手が煙管から煙の輪を吐き出して居る間、此方は煙草を飲まないので、又それに相應するやうな手戯びを工夫した。例へば衣嚢から燻銀の嗅煙草入を取出して、左の手の二本の指の間に碇かりそれを保ちながら、右の手の人差指で急速にそれを廻したものだ。で、恰度それは地球が軸の上を回轉して居るやうに見えた。でなければ、彼は又其蓋の上を太鼓のやうに指で敲いたものだ。其間始終口笛を吹いて居た。これを要するに、彼は些少と雖も主人に不便を感ぜさせるやうなことはなかつた。

『俺は今始めて一緒に暮すことの出來るやうな人物に出會つたよ』と、テンチ・ートニコフは一人で言つた。『これを要するに、彼樣云ふのは我々の中にや稀だね。學問や修養のある善良な人と云ふものは、幾許でも有る。が、何時見ても氣分の一樣な人間と云ふものは、畢竟喧嘩をしないで一緒に暮すことの出來る人間と云ふものは、何處へ行つたつてそんな人間が澤山あるかないか、俺にや實際何とも言へないね。何れにしても此男は俺の見た左樣云ふ種類の人間の第一人者だね。』テンチ・ートニコフは彼の客に對して斯んな意見を持して居た。

チ、コフは又チ、コフで、暫時此の靜かで穩やかな若者の家に落着いたのを非常に喜んで居た。彼は自分のヂプシイのやうな生活に少々飽きが來て居た。單に健康の上から見ても、此の美しい村に、牧場や芽ぐんで來た春を見ながら、一箇月位休息する

のは非常に利益があるに違ひない。

此處よりも休息に適した隱遯所を發見することは困難であらう。長い間ぐづ〳〵して居た春は、不意に其の有らゆる美しさを以て蕾を破つた。そして、生命は到る所にそれ自身を發揮して來た。生々とした早春の綠の野は所々黃いろい蒲公英の花に飾られた。と、紫色したアネモネの花は優しい首を點頭かせて居る。蚊其他昆蟲の群が沼澤の中に姿を現し懸けた。水蜘蛛は既に彼等を追ふことに忙しい。有らゆる種類の鳥が枯葦の中に集まつて來た。鴨其他の水禽は春の水の溢れた川や湖水の上に飛び降りる。地の上は不意に騷々しく成つた。森は長い睡眠から眼を覺した。牧場はいろんな聲を揚げて來た。綠の色の鮮やかなこと！　空氣の淸々しさ！　園の中の鳥の啼聲、有らゆる物から喜びの聲、其の反響！　村は婚禮でも始まつたやうに、調和と歌とに滿ちて來た。散步は到る所にされた。そして、チヽコフ自身隨分步いたものだ。

或時は廣々とした谷合を一目に見降すことの出來る小山の頂上へ足を向けた。其谷間には洪水のために出來た廣い湖水が今なほ殘つて居て、未だ葉を生じない森の島が其眞中に黑く橫はつて居た。又或時は林の多い谷間を縫つて步いた。其處には厚く枝差交はした樹木が、時として空も黑く成る程飛んで廻る喧ましい鳥の巢に抑へられながら、漸と木の葉の飾りを着けようとして居た。彼は又最初の小船が豌豆や大麥や小麥を積みながら船出しようとして居る埠頭へも行つて見た。其水は喧ましい音を立てながら、今仕事を始めたばかりの粉磨小舍の水車に打突かつて居た。彼は又春の始めの野良仕事も檢分に行つた。彼は綠の草の中に黑い土の片が鋤き返されるのを眺めて居た。又熟練した播種人が胸に提げた篩を輕く敲きながら、一樣に、種子が右側へも瀉れなければ左側へも瀉れないやうに、恰度好い所へ種子を蒔いて行くのを見詰めて居た。

實際、チヽコフは何處へも彼處へも行つた。彼は監督とも話をすれば、百姓や水車の番人とも議論を上下した。彼は有らゆる人を知つた、又有らゆる事に就いて、如何

して如何云ふ譯でと云ふことを知つた。何んな工合に此所領の萬事が進行して居るか、穀物は何れ位賣られるか、秋には何の位水車小舍へ送られるか、又春には何の位送られるかと云ふことも知つた。又それと共に百姓どもの名や、此男はあの牝牛を何處で買つて來たか、あの男は豚を何で飼養して居るかなぞと云ふこと迄――一言にして言へば、何も彼も知つた。彼は又何の位百姓が死んだかと云ふことも訊いて見た。が、それは餘り澤山ではないらしかつた。彼も眼の利く男であるから、自分の肝心の計畫が關係する限りに於て、アンドレイ・イワノヴッチの許ぢや事件は餘り面白く行かないなと云ふことを見て取つた。一方に於て、無智や、怠慢や、泥棒や、醉拂ひやは到る處に跋扈して居た。で、彼は一人心の中で呟いた。『テンチ・ートニコフと云ふ男は何と云ふ馬鹿だらうな！　斯んな立派な所領を斯んなに打捨つて置くなんて！　遣り樣に依つては、一年五萬留布の收入でも擧げられるんだもの！』

彼は散歩して居る間、一度ならず斯んなことを心に想ひ附いた、自分も何時か――

即ち今ではない、將來自分の主要な仕事が片附いて、手にそれだけの金子を握つた時である――此處にあるやうな、斯んな平和な所領の所有主に成りたいものだと。勿論、左樣云ふ時は、彼の想像の前に商人若しくは他の富裕な社會的階級から來た、そして多少は音樂の趣味もある、薔薇色をした、ブロンドの髪の若い娘が姿を現した。又チコフの姓を永久に傳へる運命を擔つた次の時代の青年が彼の前に姿を現した――惡戲好きな男の兒と美しい女の子、若しくは二人の小さな頑童と二人又は三人の小さい娘とである。其結果、彼も單に此世の表面を影か幽靈のやうに過ぎ去つたばかりでなく、實際生きて、存在して居たと云ふことを總ての人に知らせることが出來るのだ。

それから又彼は自分の位階に何か附け添へられるのも惡くない考へだと空想するやうになつた。例へば、『五等官』と云ふのも名譽ある稱號で、尊敬に値するものである。散歩して居る間にも、人間の頭腦には隨分いろんなことが這入るものだ！　それが時としては現在の可厭な境遇から其男を連れ出して、其男を嘲弄し、其男を苦しめ、其

男の想像を鼓吹して、其男自身そんな事は到底實現されるものでないと確信して居る場合にすら、其男に取つて非常に尊いものと成ることが有る！。

其村は又バヴェル・イワノヰッチの下男どもにも大層氣に適つた。彼等は又彼等自身としてそれに慣れて來た。ペトルシカは直に臺所頭のグリゴリイと仲の好い友達に成つて仕舞つた。尤も、最初は二人ながら大いに威嚴を繕つて、口を利く場合にも互に耐へられない程容態振つたものだ。ペトルシカはいろんな場所を見て來たと云ふ力でグリゴリイの上に幅を利かせようとした。が、グリゴリイはペトルシカの嘗て行つたことのない彼得斯堡のことを言ひ出して、即座に相手の氣を碎いた。後者はそれならと云ふので、自分が見て來たいろんな場所の距離に關する細かい話を切出しながら、再び自分の地位を恢復しようとした。が、グリゴリイは何んな地圖にも載つて居ないやうな大きな町の名を擧げて、其處迄行くには三千ヴェルストも有ると數へ立てた。で、バヴェル・イワノヰッチの下男は惘れ返つて、あんぐり顎を落したまゝ默つて居た。そして、家内中の下男や下女どもから有無を言はせず嘲笑の的にされた。が、事件は從僕と臺所頭との間に密接な友情が生ずることに依つて終つた。禿頭のピーメンと云ふ百姓は村外れに居酒屋を開いて居た。二人の親友の姿は何時行つても此居酒屋で見られた。二人はすつかり其居酒屋を自宅のやうにして居た、又百姓の言葉に從へば、其家の『据ゑ物』同然に成つた。

セリファンはセリファンで、又別に索引力を發見した。夕方に成るや否や、村の娘どもは歌を唄ひながら、春のコロヴォード（歌や遊戯に伴れて踊る舞踏の名）の鎖を絢つたり千斷つたりした。今ぢや何處の大きな村でも發見されないやうな、好い姿をした立派な系統の娘どもは、數時間も引續いて彼と一緒に『渡り鴉』を遊んだものだ。彼等の中の何れが一番美しいかと云ふことは一寸言ひ難い。彼等は皆白い頸をして、白い胸をして、はき〳〵した好く動く眼を有つて居た。彼等は孔雀のやうに押廻つて、腰迄垂れた長い辮髪を下げて居た。彼等の白い手を自分の兩手に取りながら、彼等と一

緒に合唱隊の舞踏に加はつて緩やかに動いて居る時、又は彼等の傍を去つて、他の若者と一緒に彼等と向ひ合つて一列に並びながら、娘どもが大きな聲で笑ひながら『神よ、我等に婿を賜へ！』と歌つて居る間に、彼等の方へ一齊に押懸けて行く時——薄れ行く夕暮の光も消えて、夜の影が徐かに四邊を取捲くと、悲しげな歌聲の反響が河の彼方から聞えて來る時、彼は自分ながら自分の中に何が起つて居るのか知らなかつた、朝も夕も、寢ても覺めても、其後は有らゆる物が彼の眼の前に踊つて居るやうに見えた。彼は白い手を自分の手に握りながら、始終合唱隊の舞踏に加はつて動いて居るやうな氣がした。

チ、コフの馬も亦今度の新しい住所に滿足して居るやうに見えた。燕麥は素敵だし、厩舎の配直も素張しく愉快に出來て居た。各厩舎は一つ〳〵別に成つて居たけれど、仕切の上から他の馬を見ることも出來た。で、若し其中の一疋が嘶いて見ると云ふやうな馬鹿な氣を起したとすれば、一番外れの馬だとしても、それは直に聞くことが出來た。

これを要するに、彼等は皆すつかり自宅のやうな氣がして居た。バヴェル・イワノヴチが露西亞の際迄旅行して廻る用向——卽ち死んだ農奴——が關係する範圍に於ては、彼は正銘の馬鹿を相手にする時ですら、極端に用心深く且神經質に成つて居た。で、テンチョートニコフに對しては一層用心をせずには居られなかつた。何と成れば、彼も決して馬鹿ではなかつた。彼は書物も讀んだ、哲學も考へた、又有らゆるものゝ原因を自分で考究しようともして居た。『いや、最つと他の方法で一層旨く其問題に近づくことが出來ないか試して見た方が好からうよ』と、チ、コフは考へた。彼は此家の下男どもと無駄話をして居る間に、彼等の主人が以前は屢々隣人の老將軍を訪問する習慣を有して居たことを聞いた。彼は又其將軍が一人の娘を有つて居た、そして、彼の主人は明かに其令嬢に對して思召があつた、又其令嬢も彼等の主人に對して思召があつたと云ふことを聞き込んだ。が、彼等は不意に仲違ひをして、別れて仕舞つた

と云ふのだ。加之、我々の主人公自らアンドレイ・イワノヰッチが始終ペンや鉛筆でいろんな頭を畫いて居た、そして、其頭が皆似寄つて居たことを見て取つた。

或日晝餐の後、我々の主人公は毎例のやうに銀の嗅煙草入をぐる〳〵廻しながら、次の樣に言ひ出した。『貴方は此世で何も彼も有つて被坐しやる、アンドレイ・イワノヰッチさん。左樣だ、一つの外は何も彼も有つて被坐しやる。』

『そりやア何ですか』と、主人は煙の輪を吐き出しながら訊いた。

『貴方の生涯のお伴侶ですよ』と、チ丶コフは言つた。

が、アンドレイ・イワノヰッチは何とも答へなかつた。そして、會話は其處で止んで仕舞つた。

が、チ丶コフはそんな事で勇氣を挫かれなかつた。實際、彼は夕飯の前に、又次の機會を撰んだ。二人が四方山の談話をして居る間に、彼は不意に言ひ出した。『ねえ、アンドレイ・イワノヰッチさん、實際貴方は御結婚なすつても、貴方に取つてそんなに惡い事ぢやありますまいよ。』

テンチ■ートニコフはそれに對して、恰度其問題が自分に取つて不快な事でもあるやうに、一言も返辭をしなかつた。

が、チ丶コフはなほ勇氣を挫かれなかつた、彼は夕飯の後で、第三の機會を撰んで、次の樣に言ひ出した。『幾度貴方の御事情を頭腦の中で繰り返して考へて見ても、貴方は矢張結婚される方が至當のやうに思はれますがね。貴方は追々〳〵ヒボコンデリアに落ちて被坐しやいますよ。』

此場合、チ丶コフの言葉は非常に決定的であつた。それともテンチ■ートニコフの蟲の居所が打明け話をするのに都合が好かつたのか――何れにしても、此若者は溜息を吐きながら、『戀愛に於ても、其他のことゝ同じ樣に、人間は運が好くなくちや駄目ですね、パヴェル・イワノヰッチさん』と言つた。それから彼は自分と老將軍と知合に成つた始めから、喧嘩する迄の紛糾を有りの儘に話して聞かせた。

チヽコフは逐一相手の話を聞いて、全事件が單に『お前』と云ふ一語から起つたのを知つた時、思はずたぢ〳〵と成つた。一瞬間彼はテンチョートニコフの眼を凝乎と見詰めて居た。そして、相手が馬鹿か狂人か、何方か決定することが出來なかつた。

『ねえ、アンドレイ・イワノヰッチさん』と、彼は相手の兩手を捕まへながら、漸く言ひ出した。『それが如何して侮辱なんです？　「お前」と云ふ言葉に何腹を立てることがあるんです？』

『其言葉自身には別に腹を立てることは有りませんよ』と、テンチョートニコフは答へた。『ですが、それの適用に、それを口にする物の言ひ方に有るんですよ。侮辱を感ずるのは其處なんですね。「お前」――そりや斯う云ふ意味ですよ、「お前は何の役にも立たないやくざな男だと云ふことを心得て置くが可い。俺は只近隣にお前よりも好い者が居なかつたから、お前のやうな者でも此家へ出入りさせて置いたのだ。だが、今は公爵夫人ユッヤキナと云ふやうなお方が此處へ被坐した。すれば、お前も自分の坐る場所を心得て置くが可い。そして、闘の上に立つて居るんだよ」と。これが其意味なんですよ。』斯う言ひながらも、穏やかで優しいアンドレイ・イワノヰッチの眼は閃いた。そして、傷つけられた心の苛々しさが明々と其聲にも籠つて居た。

『ですが、其意味にしても、別に差支へはないぢやありませんか』と、チヽコフが訊ねた。

『何です？　貴方は私が斯んな不當な取扱ひを受けた後でも、未だあの將軍を訪ねると思つて被坐しやるのですか。』

『何が不當です、別に不當な取扱ひぢやありませんよ』と、チヽコフは言つた。

『何故不當でないのです？』と、テンチョートニコフは惘れたやうな顔をして訊いた。

『あゝ！　そりやア只將軍なぞと云ふものゝ癖ですよ。彼等は誰に向つても「お前」と言ふんです。それに又一生を立派に勤めて來た價値ある人物に對して、如何してそれが許されないのでせうね？』

『そりやア別問題ですよ』と、テンチョートニコフは言つた。『あの人が普通の老人であつたら、又は傲慢でも不遜でもない、普通の貧乏人であつたら、若しくはあの人が將軍でなかつたら、私はあの人から「お前」と言はれた處で喜んで許して遣りますよ。』

『此男は眞個阿呆だな！』と、チヽコフは一人で呟いた。『破戸漢になら許して遣るが、將軍には許さないなんて、何と云ふ考へだらう！　――宜しいつ』と、彼は大きな聲で言ひ出した。『では、あの人が貴方を侮辱したとして置きませう。處で、貴方はあの人に對して十分に復讐をした。あの人は貴方に「お前」と言つた、貴方もあの人に「お前」と言つて返した。ですが、喧嘩するのは、そんな詰らない事で永久に別れて仕舞ふのは、そりやア――何卒御免なさいよ――そりやア無茶ですよ。人間が一旦目的を定めた時は何んな障害にも打克つだけの覺悟をしなけりや不可ませんね。まア或男が貴方に唾を吐き懸けたと云ふ事實を考へて御覽なさい。人間は始終唾を吐くものです、元來人間は左樣造られて居るんですからね。で、貴方が今一度も他人に向つて唾を吐き懸けたことのない人間を世界中搜して廻つても、そりやア駄目ですよ。決して見附かりッこは有りませんね。』

『此のチヽコフと云ふ男は妙な男だな！』と、テンチョートニコフは相手の言葉にすつかり度を失ひながら、一人で呟いた。

『だが、此のテンチョートニコフと云ふ男は何と云ふ中心を外れた男だらう』と、チヽコフも同時に考へて居た。『アンドレイ・イワノヰッチさん、私は兄弟同志の中で物を言つてるやうに貴方にお話するんですよ。貴方は未だ經驗のないお方だ。何卒私に此事件を處理させて下さいませんか。私は閣下の邸へ上つて、萬事が貴方の誤解から――貴方のお若いのと、人間と此世間とに對する知識の缺乏から起つたのだと、あの方に說明して來ますよ。』

『私はあの人の前に自分を卑しくするやうな氣は少しも有りません』と、テンチョートニコフは怫としながら言つた。『私は又私のためにそんな事をなさる權利を貴方に委

任する譯には參りませんよ。』

『私も不都合な眞似は致しませんよ』と、チ、コフも又怫としながら言ひ返した。

『他の過失なら私も人間ですから、他の人同然に致すかも知れませんがね、只卑劣な眞似だけは、斷じて出來ませんよ。御免なさい、アンドレイ・イワノヰッチさん、ですが、私も貴方がそんな侮辱の意味に私の言葉を取つて下さらうとは思ひも懸けませんでしたよ。』で、これ等の言葉は皆一種の威嚴を保つて口にされた。

『いや、私が惡かつた。御免なさいよ』と、テンチョートニコフは感情に驅られて、相手の兩手を掴みながら、遽てゝ言つた。『私は貴方のお心を害しようとは思つて居ませんでした。私は誓つて言ひますが、貴方の御親切な同情は私に取つて尊い物ですよ。ですが、まア此談話は止めにして置かうぢやありませんか、斯んな談話はお互ひに二度と再び言ひ出しますまいよ。』

『左樣云ふ事なら、私は一つ其將軍の許へ行つて參りませう。』

『如何して？』と、テンチョート・ニコフは惘れて我々の主人公の眼を眞直に見詰めながら訊いた。

『私の敬意を表するためですよ。』

『チ、コフと云ふ男も妙な男だなア！』と、テンチョートニコフは考へた。

『テンチョートニコフと云ふ男も妙な男だなア！』と、チ、コフは考へた。

『私は明日の朝十時頃に其方の許へ參りませうよ、ねえアンドレイ・イワノヰッチさん。私の考へぢや、人が人に對して敬意を拂ふのは早ければ早い程一層好いのですからね。私の四輪馬車は未だ乘つて出られるやうな狀態には成つて居ませんから、何卒貴方の幌馬車を一つお貸し下さいましよ。左樣すりや、明日の朝十時頃には、屹度將軍の邸へ到着することが出來るでせうからね。』

『宜しい。そんな事一々御依賴には及びませんよ。貴方は此家の主人も同然だ。馬車を始めとして其他何でもお心の儘に御使用なすつて差支ありませんよ。』

此會話の後、二人は別れて寢床へ這入つた。そして、二人ながら相手の得失に就いて考へて見ないではなかつた。

事件は實際變なものであつた。次の朝、馬車がチヽコフのために玄關へ廻された時、そして、彼が新しい上衣や、眞白な頸飾や、胴衣を着込んで、殆ど軍人のやうなはきはきした態度でひらりと馬車に飛び乘りながら、老將車に敬意を拂ふとて出發した時、テンチョートニコフは長い間經驗しなかつたやうな一種の感情に襲はれた。神經の苛苛した感情が不意に此怠惰者の――從來不注意な放縱の裡に全然心を奪はれて居た男の他の有らゆる感情を壓倒して仕舞つた。彼は今長椅子に腰掛けて居たかと思ふと、又立つて窓の傍へ近づいた、それから又書物を取上げて、何か考へようと試みた。が、そんな努力は盡く無効であつた！　一つも思想らしい思想は彼の頭腦の中へ這入らない。で、今度は何でも考へることを避けようとした――それも無駄な骨折だ！　何處か思想に似たやうな斷片が下らない塵芥や瓦落多が、到る處から匐ひ摺り込んで、彼の頭腦に絡り着いた。『何と云ふ變な心持だらう！』と、彼は言つた。そして、再び窓へ近づきながら、暗鬱な森の中を貫いて走る街道や、其の外れに駈けて行つた幌馬車のために立てられた土埃がなほ煙のやうに立ち迷つて居るのを凝乎と見詰めて居た。が、テンチョートニコフのことは少時打捨つて置いて、老將軍の許へ出懸けた我々の主人公の後を追うて見よう。

第十三章　千八百十二年の古ぼけた遺物

半時間少許餘の間に、好い馬はチヽコフを十ヴェルストの彼方へ搬んで行つた――最初は茂つた森を通じて、それから新に耕された土壤の中から綠の芽を出し懸けた穀物の田野を通じて、それから又一歩毎に遠い景色の眺望が展けて行く山の脊に添うて、更に又、未だ殆ど葉を出さない菩提樹の廣い並木道を上に――彼は斯くして村の中心へ這入り込んで行つた。其處で菩提樹の並木道が右へ一轉すると、下に垣根で緣を取つた白楊の木の廣い往還に變じた。其往還は一つの透彫りをした鑄鐵の門に終つて居る。其中から八つのコリント式の柱に支へられ、花の彫刻で立派に飾られた將軍の家の正面が覗いて居た。到る處彩色が施されて居た。何も彼も適當な修繕を加へて、何一つ癈頽のまゝ打捨つてはない。庭園は磨いた木の床のやうに綺麗に掃除が出來て居た。玄關へ馬車を乘り着けながら、チヽコフはひらりと飛び降りて、將軍に刺を通じて貰ふやうに賴んだ。そして、直樣後者の書齊へ通された。

將軍は先づどつしりとして威嚴のある外貌に依つて相手を驚かした。彼は華美な紫色の、綿を入れた、襦子の寢間着を被つて居た。彼の眼光は明らさまであつた、彼の顏は男らしかつた、彼の上髭やもぢや〳〵と生えた頰鬚には灰色の筋が混つて居た。復の髮の毛は後頭部で短くちよん切られて、横に切れた三重の襞を有つて居るので、普通に『三階』と稱ばれる一種の太い頸を明らさまに見せて居た。一言にして言へば、彼は有名な千八百十二年に榮えた、繪のやうな將軍の一人であつた。

將軍ペトリシュチェフは實際澤山の好い素質と澤山の缺點とを兼ね具へて居た。常に露西亞人の間に見るやうに、此二つが一種の繪のやうな亂雜で以て彼の中に入亂れて居た。非常な場合に、彼は豁達と勇氣と智慧と、何事にも底の知れない寬大な心とを發揮した。又それと入れ混つて、出來心の多い野心と、懶惰にして坐つてばかり居る時、又は決心を促すやうな必要に迫られない場合には、如何なる露西亞人と雖も免れ

ない、瑣末な、個人的性急とを發揮した。彼は軍隊に勤務中自分を追ひ扱いたやうな連中を好まなかつた。そして、皮肉な言葉や、刺のある警句で彼等に關する自説を發表した。一番酷い目に遭はされるのは、彼が頭腦に於ても才幹に於ても自分より劣つて居るものと見做して居た、が、それにも拘らず、既に二つの州の總督と成つて、彼の上に抽ん出た以前の同僚であつた。それが又故意に彼の意を害はうとでもしたやうに、二つながら彼の所領のある州なのだ。其結果、彼は自分の競争者に從屬しなければ成らない譯に成つた。復讐として、將軍ベトリシュチェフは機會のある毎に以前の同僚を罵詈した。彼のする有らゆる政治を非難して、彼の執る有らゆる處置を馬鹿の骨頂として嘲笑した。

我々の將軍には何處か妙な所が有つた。彼は好んで憤激した。又華美な事を愛した。彼は自分の頭腦を自慢することが所好であつた。又何でも他人の知らないやうなことを知つて居るのが所好であつた。そして、自分の知らない事を知つて居るやうな人間は皆所嫌であつた。彼は半ば歐羅巴風な敎育を受けたにも拘らず、隅から隅迄露西亞人風に出來上つた紳士の役を演じようと心懸けて居た。で、斯んな不齊不同と、斯んな強く且著しい性格の矛盾とを以て、此人が勤務中にさま〲な煩悶を經驗した、そして、其結果自分の窘窮の責任を敵視して居る相手に負はせながら――何と成れば彼は責任の一部を自分にも引請けるだけの度量を缺いて居たからである――辭表を呈出せざるべからざるに到つたのは、又決して驚くべきではない。彼は引退してからも、自分の職務に相應した、繪の樣に尊大な態度を持續した。彼は燕尾服を着て居ようが、外套を着て居ようが、寢間着を着て居ようが、始終同じ樣に振舞つた。聲の調子から一寸身體を動かす動作に到る迄、彼の身に就いたものは、何でも尊大で威風四邊を拂ふの概があつた。そして、下の階級の者には、縱しや尊敬の念でなくとも、少くとも恐怖心を鼓吹した。

チヽコフは恐怖と尊敬と混つたものを經驗した。恭々しく頭を一方に垂れて、洋盃

を一杯載せた盆でも受けるやうな按配に、兩手を素疾く前方へ動かしながら、彼は驚くべき活潑な態度で體の上部を曲げた。そして、『私は閣下の前へ伺候するのを自分の義務と心得ました。豫て戰場に於て祖國を敵手から救つて下された方々の勇氣に對して甚大の敬意を抱いて居たものですから、閣下の前に自ら伺候するのは私の義務と心得た次第で御座います。』

此手續は將軍に取つて明かに不愉快なものではなかつた。極端に相手を見下したやうな點頭き方をしながら、彼は言つた。『俺は貴方とお知合に成つて大層喜んで居るぢや。何卒まア其處の椅子に掛けて下さい。何處に勤めて居られたのかな。』

『私の官廳に於ける經歷は』と、チ、コフは安樂椅子に、それも眞中ではない、端の方に腰掛けて、兩手で椅子の腕を握りながら答へた。先づ司法省に始まりました、閣下。其後は上級裁判所に於ける建築委員會とか、又は關稅の勤務なぞで、さまゝな義務を果して來たもので御座います。私の生涯は、閣下、眞個波に揉まれる小船のやうなもので御座いますよ。敢て申しますれば、私は忍耐に生れて、忍耐に纏ひ着かれました。謂つて見れば、まア忍耐其者を人格化したやうなもので御座いますな。ですが、私の生命迄も求めて居た敵に關しては、言葉でも、色彩でも、謂つて見れば、まア迚も適當に描き出すことは出來ないので御座いますね。ですから、追々年齢も傾くことではあり、私は只餘生を安穩に暮す隱家を搜して居るので御座います、私は先達てから暫時閣下のお隣に逗留して居りました。』

『そりやア誰の許だね？』

『閣下、テンチョートニコフの許で御座いますよ。』

老將軍は顏を蹙めた。

『閣下、彼は相當な敬意を表しなかつたことを非常に後悔して居るので御座いますよ。』

『何にだね？』

『閣下の功業に對して〻御座います。彼は言ふ所を知りません――彼は申して居りました、「自分も何等かの手段で償ふことが出來たら――實際自分は祖國を救つた方々に對して適當な敬意を表する術を知らなかつた」と。』

『ねえ君、あの男は何を思つて居るんです？　俺はあの男のことを憤つてなぞ居やしないよ』と、將軍は顏を柔げながら言つた。『俺は心からあの男を好いて居る、あの男も其間には屹度有用な人物に成るだらうと信じて居るからね。』

『閣下、貴方は眞個旨いことを仰有つて下さいました。實際、彼は有用な人物に成りますよ。恐らく文字に於ける彼の才能を以て世界を制服するで御座いませうね。彼は文筆に於ける達人ですよ。』

『あの男は何か下らない物を書くやうだね――詩だつたかい、えゝ？』

『いや、閣下、決して下らない物ぢやありませんよ。彼は極めて實際的な物を――歷史を書いて居るので御座います、閣下。』

『歷史？　何の歷史だね？』

『歷史』――此處でチヽコフは一寸言葉に詰まつた。そして、將軍が自分の前に腰掛けて居たためか、それとも又此問題に一層重味を添へようと思つたからかも知れないが、兎に角彼は附け加へて言つた。『閣下、將軍の歷史で御座いますよ。』

『將軍の？　何んな將軍の歷史だね？』

『一般に將軍の歷史です、閣下。將軍全體の歷史で御座いますよ。卽ちこれを審らかに言へば、我國に於ける將軍の歷史で御座いますよ。』チヽコフはすつかり混がらかつて、何と言つて可いか判らなく成つた。彼は自分で自分に言ふことを禁じ得なかつた。『畜生ッ、俺も何と云ふ下らないことを言つたものだ！』

『何うも貴方の言はれることはいつきり解らないね。一體そりやア何の事だ？　或一時代の歷史だと言ふのか、それとも個人々々の列傳であるとも言ふのかね。又我國の將軍全體に就いて書くのか、それとも千八百十二年の戰爭に從事した者に限るとで

も言ふのかね。』

『左樣々々、其通りです、閣下。千八百十二年の戰爭に從事された方々の歷史ですよ。』斯う言ひながら、我々の主人公は一人で呟いた。『縱令絞め殺さるればとて、俺にそんな事が解つて耐るかい。』

『それぢや如何してあの男は俺に會ひに來ないのだ？　俺は非常に面白い材料を幾許でもあの男に供給することが出來たんだよ。』

『あの男は恐れて居るんです、閣下。』

『何を馬鹿な！　あんな詰らない言葉の行違ひのために！　だが、俺は決してそんな人間ぢやないよ。好けりや、俺の方からでもあの男に會ひに行く了簡だね。』

『そんな事をお爲せ申す氣遣ひはありませんよ。あの男は自分で此方へ伺ひます』

と、チヽコフは漸く我に返りながら言つた。彼は勇氣を恢復した時、一人で考へた。

『何と云ふ旨い工合だ！　俺は恰度好い時期に將軍の許へ遣つて來たんだよ。だが、俺の舌は宛然馬鹿のやうなお饒舌をしたものだ！』

其瞬間、さや〳〵と鳴る絹擦れの音が書齋へ聞えて來た。胡桃の木の扉が開いて、一人の女が手に眞鍮の把手を握りながら姿を現した。或透明な繪姿が背後からいろんな光に照らされながら、不意に眞暗な室へ現れたとしても、これ以上魂消るやうな効果を生じなかつたに違ひない。斯うして姿を現した娘は明かに何か將軍に言ふ積りで這入つて來た。が、見知らぬ客の姿を見て、急に立停つた。日光が彼女と一緒に飛び込んだやうに、又將軍の七艱しい書齋がわつと聲を揚げて笑ひ出したやうに見えた。箭のやうに眞直で輕い處から、彼女は大抵の女よりは身丈が高いやうに見えた。が、彼女はそれ程身丈が高くなかつたから、それは幻影に過ぎなかつた。彼女の身體の諸部分の配合が非常に好く調和して居た結果、左樣見えたのだ。彼女の寬衣は、最良の裁縫師が寄集まつて如何したら一番好く彼女を飾り立てることが出來るかと評議を凝らした結果仕立上げたやうに、旨く彼女に釣合つて居た。が、それも亦幻影に過ぎな

かつた。彼女は自分で着物を仕立てた。彼女が一たび針を刺せば、何んな反物でも立所に立派な衣裝と成つた。そして、若し彼女をそれ等の人の心を魅するやうな衣裝と一緒に畫布の中へ移すことが出來たら、彼女は其儘天才の名畫の模寫と言つても差支ないやうな、優美な環や襞を拵へながら、自分の身の周りにそれを纏ひ着けた。彼女の前へ出ては、何んな流行の衣裝を着けた若い貴婦人でも繼樓市から買つて來た雜色の衣を着けたやうに見えたに相違ない。が、彼女の此樣な美しさにも拘らず、稍痩せて細そりし過ぎて居た。

『俺の許の惡戯女を一つ貴方に紹介させて下さい』と、將軍はチヽコフに向つて言つた。『ですが、俺は未だ貴方のお名前を承はりませんね。』

『嘗て一つも眼に立つやうな功績を擧げて自分の名を顯したことのない男の名前で御座いますか』と、チヽコフは謙遜して頭を垂れながら訊ねた。

『ですが、矢張それは承はつて置く必要がありますよ。』

『パヴェル・イワノ并ッチと申します、閣下』と、チヽコフは殆ど軍人のやうな熟練を以てお叩頭をしながら、そして、護謨毬のやうな輕快さで背後へ飛び退りながら答へた。

『ウリンカ』と、將軍は娘の方へ振向きながら言つた。『パヴェル・イワノ并ッチさんは今極めて興味のある噂を傳へて下さつたよ。我々の隣人のテンチョートニコフが決して我々の想像したやうな馬鹿な男ではない。あの男は今千八百十二年の將軍の歷史と云ふ、まア重要な著作に從事して居ると云ふんだよ。』

『でも、誰があの方のことを馬鹿だなぞと考へて居たのです?』と、少女は遽てゝ言葉を挾んだ。『多分貴方の信用して被坐しやるヴィシュネポクロモフさんを外にしては一人も有りますまい。あの人は卑劣で頭腦の空ッぽな男ですよ。』

『何故あの男が卑劣だい? あの男は頭腦が空かも知れない、そりやア實際だ』と、將軍は言つた。

『あの人は頭腦が空なばかりぢやありませんよ、卑劣で狡猾ですよ。自分の兄弟を侮辱して、妹を兩親の家から追出すやうな人は卑劣に違ひないぢやありませんか。』

『だが、そりやァ只人の風評だけだよ。』

『斯んな事は根のないことを言ひはしますまい。阿父樣、私は貴方のやうな親切なお心と、貴方の有つて被坐しやるやうな尊い魂をお有ちに成る方が、貴方とは天と地程懸離れて居るやうな、あんな人を、それも御自身で惡い奴だと御存じでありながら、此家へ出入をおさせに成るのは、私にや如何しても譯が解りませんね。』

『ね、御覽の通りです』と、將軍はチヽコフに向つて微笑しながら言つた。『これが此娘と私との始終喧嘩をする工合ですよ。』斯う言つて娘の方へ振向きながら、彼は續けた。『だが、お前、俺もあの男を追ひ出す譯にや行かないよ。』

『誰があの人を追出せと言ひました？　只、あの人をあんなに大切になさるのが可笑しいのですよ。何故あんなに可愛がるのです？』

此處でチヽコフは一言言葉を挾むのが自分の義務だと考へた。『何んな者でも愛して頂きたいとは思ひますよ、お孃樣』と、チヽコフは言つた。『何うもそりや致方が御座いませんね。何んな動物でも撫でゝ貰ふことは所好ですよ。熊は「さァ私を撫でゝ下さい！」とでも言ふやうに、檻の横木の間から鼻面を突き出してるぢやありませんか。』

將軍は聲を揚げて笑ひ出した。『彼奴等は實際鼻面を突き出して居るよ、「さァ私を撫でゝ下さい！」とね。はゝは！　で、未だそれだけぢや滿足しないで、自分達の洞穴へ遣つて來て、奬勵の言葉を懸けて呉れと言ふ奴もあるね。はゝは！』そして、將軍の脇腹は高笑ひに顫へ出した。其昔重たい肩章を載せて居た肩も亦、恰度未だ左樣云つた裝飾品を載せて居ると同じ樣に、高笑ひに伴れて搖れ出した。

チヽコフも亦笑つて見せた。が、將軍に對する敬意から、AでなくEの發音で、『へ、へ！　へ、へ、へ！』と云ふ音を出したものだ。そして、彼の身體も亦笑ひに伴れて搖れ出した。が、肩は振らなかつた。何と成れば、其肩は嘗て一度も重たい肩章を載

せたことがないからである。

『いや、人間と云ふ奴は詐欺もすれば、泥棒もする。それで居て、讃められることを要求するものだよ、畜生ッ！「何うも奬勵なしぢや働くことは出來ませんね」と、其奴等が言ふんだよ。は、は、は！』

『閣下は「汚なくして居る時に僕等を愛して呉れ、清淨にして居る時なら誰でも愛して呉れる」と云ふ話をお聞きに成つたことが御座いますか』と、チヽコフは稍惡戯好きな微笑を含んで、將軍に向ひながら言つた。

『いや、そんな話は未だ聞いたことがないよ。』

『そりやア極めて面白い逸話で御座いますよ、閣下。グクッォーヴスキイ公爵の所領に――此方は閣下も何れ御存じで御座いませうね？』

『いや、俺はそんな方は知らないよ。』

『で、其處に獨逸人の監督が一人居りました、閣下――若い男ですよ。或時其男が補充其他の用向を兼ねて町へ出懸けました。そして、或事件に就いて裁判所の役人どもと往來しました。で、御存じでも御座いませうが、其奴等の手に脂を塗つた（賄賂を使ふこと）ので御座いますね。』――チヽコフは此處で片方の眼を引釣らせながら、何んな風にして役人どもの手に『脂を塗る』かを顏附で知らせた――『で、或晩其奴等が其監督を饗應しました。そして、其奴等と一緒に御馳走を喫べて居る間に、其男が言ひました。「諸君、貴方方も何日か公爵の所領へ被入したら、何卒一度私をお訪ね下さい」と。判事どもは「宜しい、是非伺ひます」と答へました。で、閣下、其後間もなく判事どもはトレクメーチェフ伯爵の所領で起つた事件に關して、何事かを調査に出掛けました。此伯爵のことは閣下も屹度御存じで御座いませうね――』

『いや、俺はそんな方は知らないよ。』

『で、其連中は無論調査などしないで、馬車を農園へ乘入れながら、其家の執事の部屋へ這入り込みました。そして、三日三晩と云ふもの息を繼ぐ間もなく骨牌を遣り

續けたのですね。湯沸器とポンスとは、閣下、始終卓子の上へ出し通しだと云ふんですよ。そんな其連中に懸つちや耐らない、公爵の老執事も滿腹しましたね。』――斯う言ひながら、チヽコフは自分の咽喉を指差した――『其奴等の手から免れたさに、執事は言つたのですよ、「諸君、貴方方も公爵の監督に會ひに被往しやると可い、あの獨逸人ですよ。あの男の家は此處から餘り遠くない、あの男は屹度貴方方を待つて居ますよ。」「あゝ、成程！」と、其連中は言つた。「あの男は僕等を招待したのだ。」で、其連中は皆睡たさうな顏をして、鬚も剃らなければ、顏も手も汚れたまゝまで、馬車へ乘込んで、例の獨逸人の家へ押懸けて行つた。處で、閣下、其獨逸人は恰度嫁を貰つたばかりの處なんですよ。其男は綺麗で嬌やかな、若い女學生と結婚したので御座います。』――チヽコフは此處で其女の嬌やかさを顏の表情で表はさうとした――『謂はゞ、蜜月の最中で御座いましたから、二人はお茶を飲みながら小さな天使のやうに坐つて居ました。處へ、不意に扉が開いて、一行が躍り込んだので御座います。』

『いやはや、耐らないね。宜しい』と、將軍は笑ひながら言つた。

『ですから、其獨逸人は、閣下、すつかり度を失つて仕舞ふ程吃驚したのです。其男は判事どもの傍へ歩み寄りながら、「君等は何を爲に來たのです、そんなだらしのない風をして？」と言ひました。「うむ、君は綺麗な男だな！」と、其連中は答へた。「君の方で左樣出りや、僕等の方にも言分がある。僕等は用務を帶びて遣つて來たのだよ」と、彼等は附け加へた。「此所領では何れ位のブランディが搾られるのだ？　さ、帳簿を見せろ！」獨逸人の監督は吶りながら彼れ此れ言ひ拔けようとした。「えゝ面倒だ、ふん縛つちまへ！」と、其奴等は叫喚いた。そして、獨逸人に飛び懸りながら、彼を縛つて町へ連れて行きました。彼は其處で一年半許り監獄へ入れられて居たので御座います。』

『うむ、成程な！』と、將軍は言つた。

ウリンカは兩手を合せて絞つた。

『閣下、其男の細君は方々訴へて廻りましたよ。ですが、未だ年齢の行かない、謂はゞ經驗の熔爐で試されたことのない女に何を爲ることが出來ませう？　幸ひに、或親切な人が手近に居て、治安裁判所へ訴へて出ろと其女に敎へて遣りました。閣下、其獨逸人は謝禮の宴會に二千留布を費すと云ふ條件の下に、漸と自由の身と成りました。で、宴會が濟んだ後、一同好い加減に醉拂つて居る時、其連中は彼に向つて言つたさうです。「ねえ君！　君は僕等を侮辱した！　僕等に向つて、當り前に鬚を剃つて顏を洗つて來いと言つた。だがねえ、君、君は僕等が汚い風をして居る時に愛して呉れなくちや不可ないよ、清淨にして居る時は誰でも愛して呉れるからね。』

將軍は大きな聲を揚げてから〳〵と笑つた。が、娘の氣高い顏には一種の苦しさうな顏色が表はれた。

『あゝ阿父樣！　私は貴方が如何して笑つて被坐しやられるか解りませんよ』と、彼女は言つた。『今伺つたやうな恥かしい行爲は只私に悲哀の念を起させるだけです。それ以外には何でも有りません。私は虛僞が萬人の見る前で公に行はれるのを見ると、そして、其の犯人が社會の一般的輕蔑に依つて罰せられないのを見ると、自分の中に何が起るんだか知らないけれど、私は腹が立ちます、私は思ひます、思ひます――』斯う言ひ懸けて、不意にわつと聲を揚げて泣き出した。

『只何卒俺達を憤らないで置いて呉れ』と、將軍が言つた。『俺達は別に此事件で非難される筈はないからね、えゝ？』と、彼はチヽコフに向ひながら續けた。『さア俺を接吻してお呉れ、そして、お前の部屋へ行くが可い。俺は晝餐に出るために、これから一つ顏を洗ふ積りだ。何卒』と、彼はチヽコフの顏を見詰めながら附け加へた。『貴方も俺と一緒に晝飯を喫べる迄殘つて居て下さいよ。』

『只閣下さへお許し下さいますれば――』

『いや、そんな時儀は止めにして貰はう。俺も貴方に差上げる位の物は澤山有るよ、お蔭樣でね。キャベツの肉汁も有つた筈だ。』

容赦を乞ふやうに兩手を動かしながら、チヽコフは尊敬と感謝の意を表して頭を低げた。其結果、室の中の有らゆる物が一瞬間彼の眼から隱されて、只長靴の爪先だけが見えて居た。斯うして數秒間恭々しい、態度を續けた後で、再び頭を持上げた時、ウリンカは最早其邊に見えなかつた。彼女は消えて仕舞つた。彼女の代りに、一人濃い上髭と頰鬚を生やした巨漢の從僕が、銀の金盥と手拭とを手に捧げながら、彼の前に立つて居た。

『御免蒙つて、一つ貴方の前で顏を洗はせて貰ひませうかね』と、將軍が訊いた。

『いや、私の前で顏をお洗ひに成るばかりでなく、何でも閣下のお所好なことをして頂きたいもので御座います。』

片手に寢間着を脫いで、襯衣の袖をたくし上げながら、將軍は水沫を飛ばしたり、鴨のやうに鼻嵐を立てながら身體の洗滌を始めた。石鹼の玉が四角八面に飛散した。

『如何やらだつたね？』と、彼は頸の周圍を八方から拭ひながら言つた。『君は僕等が清淨で居る時に愛して呉れなくちや不可ない――』

『汚くして居る時ですよ、閣下。』

『左樣だ、「僕等が汚くして居る時に愛して呉れなくちや不可ない、清淨にして居る時は誰でも愛して呉れるからね」と言ふんだつたね。此奴は好い、大いに好い！　彼奴等は實際奬勵の言葉が所好なんだよ、所好だよ、所好だよ、實際所好だよ。彼奴等を撫でゝ遣れ、撫でゝ遣れ！　勵まして遣らなけりや、彼奴等は盜みさへしないよ。は、は、は！』

チヽコフは何とも言はれない心持に成つた。そして、不意に新しい神來が彼の心に沸いた。『此將軍は却々愉快な人物だ。それに人が好いんだよ。一つ係蹄を懸けて見るかな』と、彼は考へた。それから從僕が金盥を持つて出て行つて隙間を見計ひながら、彼は切出した。『閣下、閣下は誰に向つても其樣に親切で心に懸けて被坐しやいますなら、一つ私の願ひを聞いて頂けないでせうか。』

『何んな事だね？』

『私は一人年を老つて、病み耄けた伯父を有つて居るので御座います、閣下』と、チヽコフはおろ〳〵相手を見遣りながら言つた。『其伯父は三百人の農奴を有つて居りまして、而も私の外に繼嗣はないのです。處で、自分では老齢のために所領を支配することも出來ないのですが、と言つて、私に其支配を委ねても呉れません。それに就いては妙な理窟を立てゝ居るので御座います。俺はあの甥を好く知らない」と、伯父は言ふんですね。「恐らく彼奴は放蕩者に相違ない。彼奴も自分で信用するに足る人間だと云ふことを俺の前に證據立てゝ見るが可い。彼奴の方で獨力三百人の農奴を得たら、左樣すりや、俺の方でも此三百人を彼奴に呉れて遣るよ。」』

『何だと、伯父さんは何を言つてるんだ？　眞個そりやア馬鹿だね』と、將軍は言つた。

『えゝ、馬鹿だけなら、未だしも取扱ひ易いので御座いますがね。ですが、私の地位を考へて見て下さい、閣下。老人は家事取締を備ひ入れましたよ。そして、其女が自分の子供を有つて居るんです。私の知らない間に、彼女等は何も彼も占領して仕舞ひますよ。』

『其老人はすつかり馬鹿に成つたものと見えるね』と、將軍は言つた。『只如何して君を助けて上げることが出來るか、俺にや何うも解らないね』と、彼は惘れたやうな顔をして、チヽコフを見詰めながら附け加へた。

『えゝ私の考へて居りましたのは斯うなんで御座います。若し閣下が此村で死んだ農奴を悉く私に讓つて下さいませうならば——恰度其奴等が生きて居るやうに、眞當面な賣買の證書に依つてゞ御座いますね——左樣すれば、私は其證書を老人に見せて遣りますね。伯父は屹度私に財産を讓つて呉れるに相違ありませんよ。』

それを聞くと、將軍は嘗て人間が笑つたことのないやうな、途方もない高聲で笑ひ出した。彼は安樂椅子の中に自分の身を投出しながら、頭を背後へ反して、殆ど息が

塞る程笑つた。家中が吃驚して心配し出した。從僕は遽てゝ這入つて來た。續いて令嬢も怖々遣つて來た。

『阿父樣、貴方如何なすつたのです？』と、彼女は恐怖と驚駭とに囚はれながら訊いた。

が、將軍は長い間一語も發する事が出來なかつた。『何でもないのだよ、ねえ娘。自分のお部屋へ被往しやい。俺達は直に飯を喫べに行くよ。安心しな。は、は、は！』

それから五六度新に溜息を漏らした後で、將軍の高笑ひは前よりも一層猛烈な勢ひで破裂した。そして、玄關から家中の一番遠い室迄反響した。

チヽコフは稍不安を感じて來た。

『伯父さん、伯父さん！　貴方は旨く馬鹿にされますよ』と、將軍は言つた。『は、は、は！　生きた農奴の代りに死んだ農奴を押附けられるなんて！　は、は、は！』

『如何したんだ、此人の神經は眞個如何かしてるよ！』と、チヽコフは一人で考へた。

『は、は、は！』と、將軍は續けた。『何と云ふ馬鹿だ！　そんな物を要求するなんて、一體如何したと云ふのだ！　俺の眼の前で空手で三百人拵へて見るが可い、そしたら俺の三百人をお前に遣るよ、だとさ！　伯父さんは本當に馬鹿だよ。』

『左樣です、閣下、眞個馬鹿で御座います。』

『で、其爺さんを死んだ農奴で御馳走しようとする君の手品は眞個旨いものだよ。は、は、は！　俺は君が其賣渡證書を伯父さんの前へ差出した時の伯父さんの顏が見られるなら、何でも遣つて仕舞ふね。だが、伯父さんは何だい？　何んな人だね？幾歳位に成つて居るのだ？』

『八十歳で御座います。』

『だが、動くことは出來るのかね。はき〳〵して居るのか。其家事取締が伯父さんと一緒に住んで居る位なら、隨分强い方だらうね？』

『實際強いのです！　伯父は一粒づゝ財產を失くして仕舞ふのですよ、閣下。』

『何と云ふ馬鹿だ！　確かに伯父さんは馬鹿だね！』

『伯父は馬鹿ですよ、閣下。』

『だが、世間へは出て歩くのかね。容子ははき〳〵して居るのか。一人で立つて歩くことは出來るのかね。』

『立つて歩くことは出來ます、だが、漸とですよ。』

『何と云ふ馬鹿だらうな！　怒つちや不可ないよ、ねえ君。君の伯父さんだが、眞個馬鹿だね。』

『私の身内ではあり、そんな事を承認するのは辛い話で御座いますが、閣下、伯父は眞個馬鹿ですよ。ですが、如何する譯にも參りませんからね。』

チヽコフは嘘を吐いたのだ。そんな事を認めるのは、別に辛くはない。大丈夫彼は是迄伯父なぞと云ふものを一人も有つたことがないからである。

『左樣云ふ事情で御座いますから』と、彼は附け加へた。『閣下があれを私に讓つて下さいますでせうなれば――』

『死んだ農奴かい。あゝ！　左樣云ふ手品のためなら、俺はそれに土地も家も附けて讓つて上げるよ。墓場全體を持つて行くが可い！　は、は、は！　其老人が！　其老人が！　は、は、は、！　君の伯父さんは何の位馬鹿にされるだらうね！　は、は、は！』

で、再び將軍の高笑ひは室から室へ鳴り渡つた。

原註曰、作者は物語の此部分を未了の儘打捨つて置いたものらしい。が、作者の死後發見せられた草稿の粗筋に據ると、彼は此處にテンチョートニコフが彼の友人なる將軍と仲直りをして、間もなくチヽコフの暗示の下に禮儀正しい訪問を拵つた。二人は千八百十二年の將軍に關して、一緒に二三の會話を交へた。そして、其結果テンチョートニコフはウリンカに結婚を申込んだ。彼女の父も到頭其婚約を承知した。それから我々の友人なるチヽコフに此の重要な報導を一門の面々に傳達する役目を委れようと決心した。で、此物語が再び十六章で始まる時、我々の主人公は其親戚の一人なるコシュカレフ大佐――此人は一種特別な偏狂に苦しめられて居たと云ふのである――の許を訪れようとして居るのだ。

第十四章　二人の極めて風變りな人物の話

『コシュカレフ大佐が本當に偏狂人だとしても、俺が一寸係蹄を懸けて見るのには別段不都合でもあるまい』と、チヽコフは再び廣い田野の中に、何も彼も消失して、眼に見える物とては頭の上の圓い天井と一方に見える二つの雲の外には何にもないと云ふやうな、ひろ〳〵とした曠野の中に出た時、一人で呟いた。

『セリファンや、お前はコシュカレフ大佐の許へ行く道を好く聞き糺して置いたかい』と、彼は訊いた。

『何卒考へて見て遣つて下さい、旦那、私は馬車の仕度ばかりして居ましたから、そんな隙間は少しも有りませんでしたよ。だが、ペトルシカは馭者に訊いて居たやうでした。』

『何と云ふ馬鹿だ！　ペトルシカは些とも宛に成らぬと、俺があれ程呉れ〳〵もお前に言つて置いたぢやないか。ペトルシカは馬鹿だよ、野呂間だよ、お負けに、今は屹度酔拂つて居るんだよ。』

『そんな事に、それ程艱かしいことは一つもないぢやありませんか』と、ペトルシカは半分ぐるりと向直つて、眼の隅からぢろ〳〵見遣りながら言つた。『只此の小山を降りてから田野の中へ出さへすれば、それより外に何にも爲ることはないぢや有りませんか。』

『で、お前は又下等なブランデイばかり飲んで居たんだな。好い、立派だよ。他人がお前を見たら言ふかも知れないよ、何と云ふ綺麗な歐洲人だらうと。』斯う言つた後で、チヽコフは顎を撫で廻しながら、自分と自分に訊いた、『これを要するに、教養ある貴族の人相と粗野な下男どものそれとの間には、何と云ふ相違が有るんだらうな。』

同時に馬車は小山を下り始めた。田野は、所々紅葉の林に飾られた、ひろ〳〵とした曠野と共に、再び眠の前に展けた。乘心地の好い馬車は、彈力の有る彈機の上に優

しく搖れながら、下り坂を降り續けた。そして、最後に田野を横斷つて、水車小舍の傍を通り過ぎた。それからごろ〳〵と輕い音を轟かせながら、橋を越した。そして、最後に低地の柔かな、轍の喰ひ込む表面を一跳ね跳ねて乘り越した。で、それからは右を見ても左を見ても、小山もなければ丘もない。沈默は四邊を領して、馬車の影一つ目に見えなかつた。

葡萄の樹や、細い赤楊や、銀のやうな白楊の叢が、其枝で以て駅者臺に乘つて居るセリファンやペトルシカを掃きながら、飛んで行つた。それ等の枝は又幾度となく後者の帽子を剝いで行つた。性惡の從者は駅者臺から飛び降りて、馬鹿な樹々や、自分をそんな所に棲らせて置いた主人やを罵つた。が、彼は其度毎にこれがお終ひだ、最う再びそんな不幸は起るまいと念じながら、帽子を靴かり結ひ着けようともしなければ、又手で抑へ附けても居なかつた。楓だの、赤楊だの、松だのが間もなく樹々の列に加はつた。森はだん〳〵暗く成つた。そして、今にも眞暗な夜の闇に變るかとも思はれた。が、不意に四方八方から鏡の反射とも思はれるやうな光の閃きが樹の枝や幹の間から射し込んで來た。林の樹はだん〳〵疎らに成つて、光の閃きはだん〳〵大きく成つて來た。其時、不意に一つの湖水が一行の眼前に顯れた——直徑四ヴェルストも有らうと思はれるやうな水の擴がりである。

湖水の上に高く、對岸に、村の灰色をした丸太小舍が所々點在して居た。二十人許りの男が、或は腰迄、或は肩迄、或は頸の邊り迄湖水の中に浸りながら、對岸へ網を引張り上げて居た。不意に一つの出來事が起つた。一尾の魚と一緒に、一人の男が網の中へこんぐらかつて仕舞つた——身の丈が横巾と同じやうな、恰度西瓜若しくは小さな桶と一對に成るやうな男である。彼は絶對絶命の狀態にあつた。そして、肺の臓の續く限りの聲を出して叫喚いて居た。『デニスの間抜奴、それをクヅマへ渡すんだよ。クヅマ、デニスから其端を取るんだ！　何をぼんやりして居るんだ、のつぼのフォーマ奴！　彼處へ行くんだよ、ちびのフォーマが居る所へ。仕樣のない奴等だな！　俺が言

つて置くが、貴様達は網を破つて仕舞ふぞ！』

此西瓜は明かに自分の身に就いては恐れを抱いて居なかつた。彼は肥滿して居るお蔭で、幾許溺れようとしても溺れることは出來ないのだ。水の中へ潛らうとして、幾許藻掻いて見ても、水は彼を表面に保つて中へ入れない。二人位此男の脊中に乘つかつても、彼は其二人を乘せたまゝ、頑固な膀胱のやうに水の表面に泛んで居る。只二人の重みでうん〳〵唸りながら、鼻から泡を噴く位なものだ。が、彼は網が破れて、折角捕まへた魚の遁げ出すことばかり、非常に心配して居た。で、繩を持つて土手の上に立つて居た數人の男は、魚と一緒に此男をそろ〳〵と引摺り上げた。

『あの人は屹度旦那方ですよ。コシュカレフ大佐に違ひありませんね』と、セリファンが言つた。

『何故？』と、我々の主人公が訊いた。

『あの人の身體を御覽なさいまし、外の奴等よりも餘程白いぢやありませんか。それに、あの人は旦那方のやうに活服好く肥つて被坐しやいますよ。』

其間、網の中に絡まつた紳士は大分岸へ近く引摺られて來た。足が水の底に觸るやうな氣がして、其處に突立つた。同時に彼は土手の方へ降りて來た馬車と、其中に腰掛けて居るチヽコフとに眼を留めた。

『君は晝飯を喫べましたか』と、其紳士は夏時分透いて見える手套に包まれた女の手のやうに、網の中に包まれた捕虜の魚を持つて、土手の方へ歩み寄りながら叫喚いた。それから彼は日光を遮るとて、片手を眼の上へ翳しながら、片手をぶらりと垂れて、恰度沐浴から上つたメヂチのヴィナスのやうに全世界を見渡しながら、再び大きな聲で前の質問を繰り返した。

『いや、未だ喫べません』と、チヽコフは帽子を持上げて、馬車の中からお叩頭を續けながら答へた。

『うむ、其奴ア有難い！』

『何故です？』と、チヽコフは矢張帽子を頭の上で持つたまゝ、好奇心に驅られて訊いた。

『何故と言つて！――ちびのフォーマや、其蝶鮫を洗濯桶の中へ入れて置け！クヅマ、行つて彼奴を手傳へ。』二人の漁師は今や桶の中から何か知ら怪物の頭を持上げた。

『御覽なさい、何と云ふ殿樣だ！　此奴も川から這入つて來たのですよ』と、强壯な紳士は附け加へた。『私の家迄行つて下さい。馭者、野菜畑を拔けて、此道を下つて行くんだぞ。走つて行け、のつぽのフォーマ、彼處の杙を引倒すんだよ。此奴が案內しますよ。私は後から直ぐ參ります。』

足の長い、裸足ののつぽのフォーマは、實際襦袢一枚で、村中を拔けて駈け出した。村には曳網だの、漁籃だのと云ふやうな物が到る所の小舍に懸けてあつた。百姓が皆漁師だからである。それから彼は野菜畑の杙を五六本引倒した。其野菜畑を拔けて、馬車は木造の敎會に近い廣場へ這入つて行つた。敎會の裏へ廻つて、少許行くと地主の家の屋根が見え出した。

『コシュカレフと云ふ男は眞個如何かして居るな』と、チヽコフは一人で呟いた。

『遣つて來ましたよ』と、一つの聲が背後で呶鳴つた。それを聞いて、我々の主人公はぐるりと振返つた。前の紳士は最う自分の傍へ來て居るのである。草色をした南京木綿の外套と、黃ろい洋袴を着けて居る。が、頸にはキュピッド人の習慣に從つて、頸飾を着けて居なかつた。彼は四輪馬車の中に橫坐りに坐つて、一人でそれを占領して居た。チヽコフは何か彼に言はうとした。が、見よ、彼は最う其處に居ないのである。四輪馬車は再び例の魚が引上げられた場所に現れた。そして、再び肥つた男の聲が鳴渡つた。『のつぽのフォーマよ、ちびのフォーマよ。クヅマよ、デニスよ。』

チヽコフが其家の玄關に到着した時、肥つた紳士は最う其處へ出迎へに來て居たので、吃驚して仕舞つた。如何して彼が其處へ飛んで來たものか、迚も解らなかつた。二人は互ひに接吻した。が、露西亞の古い習慣に從つて、三度十字を切つた後で左樣

したのだ。此紳士は舊派に屬して居た。

『私は閣下から貴方へ御挨拶を傳へに參つたのです』と、チヽコフは切出した。

『何處の閣下から？』

『貴方の御親類のアレキサンダア・ドミトリエヰッチ將軍からで御座いますよ。』

『其アレキサンダア・ドミトリエヰッチと云ふのは何んな人ですか。』

『ペトリシュチェフ將軍ですよ』と、チヽコフは稍吃驚しながら答へた。

『そんな人は知りませんね。』

チヽコフは層一層惘れて仕舞つた。

『こりやア如何したんだ？　少くとも、私はコシュカレフ大佐に御挨拶する光榮を有して居るので御座いませうね？』

『いや、それは遣つて居ますよ。だが、貴方があんな奴の許に被往しやらないで、私の許へ、ピョートル・ペトロヰッチ・ピエック、ピエック・ピョートル・ペトロヰッチの許へ被入したのは、恰度都合が好い』と、主人は繰返した。

チヽコフは思はず化石した。『こりやア如何したんだ？』と、彼はセリファンとペトルシカに向ひながら言つた。一人は馭者臺に腰掛け、一人は馬車の扉口に立つたまゝ、二人ながら顎を落して、眼を圓くして居た。『こりやア如何したんだ、馬鹿奴？　お前はコシュカレフ大佐の許へ行けと吩咐けられたんぢやないか。これはピョートル・ペトロヰッチ・ピエックさんのお家だぞ！』

『お前達は旨く遣つて呉れたよ、ねえ子供達！　さア厨房へ行くが可い、二人ながら火酒を多量に御馳走して貰へるぞ』と、ピョートル・ペトロヰッチ・ピエックは言つた。

『馬の馬具を解くが可い、そして、直に下男どもの部屋へ行くんだよ。』

『私は如何したら可いかと考へて居るんですよ、斯んな想ひ懸けない間違ひをしまして』と、チヽコフが言つた。

『そりやア間違ひぢやありませんよ。先づ何んな御馳走を差上げるか、それを喫つ

てから間違ひか如何か仰有るが宜しい。私は切に貴方のお這入りを願ひますよ』と、ピエックはチヽコフの腕を執つて、家の中へ案内しながら言つた。部屋の中から夏の外套を着て、柳の枝のやうに細そりした二人の青年が、彼等を迎へに出て來た。二人とも一アルシンたッぷり父親よりも身丈が高かつた。

『私の伴で、二人ともギムナジウムの生徒ですが、休暇で家へ歸つて居るんですよ。ニコラーシャや、お前はお客樣と一緒に殘つて居るが可い。それからアレキサシヤ、お前は私と一緒に來るんだよ。』斯う言つて、主人は又消えて仕舞つた。

チヽコフはニコラーシャに全幅の注意を向けた。後者は、見たところ、將來好い『役に立たず』に成るやうな徵候を十分に見せて居た。彼はチヽコフに初手から、田舍のギムナジウムで勉强した處で何の利益も得られない、自分も自分の兄弟も、田舍は生活に適しないから、是非彼得斯堡へ行きたいと思つて居ると云ふやうな話をした。

『そりやア左樣だ！』と、チヽコフは一人で考へた。『首府には隨分菓子屋や廣小路があるからね――成程！』と、彼は大きな聲で訊いた。『貴方の阿父さんの財產は何んな狀態にあるんですか。』

『抵當に入つて居ますよ』と、阿父さん自身客間へ這入つて來て答へた。『銀行へ抵當に入つて。』

『此奴は不好ないね』と、チヽコフは心の中で考へた。『此割合で行くと、間もなく所領も全然なく成つて仕舞ふだらうよ。俺も急がなくちや成らない――だが、確かにそんな必要はなかつたでせうにね』と、彼は惜しい事をと云ふやうな風をしながら言つた。『貴方は吃度遽てゝ抵當に入れて仕舞つたのでせうよ。』

『いや、そんな事はない』と、ピエックは言つた。『其方が利益だと云ふ話ですよ。近頃は誰でも財產を抵當に入れますよ。他の者が入れるのに如何して自分ばかり入れずに置かれますかい。加之、私は始終此處でばかり暮して來た。今度一つ莫斯科で暮さうと考へて居るんですよ、子供達も左樣して呉れと强請んで居ますからね。此奴等

は首府の文明に憧がれて居るんです。』

『何と云ふ馬鹿だらうな』と、チヽコフは心の中で考へた。『此男は何も彼も撒き散らして、子供を放蕩者に仕立上げようとして居る。これは一寸好い財産だがな。見渡した處、百姓は都合好く暮して居るやうだし、此男の住家も決して惡くはない。だが、あの子供達に彼方の料理屋や芝居で磨きを懸けた日にや、何も彼も煙に成つて仕舞ふだらうよ。此漁師は何時迄も田舎の自分の所領で暮す必要があるがね。』

『貴方が何を考へて被坐しやるか、私はちやんと知つて居ますよ』と、ピエックは言つた。

『何です？』と、チヽコフは稍たぢ〳〵としながら訊いた。

『貴方は考へて居たのでせう、「馬鹿々々、ピエックと云ふ男は本當に馬鹿だよ。此男は俺を晝餐に招待して置きながら、未だ御馳走の用意も出來て居ないのだよ」と。宜しい、今直に用意を爲せますよ。頭を剃つた娘が辮髪を編む暇もない間に用意をしてお目に懸けますよ。』

『阿父ちやん、プラトン・ミカイロヰッチさんが見えたよ』と、アレキサシャは窓から戸外を見遣りながら言つた。

『褐色の馬に乘つて來たよ』と、ニコラーシャが窓の枠に凭れながら附け加へた。

『何處に、何處に？』と、ピエックは窓の傍へ近寄りながら[illegible]た。

『プラトン・ミカイロヰッチさんと云ふのは如何云ふ方ですか』と、チヽコフがアレキサシャに訊いた。

『僕等の隣人だよ。プラトン・ミカイロヰッチ・プラトノフと云つて、本當に美しい男だよ』と、アレキサシャが答へた。

其間にプラトノフ自身其室へ這入つて來た。立派な男で、美しい顏立と生れ立ちから縮れて居る、光澤の有る明るい髪を有つて居た。ヤルプと云ふ名の大きな顎をした恐ろしい犬が眞鍮の頸輪を鳴らしながら、其男の後から這入つて來た。

『君は晝飯を喫べたか』と、主人が訊いた。

『あゝ、喫べたよ。』

『ぢや、何の爲に此處へ遣つて來たのだ――僕を笑ふためか。君が最う晝飯を喰つたとすりや、僕は君を如何して遣ることも出來ないぢやないかね。』

客は笑ひながら答へた。『僕はそれぢや晝飯に何にも喰はなかつたと云ふことを白狀して、君を慰めて上げようよ。僕は近頃全然食慾がないからね。』

『僕は又偉いものを捕まへたよ。實際君に見せて上げたい位だね。斯んな蝶鮫だよ。斯んな鯉にカラシシュチ(鯉に似た魚)だよ。』

『そんな事を言はれるだけでも、僕は胸が重く成る位だよ。如何して君は始終そんなに愉快にして居られるのかねえ。』

『又如何してそんなに人間が悒いでばかり居られるか、承はりたいものだね』と、此家の主人が訊いた。

『何故悒いで？　そりやア物事が退屈だからさ。』

『君は少許しか喰はないからだよ、それだけの話さ。まア御馳走をうんと喰ふ勘考をして見るが可い、悒ぐとか退屈だとか云ふことは近頃發明されたものだ。昔は誰も退屈するやうな人間はなかつたよ。』

『まア君の自慢は澤山だ。君は自分が全然悒いだことのないやうなことを言ふよ。』

『僕はないね。又悒いでなぞ居る隙間がないよ、そりやア誓つて云ふがね。先づ朝眼を覺ますだらう、早速料理番を喚んで、晝飯の仕度をさせなくちや成らない。それからお茶が來る、監督が遣つて來る、それから漁にも行かなければ成らない、左樣すると恰度晝飯だ。晝飯の後では、未だ鼾を掻く隙間もない間に、又料理番が遣つて來るので、晩飯の用意をきせなくちや成らない。斯んな鹽梅式だもの、如何して悒いでなぞ居る隙間が有るんだい？』

此會話が續いて居る間、チヽコフは眼も放たず新來の客を觀察して居た。其男は素

張しく立派な顔立と、纎細で、繪のやうな姿と、黑子一つない、女のやうに綺麗で鮮やかな顔色とで、痛く我々の主人公を驚かした。情熱も、悲哀も、又はそれに似たやうなものも、若い娘のやうに純潔な此男の顔の上には、一指を加へることも敢てしなければ、又皺一筋其上に刻むことも敢てしなかつた――寧ろ左樣した方がそれに生命の感を與へる所以であつたのだ。何と成れば、時々皮肉な微笑がそれを輝かして居たにも拘らず、稍睡たいやうな顔附であつたからである。

『で、失禮ですが』と、チ、コフは言つた。『貴方のやうな立派な風采をして被坐しやる方が悒鬱に沈むなぞと云ふことは、私にも薩張解り兼ねますね。勿論、其人に金子がないとか、又は敵が澤山あるとか云ふんなら――世の中には隨分人の命迄覗つて居るやうな連中も有りますからね。』

『ですがね』と、其の綺麗な男が口を挾んだ。『私は時として心配でも可いから少許有つたら好からうと思ふことも有りますよ。えゝ變化のためにですね。誰か私を情熱の中に投じて呉れる者が有つたら！　ですが、そんな人間は一人も有りませんよ。眞個退屈でさね。それッ限りで、他に何にもないのですからね。』

『ぢや、貴方の所領には土地が十分ないとでも仰有るのですか。それとも、貴方の御所持に成る農奴の數が少ないとでも？』

『いや、如何致して。私は兄と二人で一萬デシャーチン（略一萬二千町歩）の土地とそれに附屬した一千人以上の農奴を有つて居ますよ。』

『可訝しいですね！　何うも私にや解りませんよ。多分貴方のお宅ぢや收穫でも好くなかつたのか、それとも傳染病でも流行つたのか、さもなければ男の農奴でも續いて死んだのでせうね。』

『それ處ぢやない、何も彼も好都合に行つて居ますよ。私の阿兄は支配人として卓越した手腕を有つて居ますからね？』

『それで居て悒鬱に沈む！　私にや如何しても解りませんね』と、チ、コフは肩を

聳かしながら言つた。

『いや、此男の悒鬱なぞ僕等が直に追拂つて遣りますよ』と、主人が言つた。『アレキサシャや、直ぐに厨房へ駈けて行つて、料理番に大急ぎで肉饅頭を持つて來るやうに左樣言つてお出で！　又出過ぎ者のエメリヤンや泥棒のアントシュカは何處に居るんだ？　何故彼奴等はザクスカ（食慾を刺戟する食物）を持つて來ないのか。』

が、其瞬間に扉が開いた。出過ぎ者のエメリヤンと泥棒のアントシュカがナフキンを持つて現れて、それを食卓の上に擴げた。そして、其上にさま〳〵な色をした飲料を容れた六つの酒の罎を載せた盤を置いた。有らゆる種類の食慾を昂奮させるやうな食物を盛つた皿の頸飾りが直樣前の盤や罎の周圍を取捲いた。二人の下男は絶えず何か知ら蓋をした皿に持つて來ながら、彼方此方飛び廻つた。其蓋の下から牛酪のふつふつ沸つて居る音が聞えた。出過ぎ者のエメリヤンと泥棒のアントシュカとは手際好くこれ等の物を配置した。彼等の綽名は只奬勵の目的で與へられたものに過ぎない。

此家の主人は人の好い處から、全然叱ると云ふことが所嫌だ。が、露西亞人と云ふものは時々藥味のやうな言葉を使はないでは居られない者である。それは彼に取つて、消化を助けるために、一杯の火酒が胃の腑に必要で有るが如く必要で有るのだ。それを如何することが出來よう？　左樣云ふのが彼の生れ附きである。彼は甘い物は一つも好かないのだ。

ザクスカの後から直ぐ御馳走が持ち出された。今や親切な主人はすつかり山賊に變つて仕舞つた。何人かの肉叉に一片の食物が持ち上げられたのを見ると、彼は直樣『友達がなくちや、人間でも鳥でも此世に立つては行かれませんからね』と言ひながら、又鳥肉の一片を附け足した。何人かゞ又二片目を喫べようものなら、彼は直樣、『二つと云ふ數は何と云ふ數です？　神樣は三位一體がお所好ですよ』と言ひながら、前の二片の頂邊へ第三の片を積み重ねた。又客が三片喫べると、彼は『何處に三つの輪で駛る馬車が有りますかい。又誰が三つの隅しかない小舍を建てますかい』と言つ

た。四片目に關しても、彼は又同じ樣な諺を用意して居た。五片目に就いても同樣である。チヽコフは到頭十二片許り平げた。そして、『うむ、幾許此家の主人でもこれ以上には喰はせまい』と考へて居た。が、それも無益であつた。一言も物を言はないで、主人は彼の皿の上に一番大きな犢から取つた肋骨を腎臟と一緒に載せて呉れた。

『私は此犢を牛乳で二年育てゝ居ましたよ』と、主人は言つた。『宛然自分の子供のやうに可愛がつて育てたものです。』

『最う迚も喫べられませんよ』と、チヽコフが言つた。

『まア喫べて御覽なさい、それから後で喫べられないと仰有るが可い。』

『迚も咽喉へ這入りませんよ。最う空地が殘つて居ませんからね。』

『成程、諺にも言ひますね。敎會に一つも空地が殘つて居ない。ですが、警察の署長が遣つて來ると――彼のために何處か空地が目附けられると。そりやア林檎一つ落ちる隙間もない程群集が詰んで居ても左樣ですからね。まア喫べて御覽なさい、其一片は警察の署長ですよ。』

チヽコフは喫べて見た。實際、其一片は何處か警察の署長見たやうな處があつた。其一片のために空席は見出された。が、最早何んな事があつても何一つ這入らないやうに見えた。

『で、斯んな男が彼得斯堡や莫斯科へ行つたら如何成るのだ！　斯んな歡待を續けて居ちや、三年經たない間に此男は破產して仕舞ふだらうよ』と、チヽコフは考へた。勿論、彼はそんな事は疾くの昔に左樣成つて居ると云ふことも、又客を歡待せずとも、人間は三年處か、三箇月經たない間に、何も彼も失くして仕舞ふことが出來ると云ふことも知らないで居たのだ。

葡萄酒に關しても亦同樣であつた。抵當銀行から金子を受取ると、ピヨートル・ペトロヰッチは直樣向ふ十年間の葡萄酒の貯藏を準備した。それだから、彼は注いだ後から又注いだ。客が飲まないと、彼はそれをアレキサーシャやニコラーシャに與へた。

彼等は客と同じ様に盃の縁を合せたものだ。斯んな青年が首府へ到着してから人類の知識の何んな方面へ先づ注意を向けるかと云ふことは、今から明白に解つて居た。客は二人ながら殆ど動くことも出來なかつた。漸との思ひで露臺迄自分の身體を引摺つて行つたが、安樂椅子へ腰掛けるのは更に一層の困難であつた。主人は特別に四角な形に出來た自分の安樂椅子へ腰掛けると、其儘睡つて仕舞つた。彼の肥大な身體は鍛冶屋の鞴に改宗したと見えて、開いた口と鼻の穴から寫實主義の作家でも表現し兼ねるやうな素張しい音を立て出した。太鼓と笛とを一緒にして、それに犬の吠聲を加へたやうな物音である。

『如何です、偉い汽笛を鳴らしますね』と、ブラトノフが言つた。

チ、コフも笑ひ出した。

『勿論、斯んな風にして御馳走を喫べて居たら悒ぐ機會なぞはない筈ですね。直に寢て仕舞ふんですもの、左樣ぢやありませんか。』

『左樣ですね。ですが、お言葉にも拘らず――御免下さいましよ――如何して貴方のやうな方が悒ぐことなぞ出來るかと、私にや不審に思はれますね。退屈を防ぐ方法なぞ幾許でも有るぢや御座いませんか。』

『何んな方法が有ります？』

『若い方に取つちや幾許でも有るぢや御座いませんか。舞踏をするとか、何でも可いから器樂を遣つて見るとか――縱しんば結婚するなぞと云ふことは言はないにしても。』

『誰と結婚するんです？』

『ぢや、此近邊に金持で美しいお孃さん方はないので御座いますね？』

『えゝ、有りませんね。』

『ぢや、何處か他所でお搜しに成つたら可いでせう。旅行することも出來ますよ。』

斯う言ひながら、一つ素張しい考へがチ、コフの頭腦の中に閃いた。『左樣だ、此奴は

旨い考へですね？』と、彼は凝乎と相手の眼を見詰めながら言つた。

『何が？』

『旅行するんですよ。』

『何處へ行かうと云ふんです？』

『貴方さへ宜しかつたら、私と一緒に被入しやいませんか』と、チ、コフは言つた。そして、プラトノフを見詰めながら考へて居た。『此奴は旨い工合だぞ。左樣すりや、費用は二人で分擔するとしても、馬車を修繕する諸入費はすつかり此男に背負はせることが出來るからね。』

『ですが、貴方は何處へ被往しやるんです？』

『目下の處、私は自分の用事と云ふよりは他人の用事で旅行して居るのですがね、將軍ペトリシュチェフと云つて、私の親友ですよ、まア恩人とも言へますかね、此人から親類中に傳へて呉れと頼まれたのですよ——一言にして言へば、只一家の事件なんですがね。が、こりやア謂はゞ私自身のことだ。で、貴方は何と思つて居られるか知らんが、世界を見歩いて、人民を觀察すると云ふことは、一種の生きた書物ですよ、第二の教育ですよ。』斯う言ひながら、チ、コフは一人で考へて居た。『實際、此奴は旨い工合だぞ！　俺は此男にすつかり費用を負擔させることも出來る、又自分の馬は此男の村に飼はせて置いて、此男の馬で旅行することも出來るんだ。』

『如何して俺は旅行しちや成らないのだ？』と、同時にプラトノフは又プラトノフで考へて居た。『俺は自宅に何にも用事がない。家政の取賄ひは萬事阿兄が遣つて居て呉れる。して見りや、それに就いても何一つ心配はない。實際、何故俺は旅行しないのだ？　貴方は何ですか』と、彼は大きな聲で訊いた。『私の阿兄の許に二日許り逗留して頂くことは出來ないでせうか。左樣しないと、兄は私を出して呉れないでせうからね。』

『そりやア喜んで逗留しますよ、えゝ三日でも。』

『宜しい、一つ握手しませう。そして、一緒に出懸けませうね』と、プラトノフは顏中輝かじながら言つた。

彼は手を拍つた。『是非一緒に出懸けませう！』と、後から附け足して言つた。

『何處へ？　何處へ行くんだ？』と、主人は眼を覺まして、ぼんやり二人を見詰めながら言つた。『いや、僕は遣らないよ、僕は馬車の輪を外すやうに吩咐けて置いた。プラトン・ミカイロヰッチ君は、君の馬は十五ヴェルストも向うへ遣つて仕舞つたよ。』

『いや、君は如何しても今夜此處で泊るんだ。で、明日の朝早く晝飯を濟ましてから、何處でも勝手な所へ行くが可いんだ。』

ピエックに懸つては誰も愜はない。二人は到頭其處へ泊らせられた。そして、其報酬として美しい春の夜を惠まれた。主人は川遊山を準備した。十二人の漕手と二十四挺のオールとが、一行に鏡のやうな湖水の面を練り廻らせた。一行は湖水から川へ這入つた。其川は限りも知られぬ程廣く、兩岸に斜に成つた土手を控へて居た。一行は時々岸から岸へ張られた繩の下を潛つた——漁獵の扶けとするために張つてあるのである。水が瀧津瀨と成つて亂れるやうなことは殆どなかつた。刻々に變り行く景色は默つて人の眼に其美を訴へた。次々に現れる森はさまざまな樹木の變化に依つて人の心を新にした。

漕手は二十四本の櫂を同時に掴みながら、不意にそれを空中へ持上げた。短艇は鏡のやうに波立たない水の面を小鳥のやうに輕く滑つて行つた。歌手指揮者は肩の廣い青年で、舵手から三番目に坐つて居たが、鶯の咽喉から出るやうな朗かな、鈴の音のやうな聲で、歌の第一行を唄ひ出した。五人がそれに伴れて疊句を唄つた。他の六人が又それを引延ばして、露西亞それ自身のやうに際涯のない旋律を打出した。ピエックですら立上つて、合唱隊が息を吐く間、何時でもそれを支へながら、口の中でぶつぶつ唸り出した。チ、コフですら自分が露西亞人であると云ふやうな感じを抱いた。プラトノフ一人考へて居た。『何だ、斯んな哀しげな歌の何處に佳い所がある？　只

人間の心を一層悒鬱にするばかりぢやないか。』

一行が歸つた時、夜の影は既に四邊を包んで居た。最早空の色を反射しない、眞黑な水の上をばた〳〵と櫂が打つた。一行は幾つかの焚火が燃えて居る暗闇の岸へ上陸した。三脚架の上で新に獲つた、ぴち〳〵跳ねる鯉から造つた肉汁を料理して居るのである。村の家畜や家禽はずつと前に家路へ追ひ遣られた。彼等の立てた塵埃も再び鎭まつた。牧人どもは彼等を追ひ遣つた後、毎時貰ふ牛乳の一壺と、魚の肉汁の分前に預からうとして、門の前に立つて居た。暗闇の中に壓へ附けたやうな人間の呟きや遠方の村から響いて來る犬の吠聲が聞えて居た。月が黑い山影を照らしながら登つて來た。最後に何も彼も其光に浸つた。其光景は驚嘆に値するものがあつた。が、それも賞讃する者は一人も居ない。ニコラーシャとアレキサーシャは莫斯科ばかり、都から來た士官候補生が話して行つた料理店や劇場のことばかり夢みて居た。彼等の父は如何して客を饗さうかと、そればかりを考へて居た。プラトノフは欠伸をして居た。

チヽコフは一行の中で一番昂奮して居るやうに見えた。

『實際』と、彼は考へた。『俺も何時か自分の小さな村を有ちたいものだな。田舍を措いて、何處に人間の住む所が有るものか。』で、美しい細君や、小さなチヽコフどもの幻影が又彼の空想に上つて來た。

で、夕飯の時彼等は再び腹一杯詰め込んだ。バヴェル・イワノヰッチは自分のために用意された部屋へ這入つて、寢床の上に横はりながら、胃の腑を撫でゝ見た時、つくづく言つた。『こりやア一杯だ、咽喉元迄一杯だ！　幾許眞物の署長さんでも此中へは這入つて來られまい！』處で、此家の主人の書齋は、恰度我々の主人公の部屋の壁一重隣に位して居た。それに境の壁が薄かつたと見えて、書齋の話聲が一々此方へ聞えて來た。で、今や主人は料理番を招び寄せて、明日の朝の御馳走の用意を吩咐けて居るのである。又其命令が素張しいのだ。これでは死骸でも食慾を奮ひ起したかも知れない。第一の呶鳴り聲は斯うだ。『で、それも褐色に焙くんだよ。好く牛酪が着いて居

るか如何か氣を附けるんだぞ！』それから料理番は耳を劈くやうな假聲で答へた。『畏まりました、旦那！　仰有る通りに致しますよ、旦那！』

『で、お前は四角な魚の肉饅頭を拵へて呉れるんだよ』と、主人は啜るやうな音をさせて息を引きながら續いて言つた。『一つの角は蝶鮫の頰と軟骨とを入れて置くんだ。又最一つの角には、葱と菌と大蒜と牛乳と腦味噌と牡鷄の鷄冠と、ざり蟹とを詰めた蕎麥粉の團子を入れて置くんだ――解つたらう。何でも可いから、旨く喰べられるやうに拵へるんだよ。』

『はい、旦那。旦那の仰有りつけのやうに致しますよ。』

『で、片側を褐色に焙くんだよ、片側は少許淡くね。それから外皮が中身と同じに汁を含む位に焙くんだよ――解つてるね、硬くぢやない、口の中で溶けるやうな工合に焙くんだよ。』斯う言つて、ピエックは舌打をした。そして、口端を拭つた。

『如何したと言ふんだ！　此奴は迚も俺を睡らせやしない』と、チヽコフは聞えないやうに頭へ上被を引被りながら考へた。が、今度は上被を透して、次のやうな言葉が聞えて來た。

『それから蝶鮫の周りに蔡菜と菌の小さな星を入れて置くが可い――解つたかい、山葵や、蕪菁や、胡蘿蔔や、豌豆や、其他――何と云ふか知らないが――そんな樣な物と一緒にだよ。畢竟出來るだけあしらひが澤山有るやうにするんだね。それから又塡め物をした豚の胸を皮附のまゝ出して貰ひたいね。あゝソースは別に出すんだよ。』

其他ピエックは、絶えず『それから褐色に焦がすんだよ、縮れるやうに焙くんだよ、好く牛酪が塗つてあるか如何か氣を附けるんだよ』と繰り返しながら、いろんな皿を澤山命じて居た。チヽコフも到頭主人が七面鳥に就いて何か命令を下して居る間に眠つて仕舞つた。

次の日二人の客は又しこたま詰め込んだ。其結果プラトノフは馬に乘ることが出來なく成つた位だ。彼の乘馬はピエックの馬丁の一人を附けて送り還された。そして、

彼とチ丶コフとは同じ馬車に乘り込んだ。其間鼻の平ベッたい犬のヤルブはさも氣懶相に後から隨いて行つた。此犬も亦喰ひ過ぎたのだ。

『これは又餘まりだ。斯んなに喰ひ過ぎるのは何うも好くありませんね』と、二人が其家を離れた時、チ丶コフは言つた。

『それを又あの男は當り前だと考へて居るんですからね。眞個あの男には惱まされたよ』と、プラトノフは言つた。

『うむ、だが、俺も此男のやうに一年七萬留布の收入が有つたら』と、チ丶コフは考へた。『そんな事に惱まされはしないだらうよ。』

『一つ此處から十ヴェルスト離れた村迄一緒に行つて下さらないでせうかね』と、プラトノフが訊いた。『私は姉と姉婿に暫時の暇乞ひをして來ようと思ふんですよ。』

『宜しいとも、喜んで御一緒に伺ひますよ』と、チ丶コフが言つた。

『若し所領の采配に就いて、何か委しい事を知らうと云ふ思召があるんなら』と、プラトノフが言つた。『義兄と懇意に成られたら、屹度何か知らお利益に成ることが有るだらうと思ひますよ。義兄に優るやうな支配人は澤山有りませんからね。十年の間に、義兄は最初三萬留布しか取れなかつた處を、今ぢや二十萬留布以上の收入が有るやうな、立派な土地に自分の財產をして仕舞ひましたよ。』

『成程、其方は屹度立派な人物で御座いませうね！　私はそんな方と御懇意に成れるのを何よりも喜んで居ります。ですが、あれは何でせうか。畢竟何で御座いませうね、其方の御苗字は何と仰有るんですか。』

『コンスタンツォーグロと言ひますよ。』

『で、御洗禮の名前や御兩親から受けられた名前は何と申しますか。』

『コンスタンチン・フョードロヰッチ・コンスタンツォーグロと云ひますよ。實際あの男と知合に成られたらお利益でせうよ。あんな男を知るのは、第一に敎訓的ですからね。』

プラトノフは適當な處置として、セリファンの指導を自分の身に引請けた。何と成れば、此馭者は馭者臺の上に辛うじて駐ることが出來たからである。ペトルシカは如何と云ふに、二度迄材木のやうに馬車から轉がり落ちた。到頭、終ひには荒繩で馭者臺へ縛り附けて置く必要を生じた。『何と云ふ畜生だらう！』と、チヽコフは只それだけ言つたばかりであつた。

『御覽なさい！　此處からコンスタンツォーグロの所領ですよ』と、プラトノフが言つた。『全然他とは樣子が違つて居ませう！』實際、野原一面に樹木を植ゑて、幼樹は箭のやうに揃つて蠶々と立つて居た。其次には又前よりも丈の高い幼樹の植附が顯れた。其後から又一層大きく成つた林が顯れた。斯うして一片毎に林は前のものよりもだん〳〵古く成つて行く。で、今度は又五穀の豐かに稔つた田野の一片が顯れた。其次に、再び前と同じ樣に森の若樹がだん〳〵古い林に變つて行つた。一行が樹の枝のアーチの下を潛つた時、プラトノフは『これが皆八年か十年の間に成長したのですよ』と、呶鳴つた。『他の人が遣つたんぢや、十二年かゝつてもこれだけには延びないでせうがね。』

『如何して斯んなにしたものでせうね？』と、我々の主人公が訊いた。

『あゝ、そりやアあの人に訊いて下さらなくちや不可ませんよ。あの人は土壤に關したことなら何でも好く知つて居ますからね。何んな事を爲ても決して無駄には爲ない。あの人は土壤を理解して居るばかりでなく、何んな樹は何んな地方に植附けなければ成らない、何んな穀物は何んな樹と一緒にして置くと好く育つかと云ふこと迄、ちやんと心得て居ますよ。一つの事が一時に三つ乃至四つの目的に副ふやうにするんです。あの人が一片の森を造つたら、それは森が森としての利益を擧げる外に、落葉から何許かの肥料と、何許かの陰影を生ずる外に、餘分の濕氣は皆田野へ供給するやうな工合に爲るんですよ。で、他所では到る處旱魃に苦しむやうな場合にも、あの人の土地には一向旱魃なぞ起らない。四邊近隣では皆收穫が惡いと云つて瀉して居る時

でも、あの人の許では決してそんな事はない。私は何うも左樣云ふことを餘り好く知らないから、貴方の得心の行くやうに十分説明することが出來ないのは、眞個殘念ですよ。ですが、姉婿はいろんな不思議な工夫を凝らしますのでね、近隣では魔法使ひと言はれて居る位ですよ。貴方は姉婿の所領でいろんな珍らしい物を御覽に成るでせうよ。ですが、矢張私にや退屈ですね。』

『實際其男は希らしい人物かも知れないよ』と、チヽコフは考へた、『平常何んな事をして居るのか、此男がそれを私に語り得ないのは、眞個殘念な話だ。兎に角、早く其人に會つて見たいものだな。』

到頭行手の村が目の前に顯れて來た。殆ど一つの町かとも思はれた。一團の小舍が三つの小山の上に散らばつて居た。小山の頂邊には、皆一つづゝ教會が建つて居た。到る所乾草や五穀の山積みが家の境をして居た。『成程』と、チヽコフは考へた。『こりやア屹度近邊で重きを成して居る人物が住つて居るに違ひない。』

百姓の小舍は皆好く建てられて居た。道路は平坦であつた。荷車が來るのを見ると、皆堅牢で新しかつた。出會ふ百姓どもは皆悧巧さうな顏付をして居た。家畜は皆一粒撰りの種類に屬して居た。農奴どもの豚ですら貴族のやうな面構へをして居た。此處に住んで居る百姓どもは、歌の文句にも有る通り、屹度銀の鋤で地を掘つて居るに違ひない。英吉利風の公園だの、芝原だの、いろんな工夫を凝らした園亭だの、橋梁だのと云ふものは何處にも見えなかつた。が、古代の流儀に從つて、穀倉や勞働者の小舍の並んで居る小徑は、殆ど地主の邸の入口迄續いて居た。で、周圍に起つて居る事は、何でも主人の一眸の中に收めることが出來た。更に此整理を完了するために、四方十五ヴェルストも展望の出來るやうな、高い見晴しの塔が屋根の上に建てられて居た。これは決して裝飾のためではない、遠方の田野へ出て居る勞働者を監視すると云ふ、明白な目的を有つて居るのである。玄關の下で、一行は醉拂ひのペトルシカなぞとは似ても似附かぬ、好く訓練の行屆いた從僕どもに出迎へられた。彼等は別に燕尾

服を着て居ると云ふ譯ではない、單に青い色をした手織の質素なコサック外衣を着て居るばかりだが、それでも矢張一種の威風を備へて居た。

此家の女主人も自分で玄關迄駈け出して來た。彼女は鮮血や牛乳のやうに生々して居た、又日曜日のやうに美しかつた。そして、プラトノフとは一滴の水が他の一滴の水に似て居るやうに似て居た。但し彼女は弟のやうに倦怠した容子はしてゐない、非常に快活でもあれば、好くお饒舌もすると云ふだけの相違はあつた。

『あら被入しやい！　本當に好く來て下さいましたわね』と、彼女は言つた。『コンスタンチンは今自宅に居ませんがね、でも、直に歸つて來ますよ。』

『何處へ被往したのです？』

『えゝ、何か商賈どもと村で用事があると言つて居ました』と、彼女は二人の客を家の中へ案内しながら答へた。

チヽコフは珍らし相に二十萬留布の收入が有ると云ふ、此立派な人物の住居を見廻した。そして、其住居の樣子からして主人の性質に關する何等かの暗示を得たいものだと望んで居た。が、何等の推定をも下すことは不可能であつた。室々は單純で、殆ど裝飾らしい裝飾はなかつた。壁畫もなければ、骨董なぞを載せる臺もない。高價な陶器類もなければ、書物すら置いてない。これを要するに、主人は餘り四方の壁の中で時間を費さないと云ふことが、何を見ても判つた。彼は明かに始終田野の上に在ることを好んだ。彼は又奢侈逸樂の徒のやうに、安樂椅子に凭れて、暖爐に面しながら計畫を立てると云ふやうなことはなかつた。彼の計畫は田野で活動して居る間に彼の頭腦に泛んだ。そして、其計畫が一たび成るや、直に實行に移された。チヽコフが室の中で眼にすることの出來た仕事の徵候は、皆主婦の身に關係の有るものばかりであつた。卓子や椅子の上には、清淨な菩提樹の木の板に花瓣を澤山載せて乾かしてあつた。

『お姉さん、下らない芥屑を澤山擴げたものですね？』と、主人が訊いた。

『芥屑ですつて！』と、女主人が叫んだ。『こりやア熱醒しに一番好く利くんですよ。去年もこれで百姓どもを澤山癒して遣りました。それから、これは昂奮劑で、これは砂糖漬にするんですよ。貴方は毎も私の砂糖漬や鹽漬を笑ひますがね、でも喫べさせると、何時でも憫れたやうに讃めるぢやありませんか。』

プラトノフは洋琴の傍へ寄つて、其處にある音譜を飜つて見出した。『まア如何したと云ふんです！　古い物ばかりですね』と、彼は言つた。『何ですかい、貴方はこれで羞かしいことは有りませんかい。』

『左樣ね。ですが、大目に見て下さらなくちや困りますよ。私なぞ最うずつと以前から音樂なぞに身を入れて居る暇はないのですからね。今年八つに成る娘が有るんでせう、私があれを敎育しなけりや成りませんもの。何ですかい、私は只音樂に身を入れる時間を產み出すために、あの子を外國人の保姆の手に渡さなくちや成りませんかい。いゝえ、貴方も其處は察して下さらなくちや不可ませんよ。私は何んな事が有つてもそんな事爲る氣には成れませんからね。』

『いや、貴方も眞個所帶染みたものですね』と、弟は窓の傍へ寄りながら言つた。

『あゝ、來ました！　彼處へ遣つて來ましよ。阿兄さんが遣つて來ましたよ』と、プラトノフが叫んだ。

チヽコフも急いで窓の傍へ近寄つた。四十位の年輩の、日に燒けた、活々とした男が玄關へ近づいて來た。彼は編んだ帽子を被つて、駱駝の毛の外套を着て居た。明かに服裝には頓着しない性質らしかつた。下層な階級の男が二人彼と並んで、帽子を手にしながら、何事かを商議しい〳〵歩いて居た。一人は普通の百姓であつた。今一人は所々を廻つて歩く仲買兼冒險家で、靑い色のシビルカ（背後の割れて居ない、長い上衣）を着て居た。一同玄關の前で立停つた時、彼等の會話は家の中からも聞えるやうに成つた。

『お前方は斯うした方が好からうと思ふがね』と、コンスタンツォーグロが言つた。

『先づお前方の主人からお前方の自由を購ふが可い。俺が左樣するだけの金子をお前方に貸して遣つても可いんだよ。後にお前方が俺と一緒にそれだけの金子を働き出したら可いぢやないか。』

『いえ、そんな自由なぞ購つて如何しますべえ？　それよりか、私どもを旦那の農奴にして下せえまし。旦那に隨いてさへ居れば、誰でも自然に知慧が附く。今の世で苦しいことゝ云へば、私どもが自分の身の始末をすることが出來ないと云ふ處にあるんですからね。酒舗は一口飲んでも酒の一樽も飲んだ程胃の腑の痛み出すやうな強い酒を賣出しました。酒の醉が醒めるか醒めない間に、身代を棒に振つて仕舞ふやうなことに成りましたよ。近頃は貧乏人を陷入れるやうな陷穽が澤山出來て來ましたからね。此世を支配して居る惡魔が――あゝあ南無阿彌陀佛――何事に據らず人間に道を蹈み外させるやうに支度をするので御座いますよ。煙草なぞと云ふものを始めとして、いろんな物を喫み始めましただ。が、如何することが出來ませう、コンスタンチン・フョードロヰッチさま？　神樣の眼から見れば、何んな者でも人間で御座いますからね、誰でもそれを拒む譯には參りませんよ。』

『ねえ、問題は此處に有るんだよ。お前方は私の許へ來たとて全然自由の身に成れると云ふ譯ぢやないんだよ。成程、最初には牛や馬も引包めて、何も彼も遣るには遣る。が、肝心な點は、私の百姓どもに對して要求する處は他の如何なる場所に於けるよりも大いなるものが有ると云ふ處にあるんだね。私にあつては、勞働が第一の條件である。私は私自身に對しても、又他の何人に對しても、怠惰と云ふことを許さない。私は牡牛のやうに働く、又同じ樣に百姓どもにも働かせる。有らゆる下らない考へが人間の頭へ這入つて來るのは仕事の缺乏に因することが多いのだからね。だからお前方も村のミール（村の年寄どもの會議）で好く此事を相談して見るが可い。まア其相談を遂げてから遣つて來るんだね。』

『私どもは最う好く相談したゞよ、コンスタスチン・フョードロヰッチさま。年寄ど

もは最う各自に自分の意見を述べました。「おゝ！」と、其奴等が言ひますだ。「コンスタンチンさまの百姓は皆金持ばかりだ。又貴方の村の坊樣は皆お慈悲深い方ばかりだ。だのに、自宅の村の坊主と來たらお看經一つ碌に爲やアしない。實際死人が有つても滿足に葬つたことはねえんでがすよ。』

『それにしても、矢張歸つて好く相談して見た方が可いね。』

『はい、畏まりました、コンスタンチン・フョードロヰッチさま。』

『何卒一つ些と許り値段を引いて頂く譯には參りませんでせうか、コンスタチン・フョードロヰッチさま』と、青い色のシビルカを着て、地主の他の側を歩いて居た、其邊を廻つて歩く商賈が言つた。

『俺は最う前に其返辭はして置いたよ。何時迄も値段を競合ふことなぞは所嫌だからね。俺は借金を督促られるのが苦しさに、お前方の言ひ成り次第に成るやうな、他の地主連とは少々違つて居るんだよ。お前方の術は皆知つて居るだらう、えゝ？　お前方は借金に苦しんで居る連中の名簿を作つて居るのだ。だから、何んな事を爲れたつて驚くことはないやね。借金に迫られてあぶ〳〵言つてる連中は値段の半額でも賣るだらうよ。だが、お前方の金子を俺が如何するんだい？　俺は止むを得なげりや三年でも賣らずに待つて居ることが出來るんだよ。俺は抵當銀行へ拂込まなくちや成らぬやうな金子は有つて居ないからね。』

『そりやア左樣で御座いますとも、コンスタンチン・フョードロヰッチさま、又私にしても、斯んな事をお願ひするのは只貴方と取引がさせて頂きたいので、決して慾得や儲けづくで申して居るんぢや御座いませんよ。ですが、何卒此三千留布だけは手附金として取つて置いて頂きたいもので御座いますね。』斯う言つて、其のいかさま師は自分の懷中から一束の汚れた銀行紙幣を引出した。コンスタンツォーグロはさも氣がなさ相に其金子を受取つて、外套の背後の衣囊へ押込んだ。

『ふむ！』と、チゝコフは一人で考へた。『宛然あれだけの包みを手巾でも扱ふやう

に扱つて居るんだよ。』

コンスタンツォーグロは今や客間の扉口に現れた。チヽコフは先づ此人の赤銅色をした顔色と、此處彼處時ならずして白髪を混へた硬張つた黒い髪の毛と、活々した眼の表情と、火のやうな南國人らしい、稍癇癖の強さうな態度とに打たれた。コンスタンツォーグロ自身は自分の先祖が何處から出たと云ふことなぞ全然知らなかつた。一家を整理して行く立場から見れば、そんな事こそ餘計な事で、取るにも足りない事柄のやうに考へて居たので、系圖なぞと云ふことは全然氣に懸けて居なかつたのだ。彼は何うも純粹な露西亞人ではないらしかつた。彼の顔立も左樣でないことを證明して居る。が、彼は自分が一箇の露西亞臣民であることは信じて疑はなかつた。又露西亞語以外の國語は一つも知つて居ないのである。

プラトノフはチヽコフを彼に紹介した。二人は習慣に從つて互に接吻した。

『私はヒポコンデリヤを癒すために、一つ國内のいろんな州を經廻つて歩かうと云ふ計畫を立てたのですがね』と、プラトノフは言ひ出した。『で、此處に居る此バヴェル・イワノヴヰッチさんが、私の悒鬱を癒すために、一緒に歩いて遣らうと仰有るんですよ。』

『そりや好いでせう』と、コンスタン・ツォーグロは言つた。『何方の方面へお出懸けに成らうと云ふのですか。』

『實を申しますと』と、チヽコフは禮儀正しく一方へ頭を傾けて、同時に椅子の腕を撫で廻しながら答へた。『實を申しますと、私は只今自分のためと云ふよりは、他人の用事で歩いて居るので御座います。ペトリシュチェフ將軍、此人は私の親友で、まア私の恩人と言つても可い人ですが、此將軍が親類の間に通知をして呉れと私に頼んだのです。で、私は其方々數名に會ひに行かなければ成らない。ですが、一方に於て、私も謂はゞ自分の用事で旅行して居るので御座いますね。健康に關して旅行から得られる利益を擧げない迄も、私は世の中を見て、いろんな人民の習慣を研究するのが所

好なのです。旅行は生きた書物です、謂はゞ科學それ自身のやうなもので御座いますからね。』

『左樣です、いろんな地方を覗いて廻るのは決して惡いことぢやない。』

『眞個仰有る通りですよ。左樣だ、事實の問題として、決して惡い結果は齎さないのですからね。旅行をしなければ見られないやうな物も見られる、會はれないやうな人々にも會はれる。彼等の或者と會話を混へるのは、其重さを金で積んだ程の値打が有りますからね。例へば、現在此處にも一つの例が有るぢや御座いませんか。私の最も尊敬するコンスタンチン・フォードロ并ッチさん、私は切に貴方にお願ひ致します。何卒私に敎へて下さい、私を敎訓して下さい、眞理に對する私の渴望を癒して下さい！　私はマンナ(神の賜ふ食)を待つて居るやうに、貴方の甘いお言葉を待つて居るので御座います！』

『ですが、何の爲に？　何を私が貴方に敎へるので御座いませうね？』と、コンスタンツォーグロはまご〳〵しながら訊いた。『私は極めて僅かな代價を拂つて、憐れな敎育を受けただけの人間で御座いますよ。』

『貴方の知慧ですよ、知慧ですよ。我が最も尊敬する君――田舍の所領を整理するに必要な知慧ですよ、それから確實な收入を抽出す知慧ですよ、此樣に國民としての有らゆる義務を盡しながら、又同胞の間に多大の尊敬を博しながら、尙旦空想でない、實際の財產を獲得する知慧ですよ。』

『宜しい、左樣云ふ事でしたら』と、コンスタンツォーグロは考へ深い眼に凝乎と我我の主人公を見詰めながら言つた。『一日私どもの宅に御逗留なさい。私は有らゆる整理を貴方に見せて進ぜませう、又何事に依らず知つて居る限りはお話も致しませう。そしたら、そんな知慧なぞと云ふものは一つも要らないことを御了解に成るでせうよ。』

『左樣、お泊りに成ると好う御座いますね』と、コンスタンツォーグロ夫人は言つ

た。そして、弟の方へ振向きながら附け足した。『貴方もお泊りなさいよ、ね。そんなに急いで立つ必要は些ともないでせう？。』

『私にや何方でも同じ事だ。如何しませうねえ、バヴェル・イワノヴッチさん？』

『私は喜んでお言葉に從ひますよ。ですが、此處に一つ困つたことが有るんですがね、私はペトリシュチェフ將軍の親戚で、コシュカレフ大佐とか仰有る方をお訪ねしなけりや成らないのですよ。』

『如何して、あの人は狂人ですよ。』

『えゝ狂人ださうです。私もそれは聞いて居ますがね。私自身としては、勿論會ひに行く氣はないのですが、ペトリシュチェフ將軍、私の親友で謂はゞ恩人なのですね、此人が是非行つて呉れと賴むんですよ。』

『左樣云ふ譯なら、斯う爲すつたら可いでせう』と、コンスタンツォーグロが言つた。『あの人の家は此處から十ヴェルスト離れて居ません。私の馬車は始終馬具を着けて、出立の用意をして居ますよ。これから直に行つて、其人に會つて被入したら可いでせう。お茶の時迄には十分此處へ戻つて來られますよ。』

『眞個好い考へですね！』と、チヽコフは帽子を掴みながら叫んだ。

主人のブロリヨツカ（圓い形をした四輪馬車の一種）は直樣玄關へ廻された。そして、半時間の間に彼を大佐の村へ連れて行つた。村中が亂雜を極めて居る。建て懸けの建物も有れば、建て直し懸けの建物も有る、瘢物や、煉丸の碎片や、丸太棒が到る所道を塞いで居る。家々は皆法廷のやうに見えた。一軒の家には『農業器具の倉庫』と云ふ金看板が懸けてある。次の家には『計算主務局』、最そつと行つた所には『卿村委員會』、又其次の建物には『農民高等教育の學校』なぞと云ふ看板が懸けてある。一言にして言へば、其處に無いものは無いと言つても可い位だ。

我々の主人公は大佐が齒の間にペンを咬へながら、計算主務局の椅子に凭つて居る處へ這入つて行つた。コシュカレフは特に機嫌の好い體で彼に應接した。外見から判斷

すると、此人は極端に愛想の好い、甚だ近づき易い人物のやうに思はれた。彼は先づ現在の盛大な狀態に自分の所領を齎した、非常な勢力に就いて我々の主人公に語り出した。彼は百姓どもをして奢侈とか、美術とか、熟練とか云ふものが有ると云ふことを了解せしむる困難に就いて烈しく不平を並べた。彼は又今日迄女どもにコルセットを着用せしめることが出來ないと云つて瀉した。然るに彼が千八百十四年中自分の屬する聯隊と共に數箇月間逗留して居た獨逸では、自分の知つて居る水車小舍の娘ですら洋琴を彈くことが出來たと云ふのだ。が、無學な黨派の有らゆる反抗にも拘らず、彼は飽迄自分の目的を貫いて、百姓どもが避雷針に關する書物を讀んだり、ヴァーヂルの『チ・ールヂカ』を讀んだり、又は鋤で畑を耕すやうに、土壤の化學的分解をする程度迄、村の百姓どもを開發したいと望んで居た。

『何だと、誰が斯んな事を是迄聞いたことが有るんだい！』と、チ、コフは一人で考へた。『俺は今日迄「ラ・ヴリエール公爵夫人」すら通じて讀んだことはないのだ！　そんな隙間はないからね。』

大佐は又人民の安寧幸福を促進する上に大分意見を有つて居た。衣服と云ふものが彼に取つて非常な意味を有して居るらしい。若し露西亞の百姓どもの唯の半分でも獨逸風の洋袴を穿くやうに成つたら、科學も進歩するだらうし、貿易も盛大に成るだらう、黃金は絶えず露西亞の國內に充實するだらう――それが出來なかつたら、此首を賭けても可いと迄息込んで居た。

チ、コフはまじ〳〵と大佐の眼を見詰めながら、何時迄も耳を傾けて居た。最後に自分で獨言を言つた、『こりやア最う明白だ、斯んな男に對して遠慮をして居る必要はない』と。彼は直樣事情を述べて幾許かの農奴が買ひたい、必要な賣渡證書を手に入れて、有らゆる形式上の手續を充したいと申込んだ。

『僕が貴方のお言葉に依つて判斷する限りに於て』と、大佐は少からず面喰ひながら言つた。『貴方の言はれるのは、そりやア一つの請求ですね。左樣ぢや有りませんか。』

『其通りですよ。』

『其場合に於て、それは一つ書いて差出して貰ひたいものですね、左樣すると、それは先づ願書受附係の手に渡りますよ。係の者はそれに就いて意見を交換した後、私の許へ持つて參ります。私からそれが鄕村委員會の手に移るのです。それからさまざまな補訂を加へた後で、監督の手に渡りますよ。監督はそれから私の秘書官と商議します。』

『何を馬鹿な！』と、チヽコフは叫喚いた。『斯んな取引を書き物にして扱つて居たら、何時迄かゝるか知れたもんぢやない！　ねえ貴方、私の請求して居る農奴は何ですよ――一面から言へば――死んで居るんですよ。』

『宜しい。それぢや、一面から言へば、其農奴は死んで居るとお書きなさい。』

『ですが、如何して死んだ農奴だなぞと云ふことが書けるんです？そんな風に記載することは全然不可能ですよ。縱しんばそれが死んだ農奴であるにもせよ、其奴等が生きて居るやうな鹽梅に見せて置かなきや成りませんからね。』

『宜しい。それぢや、「其奴等が生きて居るやうに見せ掛けて置くことが必要である、若しくは、願はしい、若しくは請求する」と、まア何でも可いから貴方の所好なやうにお書きなさい。こりやア如何しても書類にして取引する外に道は有りませんね。英國、いやナポレオンですら其例を示して置きましたよ。私は好く委員に言ひ含めて置きますから、其奴が貴方を有らゆる局へ御案内しますでせう。』

彼は呼鈴を鳴らした。秘書官だと云ふ一人の男が其處へ現れた。

『委員を一人寄越せ！』百姓と役人との合の子のやうな委員が又一人其處へ現れた。『此男が貴方を有らゆる必要な場所へ案内致しますよ。』斯う大佐は言つた。

『チヽコフは好奇心から其委員に隨いて行つて、所謂必要な局課を觀察して來ようと決心した。願書受附係の局は未だ看板しか出來上つて居なかつた。そして、錠が堅く卸されて居た。其係の長は新に組織された鄕村建築委員會の方へ廻されて居た。

其男の椅子は最初ベレトーヴスキイと云ふ大佐の從僕に依つて占められた。が、其男も亦後から建築委員會の方へ連れて行かれて仕舞つた。二人は又郷村委員會の局を訪づれて見た――其處では萬事整理の仕直しを遣つて居た。最後に二人は一人の酔拂ひを掘り出して來た。が、其男からは一つも滿足するやうな返辭は得られなかつた。『此村ぢや何も彼も馬鹿らしい狀態に在るんですよ』と、其委員は到頭チヽコフに向つて切出した。『主人は鼻で引張り廻されて居るんですからね。何も彼も建築委員會の心の儘です。委員會が斯うと思つたら、何んな人間でも其男の仕事から引離して、所好な處へ送つて遣りますよ。で、委員會は何んな事件でも只利益だけ吸つて居るんですね。』此男は委員會に對して明かに餘り好意を有つて居ないのだ。

チヽコフは周圍を見廻した時、何處にも彼處にも建築が遣り掛けにしてあるのを見た。彼は其上觀察の歩を進めやうとは思はなかつた。歸つた時、彼は大佐に向つて物事總て滅茶苦茶だ、此處には亂雜より外に何一つ見られない、それを强ひて理解しようと思つても不可能である、それから願書受附係と云ふやうな局は全然有りやしない、單に身知らずの泥棒が群つて居るばかりだと告げた。

大佐は感謝の徵號として熱心にチヽコフの手を握りながら、沸然として義憤を發した。それから直に紙とペンとを掴みながら、極めて曖昧な性質の八つの問題を書き下した。何の理由に依つて、建築委員會はそんな高壓的手段を執つて、其權威の下に置かれて居ない役人を處置したか。如何して專務主事は、先づ自分の地位を辭職することもしないで調査に從事することを仕事の監督者に許可したか。又如何して郷村委員會は通信及び誓願の受附係が全然存在して居ないと云ふ事實を冷淡に看過することが出來たか。

『こりやア如何しても暴風雨が起りさうだ！』と、チヽコフは考へた。そして、早速別れを告げて去らうとした。

『いや、僕は如何しても貴方を歸さない』と、大佐が言つた。『僕の個人的自尊心が

傷つけられたのですからね。僕は一つ貴方に家政の正則な、組織的進行は何んなものかと云ふことを見せて上げますよ。僕は貴方の用向を一人で他の總ての人間を合せたよりも値打のある人物に委托しますよ。其男は大學を卒業して居ます。僕の所有して居る農奴はそんなものですからね。では、高價な時間を空費しないために、一つ圖書室へお出でを願ひますよ』と、大佐は側の扉を開けながら附け加へた。『此處でお待ち下さい、書物でも、紙でも、ペンでも、鉛筆でも、其他何でも御入用な物は其處に御座いますからね。何卒それをお使ひ下さい、何でも可いから悉皆お使ひ下さい。貴方は此部屋の主人ですよ。文明は總ての人に對して自由でなくちや成りませんからね。』

コシュカレフはチ、コフを圖書室へ案内しながら、斯う言つた。天井から床迄書物のぎッしり詰つた、大きな室であつた。其書物は學術の有らゆる部門に亘つて居た。養林法から、牛や豚の飼育法、園藝其他に到る迄、何一つないものはない。又會員の間に弘まつては居るが、何人も讀んだことのない、有らゆる問題に關する特殊の日記も有つた。チ、コフはそれ等の書物が一つも時間潰しに適して居ないのを見て、次の棚に移つた。これは又フライ鍋から火の中へ飛び込んだやうなものである。總ての書物が皆哲學的述作であつた。六つの大きな書冊が『思想の領域に入る階梯、一名一般的生産の相互的分配の組織的本原の概念に適用せられたる普及、協力、眞髄の理論』と云ふ表題を附せられて、眼の前に現れた。チ、コフが其一冊を手に取つて、ぱら〳〵と飜つて見ると、一頁毎に『現象』だの、『發展』だの、『抽象』だの、『隔離』だの、『接續』だのと云ふやうな文字が後から〳〵現れて來た。

『こりやア迚も俺には解らない！』と、我々の主人公は言つた。そして、三番目の書架へ移つて行つた。此處には美術の部門に屬する有らゆる書物が並べてあつた。彼は其處から、如何はしい神話の繪を載せた、容積の多い一冊の書物を取出して、それを一枚づゝ見て行つた。其繪の風姿は中年の獨身者、又時としては寄席小舍の舞姫其他それに似た藥味の後を追掛けて廻るやうな、髪の毛の白い老人どもを喜ばせる種類

のものであつた。一通り其書物を檢査した後で、チ、コフは同じ表題の他の一冊を棚から卸さうとして居た時、コシュカレフ大佐が手に書類を持つて、顏中喜悅に輝きながら其室へ這入つて來た。

『すつかり出來上りましたよ、上等飛切りに！　貴方にお話した例の男は眞個天才ですね。これに對して、僕はあの男を他の連中總ての上に置きますよ。あの男一人のために一つの局課を設立する積りです。まア見て下さい、あの男の頭腦ははつきりして居ることを――數分間の間にこれだけの事をすつかり處理して仕舞ひましたよ。』

『いや、此奴は助からない事に成つたぞ！』と、チ、コフは考へた。そして、耳を傾ける用意をした。

大佐は又次の樣に讀み出した――

『閣下から私に委任された事件の前後を考量して見た後、私は次の如く報告する光榮を荷ふものである――

「第一、六等官兼騎兵士官パヴェル・イワノヴィッチ・チ、コフの請求は、請求其者からして一つの間違つた概念を含んで居る。何と成れば、同氏の所謂農奴は一種の錯誤から死んだと稱せられて居るからである。此名稱に依つて、同氏は恐らく死期に近い農奴を指定せんとせられるもので、決して死んだ農奴を請求せられる譯ではあるまい。又此名稱其者は十中の八九或教區學校で受けられた經驗的教育の例證を示すものである。何と成れば、人間の魂は不死のものであるからである。」

『此男は悧巧な男ですよ』と、コシュカレフ大佐は滿足らしく言つた。『此處の所で少少貴方のお氣に觸れるやうなことを書いてますね。だが、何でせう、筆は立派に立つでせう！』

『第二に、此所領には死期に近い者にもせよ、又其他の種類の者にもせよ、抵當に這入つて居ない農奴は一人もない。何と成れば、彼等は一人も殘さず一番抵當に這入つて居るばかりでなく、一頭百五十留布の額迄二番抵當に這入つて居るのである。加

之、グルマイロヴカの小村に到つては、目下隣地の地主プレヂシュチェフと係爭に成つて居る訴訟關係の結果、其位置すらも明確ではない。此訴訟關係は本年の「莫斯科新報」第四十二號の紙上に適法に公にされて居るのである。』

『それぢや何故最初から私に左樣言はなかつたのです？　何故そんな詰らない事で私を引留めたのです？』と、チヽコフはぷん〳〵憤つて訊いた。

『成程な！　だつて何ですよ、貴方が書類に依つて此事の通告を受けると云ふことが必要ですからね。馬鹿は聰明でない手段に依つて物事を認めることも出來る。が、我々は萬事を聰明に理解しなくちや成りませんからね。』

チヽコフは憤然として帽子を掴んだまゝ、有らゆる禮儀を無視して、家の外へ駈け出した。彼の馭者はすつかり馬車の用意をして待つて居た。何と成れば、其馭者は飼草が欲しいと思へば、一々それに對して請求書を差出さなければ成らない、又燕麥を與へないと云ふ命令も明日に成つて、初めて出るんだとすりや、馬の馬具を解いても仕方がないと云ふことを十分心得て居たからである。それにも拘らず、大佐は我々の主人公を馬車迄見送りに駈け出した。彼は熱心に相手と握手して、それを自分の胸に當てがひながら、自分の村の諸機關が何んなに働いて居るかを見る機會を與へて呉れたと言つて、相手に謝して居た。彼は又物事は刺戟を與へて、始終動かせて置かなければ成らない、何と成れば有らゆるものは睡氣を催して、監理の彈機は錆びて碎れ易いものだからなぞと言つて居た。實際、此出來事に基いて、一つの旨い考へが彼の心に泛んで居たのだ。卽ち建築委員會以上の權利を有たせた、調査委員會と稱する委員會を組織しようと云ふのである。左樣すれば、將來何人も竊盜を働くことは出來ないと云ふ譯だ。

チヽコフはぷり〳〵憤つて、不滿を感じながら出て行つた。そして、暗く成つてから、最う蠟燭が點く時分に、漸とコスタンツォーグロの邸へ到着した。

『如何して斯んなに晩く成つたのです？』と、主人は彼の姿が闇の上に現れたのを

見て訊いた。

『左様、斯んなに長くあの大佐と何を議論して居たのです？』と、プラトノフも訊いた。

『私は未だ生れてからあんな愚物を見たことがありませんよ』と、チヽコフが言つた。

『まア好いでせう』と、コスタンツォーグロは傍から言つた。『コシュカレフも面白い人物ですよ。あの人もあれで利益に成りますね。あの人の中に、極めて誇大した著しい姿に於て、自分では何一つ知らない癖に、天下を指導する力が有るやうに自惚れて居る自稱賢人の馬鹿さ加減が反映して居るぢやありませんか。あの人は無暗に役所や工場や學校を設立する。あの人の建てないものは何にもないと言つても可い位ですね！　あの人だの、あの人の仲間は千八百十二年に於ける佛蘭西侵入軍の劫掠から恢復するや否や、今度は又自分達で自分を滅し盡さなければ止まない。實際、あの人達は佛蘭西人が劫掠したよりも、一層烈しく自分達を劫掠しましたよ。そんな風ですからあのピョートル・ペトロヰッチ・ピエックのやうな人間が地主の好模範と見做されるやうなことに成つて仕舞つたのですね。』

『で、あの人の財産は目下抵當銀行へ質に這入つて居る相ですね』と、チヽコフが言つた。『左様です！　何も彼も質に這入つて、何も彼も銀行へ行つて仕舞ふのですよ。』斯う言ひながら、コスタンツォーグロは少しく憤りを發したやうに見えた。『此處に又蠟燭の工場を建てたシリヤプキンと云ふ人物が有りますがね。此男は倫敦から職工を招いて、自分で蠟燭の商賣に成つたのですよ。地主が蠟燭を賣る――眞個立派な商賣ですね！　此男は又いろんな製造人や工場の持主を廻つて歩いて、紡績の器械を据ゑ着けて、町のお轉婆娘や女どものためにキャラコの製造を始めましたよ。』

『ですが、貴方も工場を有つてお坐ぢやありませんか』と、チヽコフが傍から言つた。

『で、誰がそれを設立したのです？　設立したものは工場それ自身ですよ。羊の毛が堆積した。他にそれを私から手離す道がないので、私は羅紗を織り始めた。えゝ、只百姓の着るやうな、粗造な物ですよ。尤も値が安いので、其幾分かは市場で私の手から買ふ人も有りますがね。又六年間引續いて漁師が所領の川岸に魚の鱗を山と積んだ。これを又如何したら可いもんでせうね？　で、私は仕方がないからそれを蒸して膠にした。それからでも四萬留布の收入は有るんですよ。まア私の許ぢや何も彼も斯んな工合に遣つて行くんですね。』

『何と云ふ旨いことを爲やアがるんだ！』と、チヽコフは凝乎と相手の眼を見詰めながら、一人で考へた。『此男は金子を掃き寄せるに何んな爪を有つて居るんだらう！』

『で、又私は他の動機からも斯んな事を企てたんですよ。私は勞働者を澤山此處へ集めて來た、左樣しなけりや餓死するやうなはめに成つて居たのですからね。其年は飢饉でしてね、それも悉皆播種を怠つた所謂工業家の過失に據るのですよ。いろんな工場が私の手に聚つて來た、ねえ貴方。毎年新しい工場が出來て行きますよ。單に甲の種類又は乙の種類の癈物が堆積するからですね。まア好く家庭の經濟と云ふことを考へて御覽なさい。何んな塵芥でも癈物でも屹度收入に成ります。』

『眞個驚くべきことですね！　成程、癈物が收入に成る』と、チヽコフが言つた。

が、其時コスタンツォーグロは彼の所謂露西亞人の性格のドン・キホーテ主義に就いて烈しい演說を遣り出した。で、チヽコフは有らゆる種類の癈物が收入を生ずるやうにする遣方に關して、委細の事を主人に質問しようと思つて居たが、一言でも口を挾む機會がなかつた。

『或人々は自分達が百姓の蒙を開いて居ると想つて居る』と、主人は言つた。『先づ百姓を富まして、好い經濟家にして遣るが可い。左樣すりや、後は一人で遣つて行きますよ。然るに現今の人々は迚も想像にも及ばない程愚劣なものである。まア近頃

雑誌記者なぞが書くことを御覧なさい！　彼等は詰らない小冊誌を出版する。左様すると有らゆる人々がそれに向つて突進する。で、其連中の言ふ處は斯んなものです、

「百姓どもは極めて單純な、餘りに單純な、睡たいやうな生活を送つて居る。百姓は先づ奢侈の物資を知るやうに成らなければ成らない、卽ち百姓も高い文明の必要を感ずるやうに爲れなければ成らない」と。處で、左樣云ふ連中自らが、そんな奢侈のお蔭で、何だか得體の知れない病氣に絡まれながら、人間に成らないで襤褸に成つて仕舞つた。近頃は最う十八の少年で何も彼も遣つて見ないやうな者はないぢやありませんか。其奴等の齒は一本も殘らず脫けて仕舞つて、頭も水腫れのやうに禿げて居る。で、今や彼等は又百姓どもにそれを傳染させようとして居るのです。ですが、有難いことには、我々の中にも未だ總ての罪惡に導かれたことのない、健全な一つの階級が殘つて居ます。これに對しては、私どもは只神に謝する外ありませんね。農業に從事する者が我々の間に於て最も尊敬すべき人間であります。何の理由が有つて私どもは其人間に干涉するのです？　願はくば總ての人間が皆百姓のやうにあつて欲しいものぢやありませんか。』

『では、貴方は農業が人間の身心を傾倒するに足る最も有利な職業だとして被坐しやるやうで御座いますね？』と、チヽコフが訊いた。

『最も有利と云ふ譯ではありませんが、最も正しい職業だとは云はれます。「額に汗して土を耕すべし」と云ふ言葉が有りますね。これは決して驚くべきことではありませんよ。人間が農業に從事して居る時、一層道德的で、純潔で、高尙で、一層氣高いものであると云ふことは、數代の經驗に依つて、既に證明された事實ですからね。私は決して其他の職業に從事することを避けよと言ふのではない、併し農業をして常に根柢に在らしめよ――それだけですね。工場も自然に起りますよ、而も恰度其處に必要とされて居るやうな、正しい種類の工場が、自分で其場へ出て働くやうな人物の指揮の下に起りますよ。有らゆる種類の卑劣な手段が採用せられるやうな、又憐れな貧

乏人の徳性が亂され、腐敗せしめられるやうな、そんな種類の工場ではないのです。誰が奢侈に就いて何と言はうとも、私は此領地の上に、例へば煙草とか砂糖とかに對する要求を生せしむるやうなものは一切設立しない積りですよ。如何しても罪惡が此世に入らなければ成らぬとしても、それは私の媒介を通じてでは斷じてない。私は神の前に正しきものでありたいのです。私は二十年間人民の中に生活して來た、私は何んなものが何んなものだと云ふことは知つて居る積りです。』

『私に取つて一番驚くべきことは、正當な支配に依れば利益は塵芥や屑の中からでも導かれる、有らゆる種類の廢物が收入に成ると云ふ貴方のお言葉で御座いますね』と、チヽコフが言つた。『例へば、私が一箇の地主に成つたとして、市民としての最高の義務を充すことが出來るために、短日月の間に自分を富ましたいと思つたら、何んな工合に取懸つたもので御座いませうね。』

『貴方は金持に成るためには、如何進んで行つたら可いかと仰有るんですね？』と、コスタンツォーグロが答へた。『あゝ、其處が肝心な點ですよ。』

『さア、皆さん晩餐の席へ着きませう！』と、此家の女主人は長椅子から立上つて、室の眞中へ歩み寄りながら言つた。彼女は其處で顫へる四肢を肩掛に捲いて居た。

チヽコフは殆ど軍人が示したと同じ樣な快活な態度で、顏に微妙な政事家の嫻雅な表情を漾へながら、女主人の傍へ飛んで行つて、一振り手を振りながら、自分の腕を彼女に捧げた。そして、二つの室を通り拔けて、食堂迄彼女を護衞して行つた。其處では食卓の上に肉汁の皿が最う蓋を取つたまゝ並べてあつた。そして、新しい野菜と春の植物の快い匂ひを發散して居た。一同食卓に就いた。下男どもは手早くいろんな食物を蓋のある皿に盛つたまゝ、其他の必要な物と一緒に食卓の上に並べては、直に又室の外へ出て行つた。コスタンツォーグロは下男どもが目上の人達の會話に耳を傾けたり、又は物を喫べて居る間に、自分の姿をぢろ〳〵眺めて居られたりすることが所嫌であつたからである。

『貴方は地主に成りたいと云ふやうなことを話して被坐しやいましたね』と、彼は到頭我々の主人公に向ひながら言ひ出した。『ふむ、私どもの隣人で、クロブヨフの所領が賣物に出て居ますがね。あれをお買ひに成つちや如何です？　恰度好い機會ですよ。で、私ならそれに對して即座に四萬留布は拂ひますがね、えゝ、先方がそれだけ請求するならばですよ。』

『ふうむ！』と、チヽコフは呻くやうに言つた。そして、深い考へに沈んだ。『ですが、何故』と、彼は稍躊ひながら、到頭訊いて見た。『何故貴方は御自分でそれをお求めに成らないのです？』

『人間は何處かで境を劃することは心得て居なくちや成りませんからね。私はこれより以上の責任を引請けないでも、今有るだけの所領で隨分澤山の面倒を脊負つて居るんですよ。加之、此地方の紳士どもは私は彼奴等の切迫した事情や破產を利用すると言つて――實際、私が二束三文に土地を買占めようとしてでも居るやうなことを言つて、始終反對の聲を擧げて居ますからね、私もそんな事は最うつく〴〵可厭に成つたのですよ。』

『眞個他人と云ふものは惡く言ひたがるものですね！』と、チヽコフが言つた。

『特に私どもの州では左樣ですよ。迚も貴方方のお考へに成るやうなものぢやありませんね。あの連中は私のことを第一流の吝嗇漢だとか守錢奴だとかより外には、決して言ひませんよ。で、自分達のことは有らゆる點に於て辯解をして居るんですね。「成程私は身代潰しだ。だが、そりやァ私が一層高い生活の要求に從つて生活して、商賣どもの、換言すれば破落漢どもの手に乘つたからだね。勿論、私だつてコスタンツォーグロの爲るやうに吝嗇漢の眞似をして暮さうと思へば暮せたんだがね」と。』

『私も斯んな吝嗇漢には成りたいもので御座いますね！』と、チヽコフは言つた。

『で、萬事が斯んな虛僞や無意味ばかりなんですよ。一層高い要求、成程！　何故彼奴等はそんなに讃められるんでせうね？　成程、彼奴等は書物も買ひます。だが、

決してそれを讀む譯ぢやありませんからね。結局骨牌と三鞭に終るんですよ。で、斯んな事を言はれるのも、皆私が御馳走をして彼奴等を招ばないのと、彼奴等に金子を貸さないからです。私は只彼奴等を饗應するのが面倒臭いから御馳走なぞしないのです、私は餘り宴會なぞに慣れて居ませんからね。ですが、何誰か私の許へ被入して、私の喫べるものを喫べて下さりや――所謂有合せの膳部で召上つて下さりや――私は來て頂くのを非常に喜んで居るのですよ。私が金子を貸さない！　何を馬鹿な。絶對に必要な場合には、私の許へ被入して、事情を話して下さい、それから如何云ふ目的に私の金子を使用するんだと云ふことも。で、若し貴方方の言葉から、貴方方がそれを譯の解つた道へ使はれる、又其金子が明かに貴方方の利益に成ると云ふことが腹へ這入つたら、私は喜んで御用立てしますよ。利息だつて貴方方から貰はうとは思つて居ませんね。』

『此奴は一つ記憶えて置く必要が有るぞ』と、チ、コフは考へた。

『で、私は滅多に、左樣云ふことが有るとしても、滅多に斷つたことはない』と、コスタンツォーグロは續けて言つた。『だが、何でもないことに金子をばら撒くやうな眞似は斷じてしない積りです。此心持は貴方も了解して下さるでせうね。又そんな事を爲す人間があつたら、それこそ下らない奴等だ！　そんな人達は細君のために人を招いて金子を散じたり、狂人染みた樣式で家の飾附けをしたり、又は自分が一生無駄に暮して來たと云ふ事實を記念しようとして、下らない宴會を開いて喜んで居るんですよ。斯んな人達に金子を貸すのは眞個無益なことですからね！』

斯う言つて、コスタンツォーグロは其處へ唾を吐いた。そして、細君の前だのに、何か猛烈な、穩當でない言葉を發しようとした。悒鬱なヒポコンデリヤの色が彼の顏を暗くした。垂直や水平の皺が、それ程迄に昂奮した憤懣の情の證左として、彼の額の上に聚つた。

『失禮ですが、一つ私どもの中斷された會話の題目に再び立歸つて頂けないでせう

か』と、チヽコフは又一杯葡萄酒を飲み乾しながら言つた。『例へば、私が今しがた貴方の仰有つて下さいましたやうに一つの財産を獲ようとして居るのだとして、好い加減の金持に成るには何の位の時日を要するもので御座いませうね？』

『左樣云ふお望みなら』と、コスタンツォーグロは未だ前の憤懣が解けないので、急に荒々しく相手を遮つた。『若し貴方が短時日の間に金持に成らうと思つて被坐しやるのなら、貴方は決して金持には成れませんよ。ですが、若し貴方が時日なぞに氣を揉まないで、ゆつくり富を造らうと思つて被坐したら、屹度早く金持にお成りなさるでせうよ。左樣だ』と、コスタンツォーグロは自分がチヽコフに對して個人的に憤る處が有りでもするやうに、矢張突發的に續けた。『先づ仕事に對して愛を感ずることが必要ですよ。それがなけりや、何事も成就するものでありませんね。貴方は先づ貴方の所領の支配を好んで遣ると云ふ風でなければ不可ない。で、私は斷言しますが、それは決して退屈なものではないのですよ。人々は田舍の生活は退屈なものだと云ふやうな小說を作つて仕舞ひましたがね。私が若し都會の人達と同じ樣に、馬鹿々々しい倶樂部や、料理店や、劇場などで、只の一日でも過さなくちや成らぬとしたら、屹度退屈の餘り死んで仕舞ふでせうよ。馬鹿や、愚物や、猿どもばかりですよ、彼奴等は！　所領の支配人は退屈するやうな暇は少しもない。まア一年中の仕事を見て御覽なさい。春が來る前に、最う何も彼も用意して置かなければ成らない。種子の準備もあれば、納屋で穀物を類別して量ることもある、又乾燥もある。で、氷が解け始めて小川の水が流れ、地が暖まる時分には、野菜圃や花園へ鍬を入れて、田野の上では鍬や耙が働き出す、それから植附や種子蒔が始まるんですね。えゝ、未來の收穫が蒔かれるのです、世界の祝福が蒔かれるのです、百萬の人口の食物が蒔かれるのです！　で、それから又乾草刈が始まるんですよ。で、いよ〳〵夏が遣つて來たんです。不意に收穫が全速力で行はれるんですね。小麥がライ麥の後から遣つて來る、其後から大麥と燕麥が遣つて來る。何も彼も沸り切つて居るから、一分間だつてまご〳〵しては居ら

れない。縱令眼が二十有つても、それ〳〵仕事が有る位ですよ。で、何も彼も終つた時――穀物が打穀場へ運ばれて行つて、穀倉の中に收められて仕舞つた時――其時秋の刈株の鋤き返しが始まるんですよ、冬の間の貯藏所の準備や、禾堆や家畜の檻の監督や、同時に又女どもの仕事が始まるんすでよ。で、其後冬の間に穀物を連枷で打つて穀倉へ移したり、森の樹を伐つたり鋸で引かせたり、春仕事場を建てるために煉瓦や丸太を運搬して置いたりするんですね。粉磨小舍へも行かなければ成らない、工場へも行かなければ成らない、職人どもの小舍も監督しなければ成らない。又百姓どもの小舍へも何んな工合に遣つて居るか見に行かなければ成らない。左樣だ、私はね、大工が斧を旨く扱つて居ると、二時間も立つてそれを見て居るんですよ。畢竟仕事と云ふものは、それ程愉快な効果を私の上に齎すんですね。で、又これ等の事が皆何んな目的で爲されて居るか、自分の周圍の總てが絶えず收入を擧げながら、何んなに增加し倍加して行くかと云ふことを覺つたら――えゝ、其心の中の悦びは何んなものであるか、私は殆ど言ふ處を知りませんね。物論、それは自分の金子が殖えて行くからと云ふのではない――金子それ自身に於ては何でもないものですよ――だが、これ等の事が總て自分の手に成つたからと云ふのです、自分が總てこれ等の事の源泉で有ると云ふ自覺から來るんです。卽ち自分が造物主である、恰度魔法使ひのやうに、自分から總ての人々の上に善きこと、豐かなことが注ぎ掛けられると云ふ自覺から來るんですね。で、如何です、私に取つて斯んな大きな享樂が他に有りませうかね』と、コスタンツォーグロは言つた。そして、顏を擡げた時、前の皺は痕方もなく消えて居た。彼は嚴かな卽位式の日に於ける皇帝のやうに晴々とした顏をして居た。一種の光が彼の顏から照り渡るやうに見えた。『左樣だ、全世界を搜しても、他に是程の樂しみを發見することは出來ませんよ。此處に於てか、人間は初めて神を眞似ることが出來るのです。神は有らゆる享樂の中でも最高の享樂として創造と云ふ仕事を自分でお始めに成りました。そして、神は人間が自分を造つて呉れた神に倣つて自分の周圍に幸福を

撒いて行かれるやうに、人間にも自分と同じ事を爲よと命ぜられるのですぞ。然もそれが退屈な仕事だなぞと言はれて居るんですからね！』

チヽコフは天の鳥の歌聲でも聽いて居るやうに、主人のすら〳〵とした言葉に耳を傾けて居た。彼の口には唾液が湧いた。彼の眼も濕つて來て、至大の幸福を表現して居た。

『ねえ貴方、最う彼方へ參りませう』と、此家の女主人が食卓から立上りながら言つた。一同立上つた。チヽコフは一振り振つて自分の腕を捧げた。そして、女主人を客間へ伴れて歸つた。が、彼の擧動は最早以前の敏捷を缺いて居た。何と成れば、彼の思想は今や全然實際問題の上に向けられて居たからである。

『貴方が何と言つた處で、田舍の生活は矢張退屈ですね』と、ブラトノフは一同の後ろに隨いて歩きながら言つた。

『今日來た客は決して馬鹿な男ではない』と、同時に主人も考へて居た。『あの男は注意して聽いて居た。そして、言葉も愼重にして居る。』

一同露臺と向ひ合つた、硝子の戸一枚開けると庭園へ降りて行くことの出來る、小さな氣持の好い部屋に陣取つて、眠つて居る庭園の樹木の頂上に輝いて居る星を夢みるやうに眺め遣つた時、チヽコフは長い間感じたことのないやうな、恰度長引いた漂泊の後、再び故郷の屋根の下へ迎へられたやうな、更に錦上花を添へるためには、自分が願つて居た萬の事を或し就げて、最う十分だと言ひながら、巡禮の杖を傍へ投げ遣つたやうな、一種の快い感覺を經驗した。斯くの如く驚くべき効果を主人の說は彼の上に齎したのである。

其夜、彼は寢床へ這入つても長い間眠ることが出來なかつた。彼の考へが彼の眼を醒して置いたのだ。彼は空想でない、眞正の所領の持主には、如何して成ることが出來ようかと、そればかり考へ續けて居た。如何かして旨く例の死んだ農奴を抵當に入れて、雲の國に在るんではない、幾許かの所領を手に入れることが出來たら！　彼は

最う實際自分が、恰度コスタンツォーグロが自分に敎へて呉れたやうに、迅速に、而も愼重に、萬事を自分の眼で見張りながら、有らゆる百姓どもと自分で知合に成りながら、單に勞働と所領の支配に全身を打込みながら、萬事を支配して居る處を目の前に見るやうな氣がした。彼は最う今から自分が嚴重な秩序を定めた時に、又家庭用の機械の彈機が互に他を促進しながら、力强く働いて居る時に經驗するやうな愉快を味つて居た。仕事は立込んで來た。で、恰度麵粉が水車小舍の小麥から迅速に挽かれて出て來るやうに、貨幣が、而も硬貨が絶えず有らゆる種類の屑や廢物から抽出されるのだ。此家の主人は彼が個人的尊敬の念を感じた露西亞に於ける最初の人であつた。從來とても、彼は高い階級の官吏又は其人の所有物に對して尊敬の念を拂つて來た。が、其人の心だけに對して敬意を拂つたことは是迄決してない。有れば、コスタンツォーグロが最初の人である。我々の主人公は自分も此人に對して詭計を用ふることは不可能であると悟つた。加之、最一つの計畫が彼の心を壟斷して居た――卽ちクロブヨフの所領を買ふと云ふそれである。彼は一萬留布だけ自分の金子を有つて居た。又、一萬五千留布はコスタンツォーグロから借出したいものだと思つた。後者は既に實際富有に成らうと心懸けて居る人なら、何んな人でも補助する積りだと公言して居たからである。其餘の所用の金子は他の手段で手に入れなければ成らない――抵當に依つて、若しくは單にクロブヨフを待たせてゞも。それも亦確かに出來るだけの道筋は立つて居る。斯うして彼は長い間此問題を心に考へて居た。最後に最う四時間餘りも此一家を懷中に抱いて居たモルフェウス(睡眠の神)が、又チ、コフをも掴んで懷中へ入れて仕舞つた。彼は熟睡に陷つて、ぐう〳〵鼾を搔き出した。

第十五章　奢侈と赤貧

次の日萬事が極めて好都合に取纏められた。コスタンツォーグロは喜んで我々の主人公に一萬留布を用立てた。利息も取らなければ、證文も入れない――單に自分の手で書いた書附を渡しただけである。彼はチヽコフに自分の經營の下にある有らゆる物を示した。彼に在つては、一分間と雖も失はれない、何一つ無駄には走らない、村人の間には極めて些細な爭論さへ起らないのだ。懶惰者は何處にも見えない。百姓どもの顏には智慧と滿足とが輝いて居た。何も彼も一人で働くやうに、單純に且巧みに整理されて居た。森と耕地との相互交替もチヽコフを驚かさずには置かなかつた。此人は世の中へ出て人騷がせもしなければ、人類の幸福を確實にする手段に關して計畫も論文も書かないで、何れだけ多くのことを成し遂げたらう！　又、町に住んで料理店へ出入したり、磨いた床の上で舞踏したりして居る人間の生活は、何れ位無益なもの

であらう！　それを想ひ廻らしながら、チヽコフの地主に成りたいと云ふ希望はいよいよ益々強く成つた。

コスタンツォーグロは一緒に所領を檢査するために、クロブヨフの許迄我々の主人公と連立つて行かうと言ひ出した。チヽコフはすつかり好い心持に成つて居た。愉快な朝飯を終つた後で、一行は、ブラトノフも含んで三人、バヴェル・イワノヴッチの馬車に乘つて出立した。主人の空のブロリョッカ（圓型の四輪馬車）は其後から續いた。犬のヤルヴは道の上の小鳥を追ひ散らしながら、前に立つて駈けて行つた。コスタンツォーグロの森や耕地は街道の兩側に十五ヴェルストも擴がつて居た。で、其境目に着くや否や、有らゆる物が全然違つた光景を呈した。穀物は病持らしく、樹木は切株に變つて仕舞つた。クロブヨフの小さな村は其位置の極めて良好なのにも拘らず、すつかり荒れ果てゝ居た。未だ半建のまゝ殘つて、數年間誰も住んだことのない、新しい石造の建物が總てを壓して聳えて居た。又其背後に小さな古い地主の家があつて、こ

れは未だ住宅として用ひられて居た。一行が到着すると、主人は只今眼を醒したやうに欠伸をしながら、髪も梳らずに出て來た。年輩は四十餘りらしい。彼の頸半巾は横ッちよに結んであつた。外套にも補片が當つて居れば、靴にも幾つか穴が開いて居た。訪客の顔を見た時の主人の喜びは筆にも紙にも盡されない。恰も長い間別れて暮した兄弟にでも會つたやうに見えた。

『コンスタンチン・フョードロヰッチ君！　プラトン・ミカイロヰッチ君！　貴方方は好くまア私を訪ねて來て下さいましたね！』と、彼は叫喚いた。『まア好く眼を擦つてお眼に懸りませう。私は實際誰も最う訪ねて來て呉れるやうな者はないと思つて居たのですよ。誰でも傳染病のやうに私から遁出すのですからね。私が始終其奴等から金子を借りようとして居ると考へて居るんですね。えゝ、そりやア苦しいものですよ、苦しいものですよ、コンスタンチン・フョードロヰッチ君！　斯う成つたのも自分が惡いのだとは重々承知して居ますがね。だが、如何したら可いんです？　豚は豚の運命を自分で儲けたのだ。御免なさいよ、皆さん、斯んな衣服でお出迎へをして。御覽の通り此靴は穴だらけですよ。何か牛乳か果物でも召上りますかい。』

『そんなお心遣ひには及びませんよ。私どもは取引上の用事で參つたのですからね。これが貴方の所領を買受けようと云ふバヴェル・イワノヰッチ・チヽコフさんです』と、コスタンツォーグロが言つた。

『私は貴方と御懇意に成るのを心から喜んで居ます。何卒私と握手して下さい。』

チヽコフは其男に兩方の手を差出した。

『バヴェル・イワノヰッチさん、それでは一つ問題の所領を見て頂きませうかね。ですが、皆さんはお晝飯を召上つたのですか。』

『えゝ喰べました』と、コスタンツォーグロは其問題を斥けようとして、口早に言つた。『私どもは貴方の御歡待に甘へようとは思ひませんよ、直に歸つて行く積りですからね。』

『それぢや、直樣出懸けませう』と、クロブヨフは帽子を執りながら言つた。『これから行つて、私のだらしないさと不見目さ加減を見て下さい。』

客は皆帽子を執つて、一同徒歩で村の見分に出懸けた。殆ど總ての道路の兩側に見すぼらしい小舍が立ち並んで居た。窓の壞れた處なぞ、好く破れた股引で塡めてあつた。

『左樣だ、これから行つて、一つ私のだらしないさと不見目さ加減を見て貰ひませう』と、クロブヨフは繰返した。『勿論、貴方方は私の許なぞで何にも召上らない方が好う御座んしたよ。ねえ、コンスタンチン・フョードロヰッチさん、此家には雛ッ子一羽居ませんからね。私はそんな切迫詰つた境涯に居ますよ。えゝ、眞個ですとも！』

彼は溜息を吐いた。そして、コンスタンチン・フョードロヰッチからは餘り同情を受け得ないことを覺悟してゞも居るやうに、プラトノフの腕を執つて、碇かり自分の胸へ當てがひながら、一緒に先に立つて歩き出した。コスタンツォーグロとチヽコフとは後に殘つた。そして、これも腕を繋ぎながら、稍離れて前の組の後から隨いて行つた。

『そりやア苦しいものですよ、プラトン・ミカイロヰッチ君、眞個苦しいものですよ』と、クロブヨフはプラトノフに向つて言つた。『貴方方には何んなに苦しいか迚もお解りに成らないでせうね。金子もなければ、食物もない、お負けに履く物もない！　そんな言葉は確かに貴方方には知れて居ない言葉でせうからね。で、これが未だ私が若くて獨身であつたら何でもないのですよ。ですが、年を老つてから、女房や五人の子供に傍へ緊着いて居られる時、斯んな災難に遭つて御覽なさい、知らず識らず憂鬱にも成りますよ。眞個憂鬱に成りますよ。』

『ふむ。でも、今度貴方が所領を賣拂はれたら、何も彼も都合好く成るんぢやありませんか。』

『都合好く成る、實際！』と、クロブヨフは横に手を振りながら叫喚いた。『悉皆借金の口へ取られて仕舞ひますよ。で、後には一千留布も殘らない位でせうよ。』